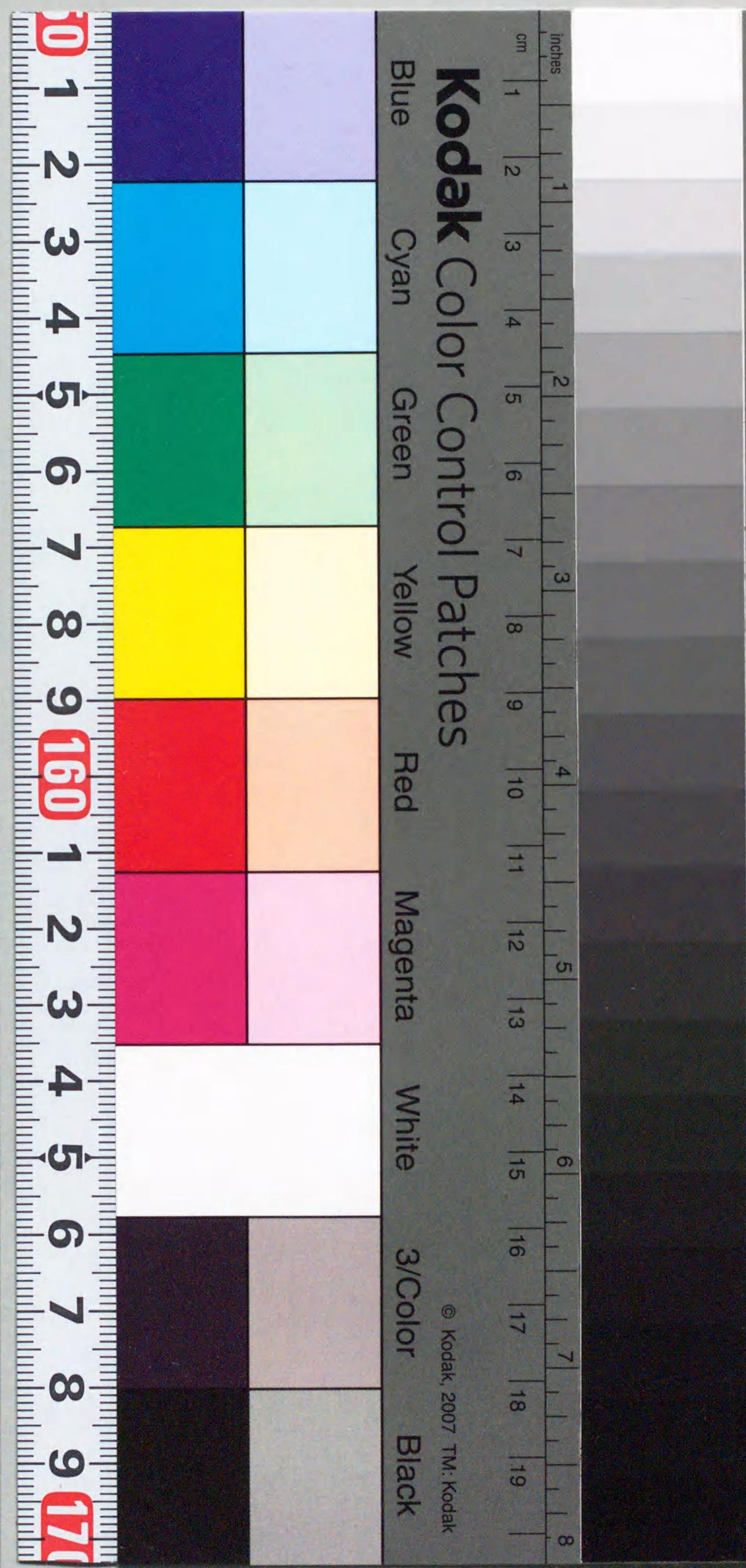


081.7  
N627  
H

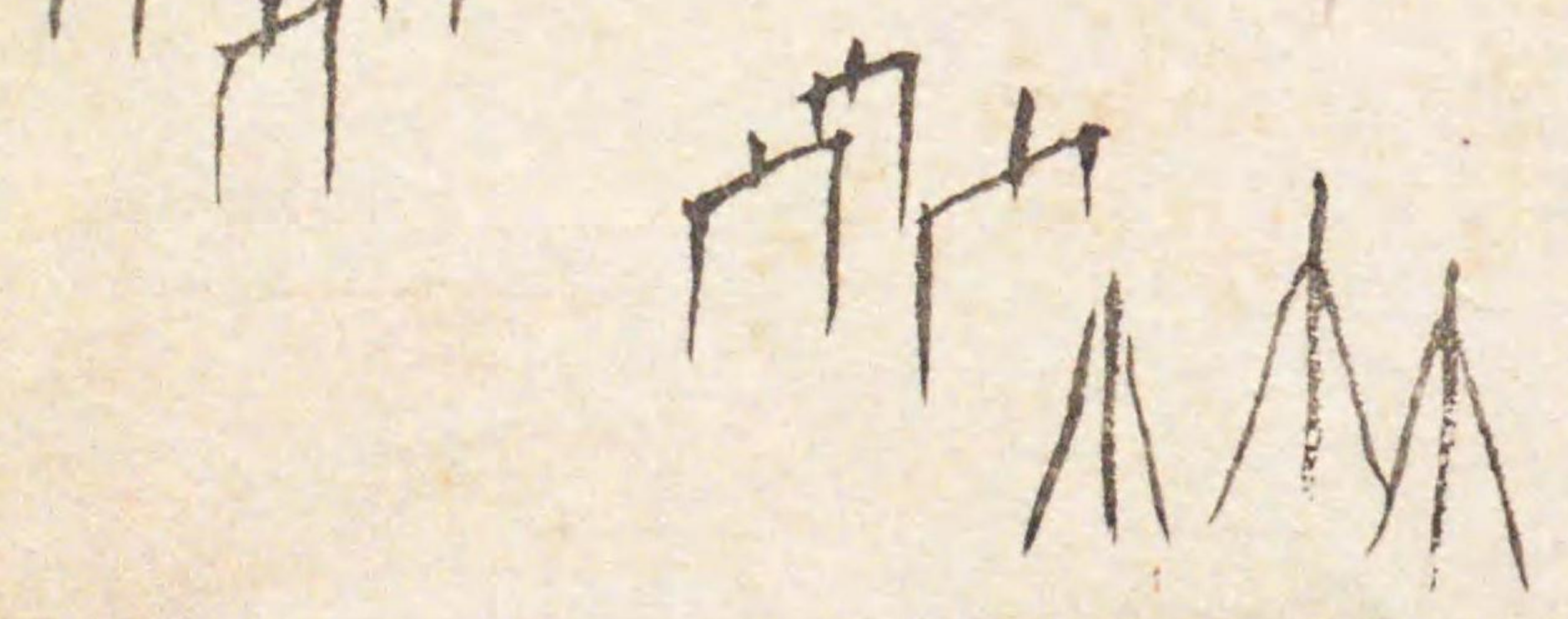
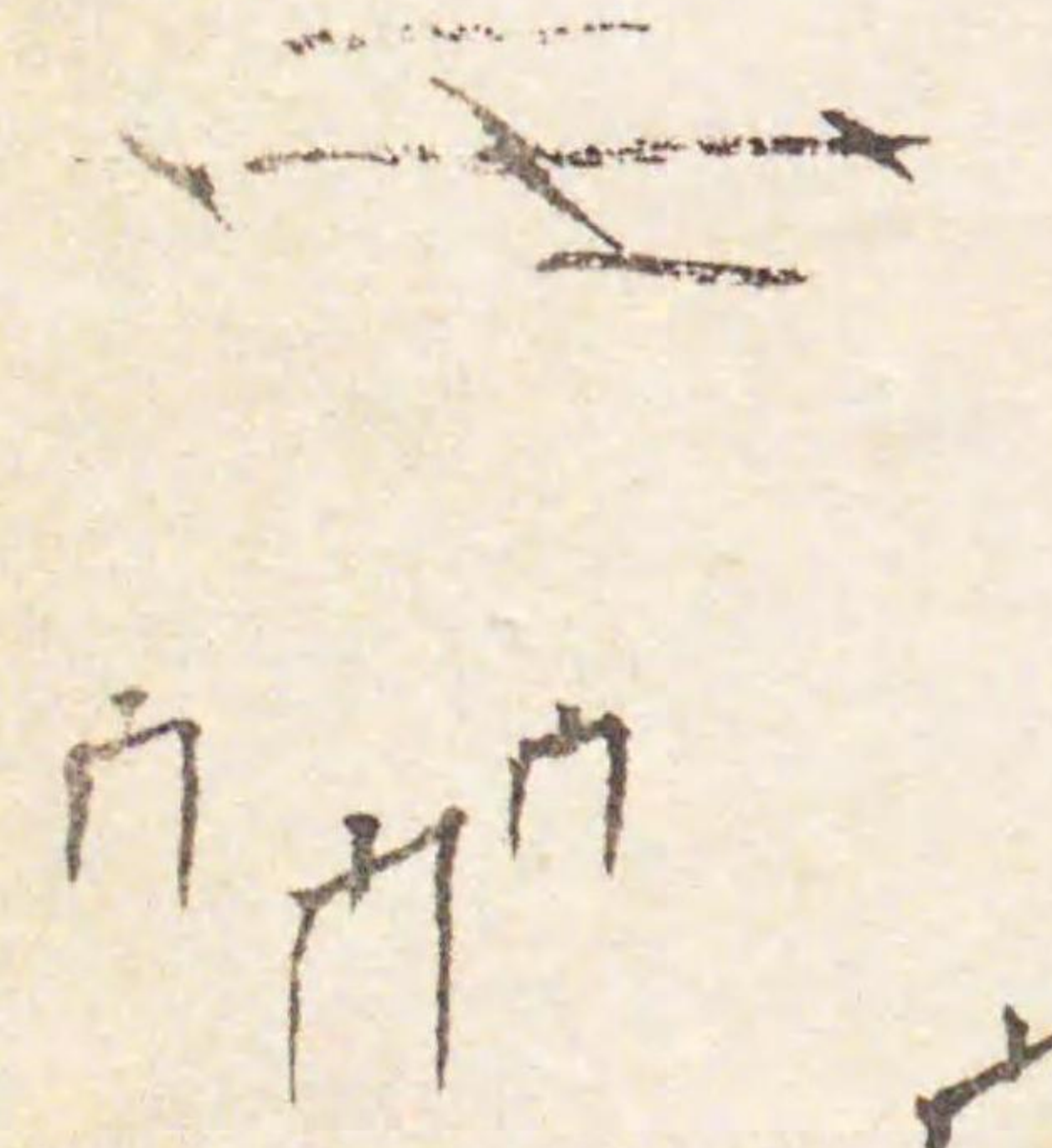
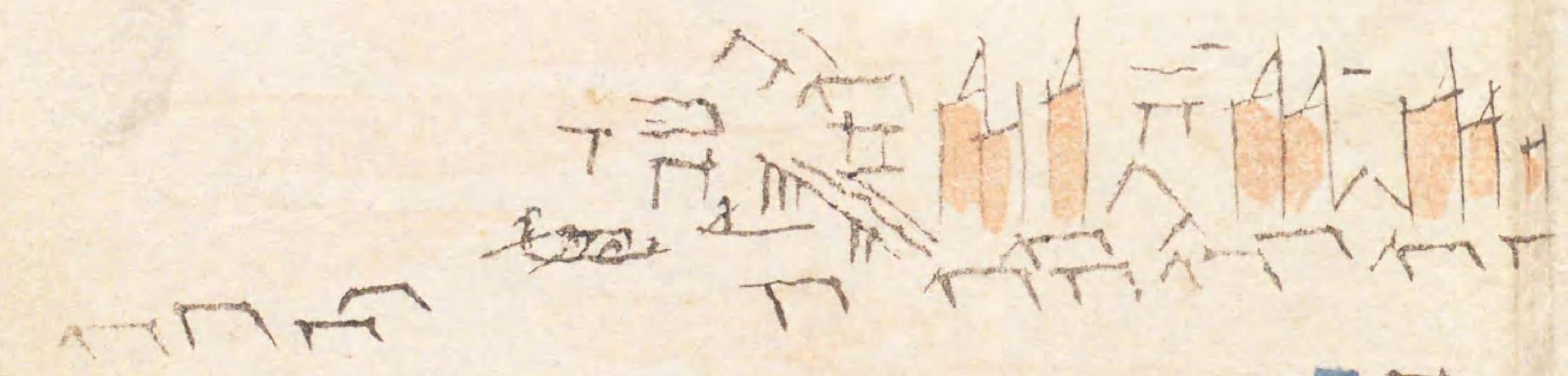
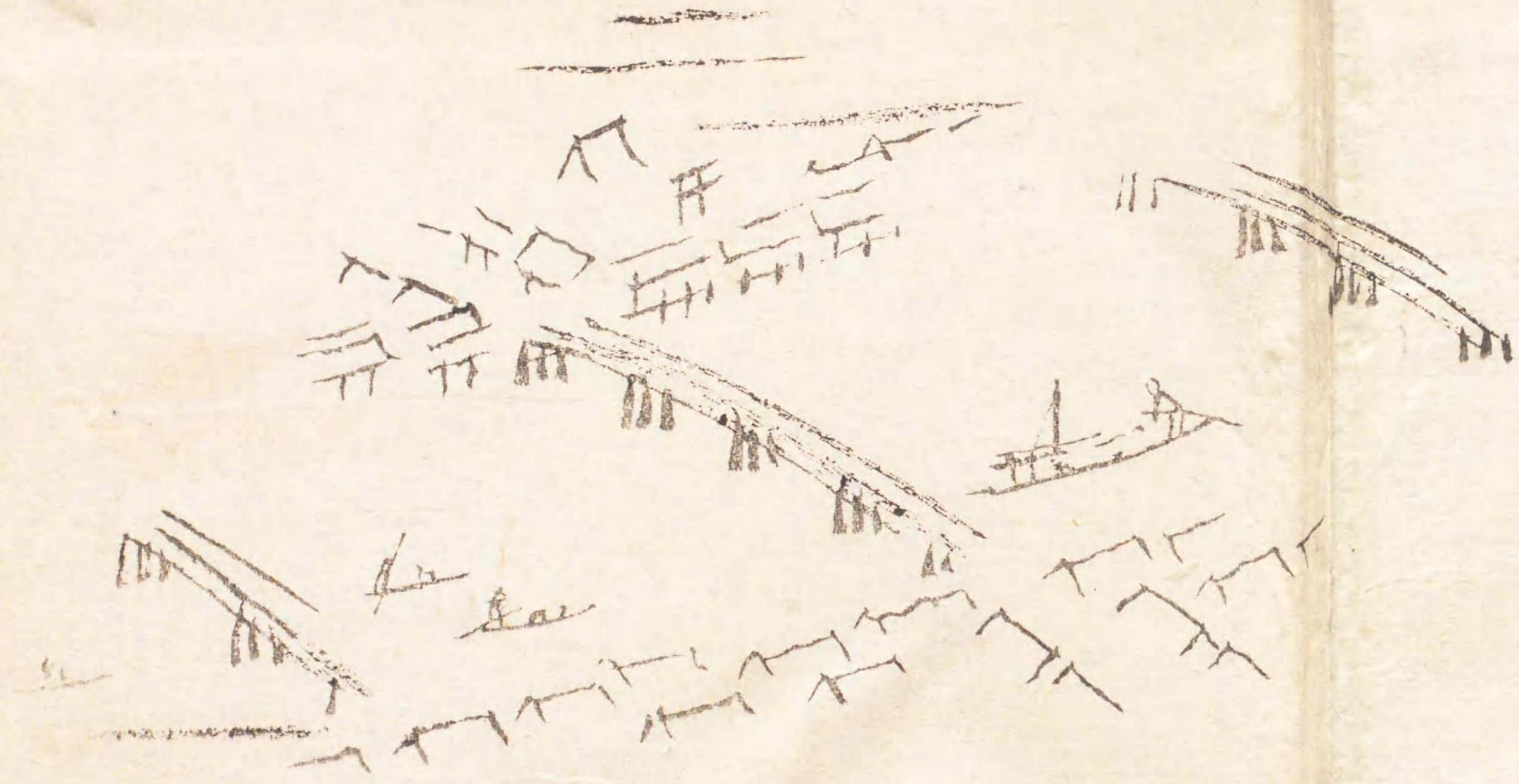


00253453





8M-1



A square red seal impression located in the bottom right corner of the right page. It contains two Chinese characters in seal script, which are likely the artist's name or studio name.



1





卅 8M1  
題し有

浪  
連  
簾  
書  
一





081.7 N 627 H

攝陽奇觀

其一



253453





## 解題

一 我が『浪速叢書』の『第一』には、濱松歌國著『攝陽奇觀』六拾冊のうち、その『一』から『九』までを収めることにしました。原本は歌國自筆の稿本で、未だ世に刊行せられず、大阪島之内鰻谷なる吉野五運氏(人參三臟圓本舗)が祕庫に永く珍襲されてゐたものです。

一 吉野家は浪速に於ける三百年來の舊家で、家傳の人參三臟圓が始めて發賣されたは享保年間(二三七六—二三九五)でした。當時、吉野家の主人は壽齋といひ、後に法橋に敍せられた人で早く長崎に遊び、醫藥の道を清人周岐來に問ひ、三臟圓の調劑は其の周先生から授けられたといふことです。この周岐來は醫道の大家で、遙々江戸に聘せられて八代將軍の病床に侍したこともあると傳へられてゐます。

一 享保以後の吉野家は、この人參三臟圓によりて年々に富み榮え、代々の主人は其の通稱を『五運』と呼ばれてゐました。寛政六年(二四五四)印行の『虛實柳巷方言』のうち、『粹株大盡株』の項と、『素人芝居』の演伎者との名寄の中に『五運』の二字が見出されます。粹であり、大盡であり、時には素人芝居の演伎者として舞臺に上つたことのある五運氏の血を引いた五代目五運



氏は、庸齋といひ、千もとの花ぬしと號してゐましたが、當時、梨園の花形俳優であつた三世中村歌右衛門(梅玉)を大の最眞にしたこと、并に、後年、歌右衛門帷幕の狂言作者であつた濱松歌國が、屢次吉野家に入出入してゐたことは、推測に難からぬこと、思はれます。

一 歌國の傳記は由來不明瞭な點が多々あります。それに就き本叢書の刊行に多大の同情を寄せられた數氏の調査を基礎に、未定稿ながら其傳を綴つて置きました。(別項濱松歌國傳參照)

一 此の『攝陽奇觀』が京阪讀書子の話題に上つたは、明治四十二年三月、大阪府立圖書館に催された大阪市史編纂終了記念展覽會以後の事で、此の書の一部が公衆の目に觸れたは此時が最初でしたが、それは唯だ陳列さればかりで親しく手に取つて見られなかつたのです。その門外不出の珍書が今回其の所有主たる吉野家の快諾を得、茲に我が浪速叢書の中に加へ、第一に刊行することとなつたばかりか、それが著者歌國の歿年より數へて恰も壹百年に相當することになつたは、何といふ深い機縁でせうか。

一 原本六十冊の此の『攝陽奇觀』は、その量に於て本叢書の五卷分を占め、最初の此の一卷の中には、歌國の著として廣く讀まれてゐる『攝陽落穂集』、『筆拍子』、『南水漫遊』等の材料が殆ど包含されてゐます。以後の四卷(原本の『十』より終に至る五十一冊)は『攝陽年鑑』即ち大坂年代

記で、第一卷とは全くその趣きを異にしてゐます。まかし相互に關聯した記事も随分少くありません。猶ほ茲に書き添へて置きたいことは、原本『攝陽奇觀』の『五十一』より以降は、歌國歿病後、何人かゞ代筆したもので、歌國歿後七年目の天保四年(二四九三)まで其の稿を續けてゐることです。この執筆者は果して誰でせうか。これは興味ある疑問として本會は今、本會と因縁深き散木會々員諸氏と共に、その調査研究を重ねてゐる次第です。

一 『攝陽奇觀』を通覽して、直ぐ目につくことは、文化文政時代の用字法が、随分今日と比べて相違がある事です。例せば、今の人が普通に『浪人』と書くべきところに『牢人』と書き、『亂暴』とあるべきところに『亂妨』の二字を用ゐたり、『團』の一字で『うち』と讀ませてゐます。是等は當時を追想し得る好箇の資料として、原本の通りに活字を埋めて置きました。それに『島』の字にしても、時に『嶋』と書き、『島』とかいてゐます。これらも總て原本通りの其の字を用ゐてあります。これほどの細心で校正をしましたが、まだ誤りがあるかと氣がかりです。

一 原本の面影を傳へる、そのことが『浪速叢書』の目的の一つです。それゆゑ原本が平假名、片假名を混用してゐる場合、それが原本が片假名なれば片假名、平假名なれば平假名と、力めて原著者の用字を尊重することに致しました。唯だ、俗字を用ゐてゐる場合、例へば『場』といふ



字を『場』に、『秘』を『祕』といふ工合に正字に改めて置いた文字もあります。これは校訂者の潔癖から来たこと、寛恕を希ふ次第です。

一 原著者が本文の鼈頭に書き入れたり、また貼紙をしてある部分は、總てこれを本文中に入れ野線で圍んでこれを區別して置きました。これは鼈頭に組み入れると、印刷に附する際、一部分脱落の恐れもあり、讀者諸氏が軽々に看過される場合も少なかるまいとの考へから新らしく試みたものです。

大正十五年十一月

### 濱松歌國傳 (未定稿)

濱松歌國は浪速の人、通稱は布屋清兵衛(大阪市史には「市兵衛」とあり)、號は氏助(一説に曰く氏助は通稱なりと)、また颯々亭南水と號し、島之内布袋町(太左衛門橋北詰一筋西、道頓堀少し内より北、即ち「現今」富田屋の西角を北へ折れて少し北へ行つた邊)に住んでゐました。その終焉の地も恐らく其處であつたでせう。

彼の生れたのは安永五丙申年(二四三六)であるとは、諸書に散見しますが、その誕生日に就て未だ記したものが見當りません。まかし彼が十年の努力を傾注した。『攝陽奇觀』の三十四冊目に、安永五年に於ける大坂の出來事を書き記し、更に其年の板行曆を貼付け、特に正月八日の項に一つの小さい○印をつけてゐます。この○は果して何を意味してゐるのでせう。彼は元和元年大坂落城の日以來、大坂市井の出來事を、能ふかぎり詳細に筆に上したのですが、その新年の曆を貼付けてゐるのは、唯この安永五年、即ち彼が生れた年だけに限つてゐます。由來、大坂の俗、自己の生年の曆を各自に所有する習慣があります。これから考へて、その正月八日の項に書き入れた小さい一つの○印、それは彼が生涯記念すべき誕生日を、みづから筆を執つて書き入れたのではないでせうか。若しこの推測が的中したとすれば、彼の傳記に關する一箇の新發見でございます。

江上脩治郎氏が最近の調査によれば『歌國の家は泉州木綿を商ふ問屋でした。天明六年(二四四六)、大坂に木綿問屋の株が二十五あつたといひますが、歌國の家は、たしかに其中の一軒でした。その以前、今の長堀橋筋一



丁目から周防町に至る間は油町で、堺筋より一筋西の辻に布屋一門の家があり、その油町にあつた天鷲寺との關係は浅いものでなかつたさうです。後年、この天鷲寺は下寺町口繩坂を上つて東に行當つた谷町筋に引越しましたが、布屋清兵衛即ち我が濱松歌國の墓は其の天鷲寺にあつて、彼の家紋は彦根橋ひこねたばしです」と。

木綿問屋の息子に生れた歌國は、その青少年時代を如何に暮したかは『戯作が好きで歌舞伎に精通してゐた』と諸書に書かれてゐるので略ほ想像されます。彼が或年の評判記に、三代目大谷友右衛門を評して其怒りを招き、故障を申込まれて、その以後、評判記の筆を絶つたといふ挿話が傳へられてゐます。まかしこれは三代目でなく二代目友右衛門でせうと思はれます。何となれば、嵐舎丸が三代目を襲名したのは天保元年(二四九〇)以降のこと、即ち歌國歿後三年以後のこと、その嵐舎丸は、伊原青々園氏著『近世日本演劇史』によると『三世友右衛門の名は京坂に於て嵐舎丸によりて襲がれしが甚だ著名ならず』と書かれてゐます。いづれにしても、歌國が『評判記』に書いた友右衛門は、明和六年(二四二九)に生れた天保元年三月二十四日六十二歳で歿した二代目でなければ年代の辻褄が合はなくなつてきます。

木綿問屋の家に育ちて、芝居好きの若旦那である歌國が、いつから狂言作者の群に入つたか、それは今正確に知ることは出来ませんが、吉野五運氏所藏『許多脚色帖』によれば、彼が濱松氏助の名で始めて芝居の番附に顯れたのは寛政十二年(二四六〇)即ち彼が二十五歳の時でした。それ以來文政二年(二四七九)に至る二十年間は、氏助の名で番附面に載つてゐます。彼が始めて濱松歌國の名を用ゐたのは文政三庚辰の年(二四八〇)即ち彼が四十五

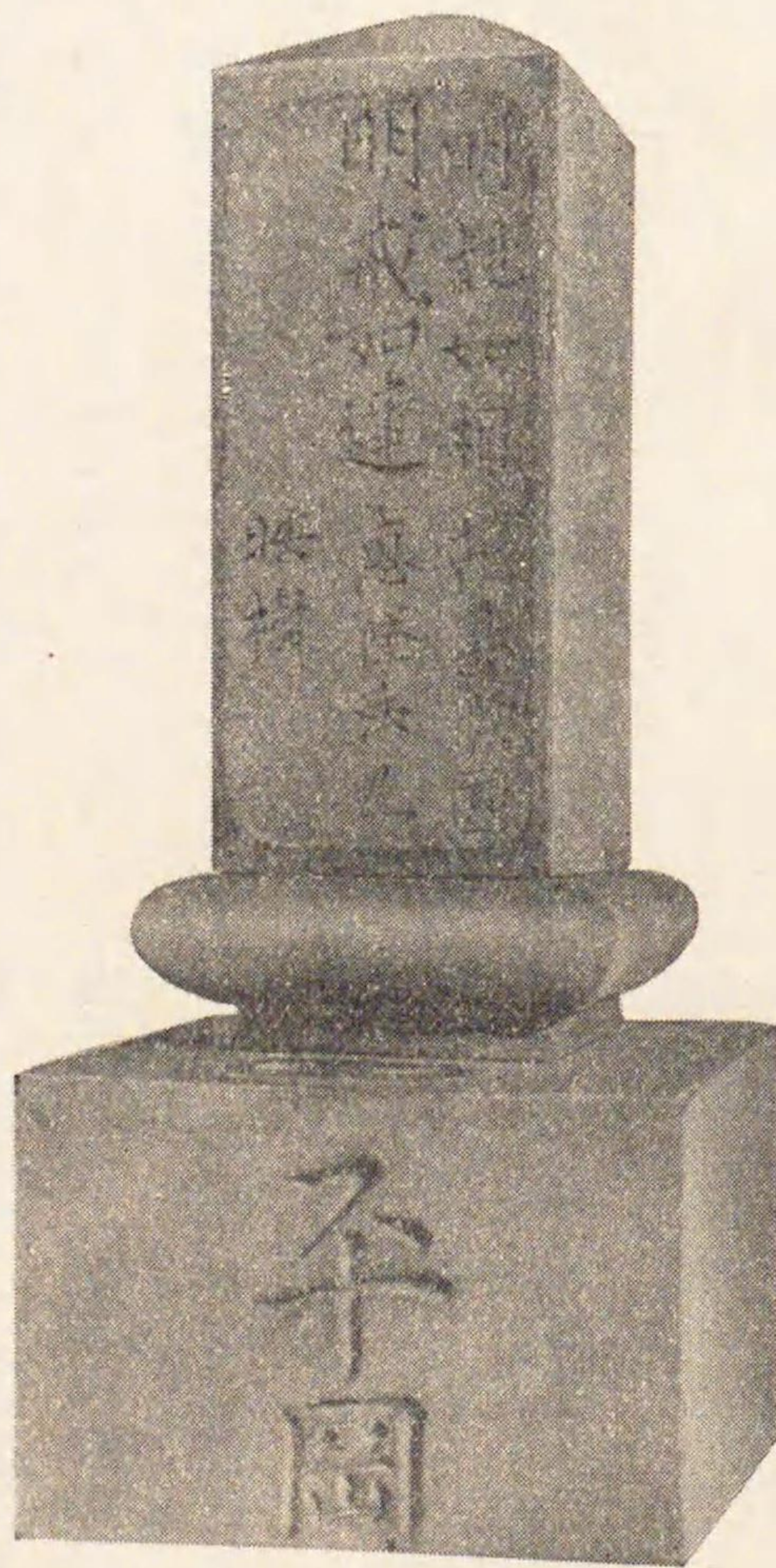
歳の時で、歌國の『歌』を『哥』または『詞』とも書き、濱松の『松』を時には『待』と書いてゐます。

従來の諸書には、狂言作者としての彼の名を、氏助、歌國の二種とのみ書いてゐますが、『許多脚色帖』を繰り返して見ますと、彼は八重牆やへかき歌國と稱した時代のあることが發見されます。『八重牆』は『いづも八重垣』の古い歌から來たもの、歌國の『歌』は三代歌右衛門の『歌』からと解釋出來ますが、『國』の字は何處から來たのかと、過般も四五の人たちと會

合の席で話しましたら、坐に三宅吉之助氏が居られて、その『國』は『出雲お國』の『國』でせうと簡単に説破されたのでし×

二つとも頗る興味ある解釋であると思はれます。

三代目中村歌右衛門が帷幕の狂言作者となりて、濱松歌國の名を用ゐたのは文政三年(二四八〇)以後のこと、その以前、彼は『狂言作者奈河晴助の引立てをうけてゐた、そして或は晴助の知遇によつて芝居へ出勤したのではあるまいか』との意味を、曾て水谷不倒翁は發表されてゐます。この晴助對歌國の關係については、後日更に



×た。それにしても『濱松』の二字は二度の質問を致しますと、田中吉太郎氏は『それは大伴の三津の濱松でせう』と明瞭に答へられたのは



研究を重ねて發表する機會があらうと存じます。

彼は文政九年(二四八六)大病に罹り、一たび輕快の身となつたが、翌文政十年(二四八七)丁亥二月十九日に歿しました(一説に彼の命日は十二月十九日と)。享年五十二。『京攝戲作者考』には法號『花鳥歌國信士』とあります。

彼の墓は天龍寺にあると傳へられてゐますが、大坂に天龍寺といふ寺院はなく、小橋寺町に天龍院といふがあります。彼はその寺院の土の下に永い眠りに就いたのかと、今年盛夏の候、田中吉太郎氏を煩して、その天龍院に親しく院主を訪ひ、無縁の墓の苔さへも掃つてもらつたのですが、終に『花』とも『歌』とも書かれたものが見つからなかつたのでした。その後、江上脩治郎氏の熱心なる調査によりて、天龍寺と傳へられたは天鷲寺の誤りであること。その天鷲寺は布屋一門との關係も深く、同寺の過去帳には、布屋清兵衛といふ名が屢次見つけられ、『文政十年二月十九日亡、布屋清兵衛、五十二歳』と書かれてゐるのが、即ち我が濱松歌國であることを明らかに此處に報告することが出来るやうになつたのです。

この江上氏の調査報告によりて、歌國の命日が二月十九日であることが確かめられると同時に、『京攝戲作者考』に書かれた『花鳥歌國』といふ法號が『花鳥歌國』の誤謬であることが現實に證明されたのでした。間違つた法號や、間違つた忌日を傳へられてゐた歌國、それが今、歿後百年の今日、始めて江上氏によりて世に報告されることになつたのを、地下の歌國、若し靈あらば、どんなにか嬉しからうと思はれます。法號の『花鳥』の二字、それは浪花の島之内でせうと、解釋する人も無いではありませんまい。

大正丙寅十一月念三、自分は本叢書刊行會と因縁淺からざる木村敬二郎、橋本耕之介、兩氏と共に、雨後の泥濘を踏んで天鷲寺を訪ひ、本堂の後に西面して建てられた我が濱松歌國の墓に詣でたのでした。同寺の過去帳には『花嶋歌國』とあるが、墓石には『花鳥歌國』と彫まれてゐます。百年前のむかし、茲に永遠の眠りにつゝいたこの人の面影を思ひ浮べて、佇んでゐますと、はらくと落ちくる木の葉の呟きも何となく意味ありげに聞えて、黄昏の時を、やがて歸路に就いたのでした。

附記。濱松歌國の事については、猶ほ研究中に屬することが随分にあります。殊に墓の臺石に刻まれた平岡の二字は、果して布屋清兵衛方の苗字であつたでせうか。どうか。それに歌國の著書并に狂言作者としての彼の年譜等に就ては、他日補遺することに致しませう。

大正十五年十一月二十五日夜



攝陽奇觀「其一」目錄

卷之一……………自一頁 至六〇頁

大坂地名	金城	蓮如井戸	御茶の水	安國寺坂	算用曲輪	虎勇威を畏る
犬虎ともよ噬	秀頼公の御後見	後藤味噌	古田織部數奇屋	小西氏の系圖并ニ指物	會呂利諷諫	
長門國	大坂御城内御殿御座鋪向拜見御問順覺書	大坂御城米	大坂御城追手より近所道法	大坂御城米	大坂御城追手より近所道法	
河州佐太村	玉造口御米庫	栗山	大霸王樹	眞田山	一柳監物墓	眞田古城
越前出張古城	加賀出張古城	粟樂町	鼠呂利屋敷	越中井戸	銀十郎潜居	愛宕町
鎮西社	十三間梅	八間梅	石山に造營	楠左衛門正具	〔大阪之部〕	戲詩選 浪華ノ風
船場	今橋通	十三人町	浮世小路	高麗橋通	元鞆町	道修谷
新御靈	あやめが淵	圓江	座摩社	久太郎町	大坂南坊	久寶寺町
博勞町	順慶町	初瀬町	船町濱	京町堀	勝軍地藏會	阿波座
阿波座鳥の考	四橋	四橋烟管	座摩宮猿田彦	金屋町神輿太鼓	三軒屋	ヲジャレ
新町の名畫名器	高嶋屋奇石	〔天滿郷〕	菟餓野	大坂三郷	堀川惠美須畧縁記	北埜錢觀音
〔淀川之部〕	磯島	地の高低	礮島の忍女	江口の謠曲	守口濱	淀川名所の文
夜船の舟人	淀川すはひ女	辰巳屋の鼻祖	船の名目	過書船の虚談	關船	ピンシヨ

卷之二……………自六二頁 至一三四頁

〔東生郡〕

蛙岩

鶴橋

うぶゆの雙月

〔西成郡〕

北埜大融寺

天筆如來畧縁起









額風呂 額の小三の傳 かな屋金五郎(難波役者評判)  
南詠戀抄書(道行情のかけあんど) 金五郎ぶし 岩井風呂  
於妻格子 於徳庫 北條庫 髻髻遊井筒  
六軒町 小夜格子 重井筒屋 色駕籠 小野屋膏藥 新屋鋪 石の次左衛門 磯多ヶ崎

卷之六 自三七頁 至三六頁

〔南水雜誌卷之二〕高津 梅川 高津氏由緒 高津翁 釣鐘谷 由縁齋寓  
寺島氏由緒 寺島ノ清水 高津瓦 難波焼 高津花形鹽 高津湯豆腐 高津湯豆腐  
高津植木屋 高津黒焼 元智撞木 極樂橋 淨國寺 生玉坂生玉新道 堀止雙井戸  
安井氏由緒 道頓堀 日本橋 新中橋 太左衛門橋 惠比須橋 大黒橋  
汐見橋 富賀里 幸町 幸町論伽權現 高津新地 高津新地御藏跡 高津新地錢座  
半時庵別業 糸引觀音 高津新地妓家 黒門 黒門の春風 樋の上岩起樋の上昆布  
長町 痢癩談 長町毘沙門 長町傘 長町千生弧 地鳥 長町裏傘干場  
長町裏裏殺事實 よこね 松山味會 津川紙店 雲井烟艸 大正鯉 備前屋湯豆腐  
奈良茶飯 錢屋餓頭 和國辨當 切賣鮓 二階庭ノ舊地 俄舞臺 逆倒座敷  
矢倉屋鋪 川水舟 千日寺堀井ノ水 道頓堀秋田屋ノ水 秋田屋餓頭 前垂島

卷之七 自三七頁 至四三頁

〔南水雜誌卷之三〕浪花茶里八景 元伏見坂町 大建寺 坂町裏天神 法友寺  
坂町泥龜屋裏 奴塚 七軒茶屋 芝居側 道頓堀花みち 大坂三郷芝居櫓開發  
享保年間大坂之圖 中の芝居持主北村の圖 色葉茶屋 役木戸 法善寺 法善寺地藏之由來  
法善寺墓參 竹林寺 自安寺 法場 千日墓所 俗人夜念佛 才太郎畑

卷之八 自四三頁 至四四頁

齒神 雷神木 法花堂 堀内 難波新地 南地野面 常舞臺  
大相撲場 吉田屋ノ庭 借馬 猿茶店 蛙ヶ池 瀧湯 呑龍茶  
選樹院 將門茶屋 幽靈新地 南地切店 入堀川 楊柳堤 柳ノ清水  
松の堤 難波 牛頭天皇社 大門坊 瑞龍寺 新興文治翁石碑 半時庵淡々墓  
二樹二后松 三好氏正慶尼遺跡 難波水藍 難波胡蘿蔔難波瓠瓜 木津 難波骨接 難波村杜鵑花  
豆茶屋 藥湯 人參獨活寄生湯 難波のぼうた 木津 難波骨接 難波村杜鵑花  
十三間川 今宮村 今宮神社 廣田社 浮名どころ 名産閣の夜 上人川  
今宮村庄官 十萬堂 河伯閉居(蜘蛛輿に乗て年禮に行話 落書を以て遊興を妨る話 歌舞妓衣裳にて茶席に列る  
話) 並木千柳閑居 並木亭酒店 藥湯 一里塚 關家口

卷之九 自四五頁 至五六頁

男色ノ論 江南氣色の森 瀨川路考傳(みさほぶみ 無間の鐘 やういふたぶし唱歌 衆道細見の書 西鶴大鑑の一節)  
優家自筆書畫の話 近松半二名言 新題百首の中に 田樂 唐山勾欄之事 通り札 吉宗公の幼時  
宴曲 親方といふ通稱 役者給金 役者給金渡りといふ事 一代記藝評權輿(一蝶郎郵枕) 當世痴人傳(大村屋權右衛門 端山圖  
立巡 閃燭 役者目利講 俳優金毘羅梅 是るあそび 千日前幫間店  
南 東阜 桂井蒼八松嶋茂平次 雁平)

卷之九 自五五頁 至五六頁

口宣 淨瑠璃諸流略系譜 石川五右衛門辭世 石川五右衛門 遊君三世相の一節  
竹本筑後様の序 近松門左衛門の序 かゝり花(豊竹麻律祝ひの言葉) 奈河の流れ 音曲商賣往來 音曲商賣往來  
淨瑠璃物まね音曲賊 日本五山建仁寺供養(番附) 花鬘勢會我(番附)繪番附(はぎ大めう 花ぬすびと 津國女夫池(近松門左衛門作)



江州打出濱(繪番附)

金門五山桐(繪番附)

額見世戲場簾

附記 攝陽奇觀原本ニハ往々表題ノナキモノアリ此ノ目錄中右側ニ△印アルハ校訂者ガ假ニ表題ヲ付シタルモノ、又表題ノ頭文字ノ右側ニ○印ヲ付セルハ挿圖アルカ又ハ原本ノ一部ヲ凸版ニセルモノ



# 陽奇觀 卷之一

浪速 濱松歌國輯

## ○大坂地名

攝陽群談ニ云 攝津一州ノ府諸國海陸道路ノ要津廣大ノ地也土農工商ノ民家<sup>(囊)</sup>並ブ市店ニ立ツテ萬物求ムルニ不足ト云コトナシ故老俗傳ニ云ク難波ノ都津泊等ハ古歌ニ寄テ所<sup>(兜)</sup>求アリ大坂ノ市中ニ郡ヲ分ツコト古語俗傳ニモ證不詳大<sup>(堀)</sup>概論之今ノ東横堀ヨリ東ヲ東生トシ西ヲ西成トス或ヒハ又鹽町口瓦燒場三軒屋下難波等ヲ兔原ノ郡ニ屬スルノ説アリト云トモ其ノ證所取ナシ又谷町筋ヲ限リ南ハ生玉天王寺ニ至ルヲ東生トシ西ヲ西成ノ郡ニ屬ス大略准<sup>(堀)</sup>之歟 上古ハ東生郡ヲ難波大郡ト云 西成郡ヲ難波小郡ト云 ……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ…

古書本文和歌大郡小郡等ノ古名ニ因ッテ考<sup>(堀)</sup>見ルニ雖<sup>(堀)</sup>不<sup>(堀)</sup>中<sup>(堀)</sup>不<sup>(堀)</sup>遠<sup>(堀)</sup>以<sup>(堀)</sup>是亦大坂ト號ケ始ルノ故緣不詳 日本書紀 第十一卷 仁德天皇廿二年ノ紀ニ春正月天皇納八田皇女將爲妃時皇后贈答歌曰。

阿佐豆磨能<sup>(鳥)</sup>避介能<sup>(鳥)</sup>鳥<sup>(鳥)</sup>介多那者<sup>(鳥)</sup>珥<sup>(鳥)</sup>彌<sup>(鳥)</sup>致<sup>(鳥)</sup>喻<sup>(鳥)</sup>區<sup>(鳥)</sup>茂<sup>(鳥)</sup>能<sup>(鳥)</sup>多<sup>(鳥)</sup>愚<sup>(鳥)</sup>譬<sup>(鳥)</sup>豆<sup>(鳥)</sup>序<sup>(鳥)</sup>豫<sup>(鳥)</sup>枳<sup>(鳥)</sup>云々

ト部兼永釋ニ云ク阿佐豆磨 朝妻也在<sup>(鳥)</sup>難波地名<sup>(鳥)</sup> 避介能 所ノ名鳥<sup>(鳥)</sup>瑳介<sup>(鳥)</sup>小坂也 云々

故老曰小坂今東生郡天王寺村相坂ノ名トスルモノ歟後世民家四方ニ<sup>(堀)</sup>薄<sup>(堀)</sup>リ村民繁榮シテ竈ノ烟賑アヘリ因テ以テ時ノ人小坂ヲ轉シ大坂トスルヤ明應年中大坂ノ號アリ關白秀吉公築<sup>(堀)</sup>城郭<sup>(堀)</sup>之後專ラ要津ト成テ如<sup>(堀)</sup>モ今ノ廣大ナル事



仁徳治世ノ帝都ニ超タリ

蘆分舟ニ云 大坂 いつれの時にか大坂茶屋といふ名によるとかや今の嶋屋町の小坂これ也尋べし

古老云 東生郡は今の谷町筋東側より東をいひ西成郡は谷町筋西かはより西をいふ

東生は生の字 西成は成の

字を用ゆ ……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ…… 大坂は原東生郡の内小坂村といふ一村の名也都て此邊北より南に至

り山岸の形あり東高く西低うして地面坂のごとし故に後世大坂と呼び 御治世以來土地日増に繁昌なし人家西成郡に跨るのみならず竈は東より多く成たり

難波丸綱目ニ 上町と呼ふは京橋より大坂に入金城の邊より西は東横堀<sup>(堀)</sup>とて高麗橋本町橋農人橋等の堀筋を限りとす此所は古より住吉大江の岸の上すぢなるゆへ東堀より西船場の地よりは町ニ坂有て岸通り高し故ニ上町といふ也東堀といふも船場より東に有ゆへ東堀といへり上町よりは西なるゆへ上町にては左はいふべからず

因ニ云 或人大坂といふ事を書時に心得置べきは大坂の坂の字を土篇<sup>(土)</sup>ニすれば土に反ると忌べき事なるゆへ<sup>(阜)</sup>土篇に書となり

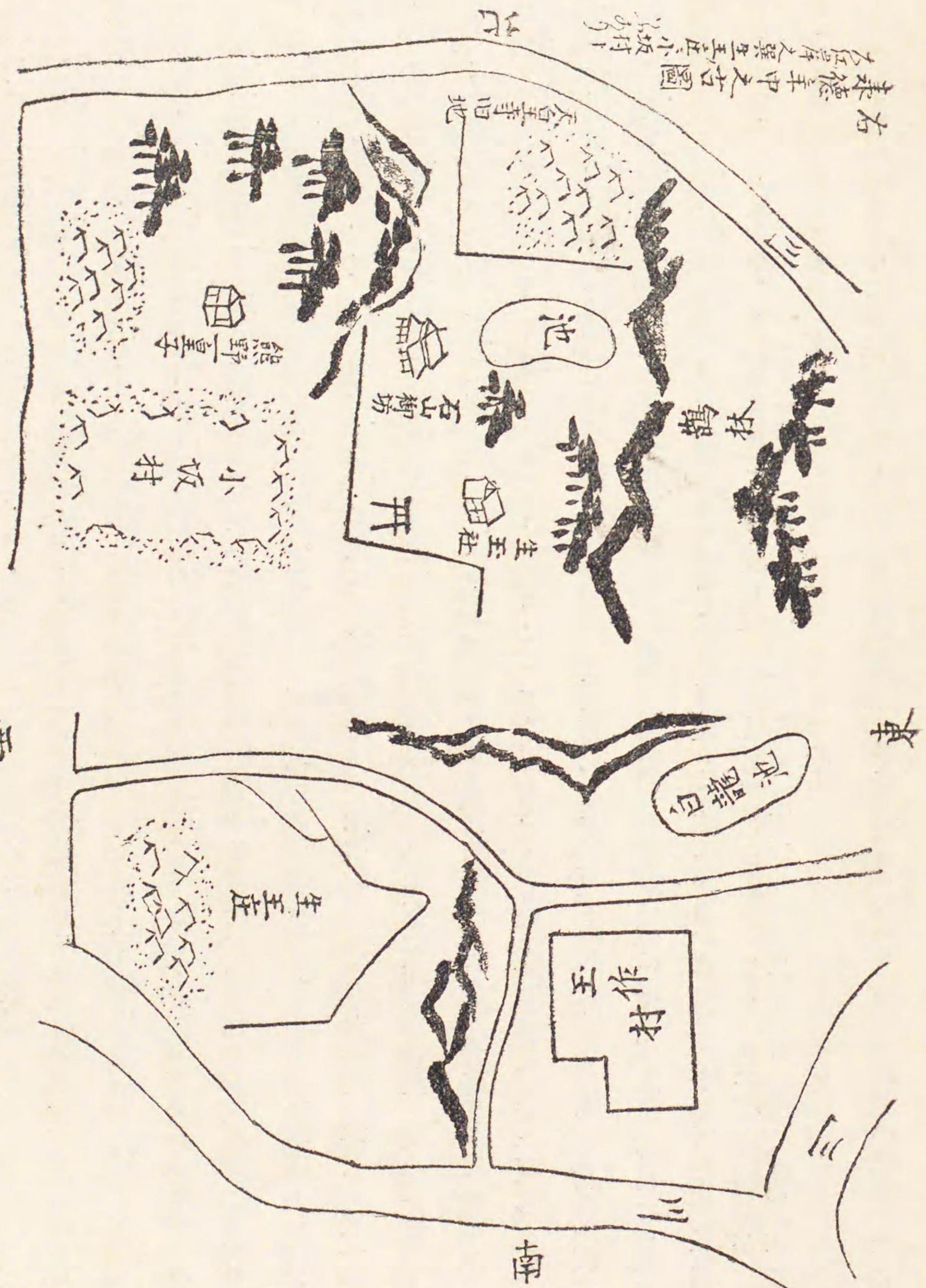
○金城

攝陽群談ニ云 金城 東生郡大坂玉造岸ニあり聖徳太子十六歳用明天皇二年始て四天王寺を建ル所也

推古天皇元年今荒陵の東に四天王寺を移す再<sup>(生)</sup>活玉社地と成れり文明年中本願寺御堂の地に轉して後羽柴秀吉公

城郭を築き在城嫡子秀頼公ニ至るの後今に至り金城萬々歳と呼ばふ

金は七寶の初め土中に不朽火も燒こと不能因て以て世俗金城と奉祝云々





石山記ニ云 足利家の時代より禁庭(延)の守護として將軍京都に居住し給ひ諸候大夫參勤(勤)す然共後年に至て大亂に及ぶ古しへは東國のみに手當むつかしく鎌倉を要所のやうに固めけるが中古は西國に英雄數輩あつて又此手當を専らとす去によつて織田上總介信長豊臣關白秀吉公も初めは京都に在城の思召たれ共又西國の押も御心に含まれ兼て地の利はいふに不及四神相應の場所を撰まれ大坂に城を築せ給ふ抑大坂の城地は攝州東生郡葭崎檜山と號す此處は生玉大明神の社一向宗の本願寺御堂生玉の社僧南坊を初め以上十ヶ寺彼地に住居せり先年秀吉公木下藤吉郎たりし時此地を見立無雙の城地なりと信長公へ言上ありしによつて信長公にももつとも思召給ひ本願寺へ寺地所望の使者を立られしかと蓮如上人草創の靈地なるゆへ深く惜みて承引無之夫より信長公一向宗を惜み給ひ大軍を發して度々本願寺を攻給ふといへ共却て敗北のみにして功を成がたし是一向宗門の旦那一命を擲す能た、かひ其うへ東は沼にして葭生茂り北は湖水の流れを受し淀川ふかく西は伯樂が淵より海上に續き南一方平地にして寺地也といへ共自然の要害屈竟の城地なるゆへ寄手攻兼しも理り也かゝる場處ゆへ秀吉公見立置れしとぞされば石山攻にはいつとも織田勢敗北にて流石の信長公にもすべきやうなく天下の爲と奏聞を遂げ 勅命を願はれるゆへ人皇百七代 正親町院より本願寺へ 勅使立て京都の御固の爲なれば速に御堂を明渡し得との義ニ付顯如上人 勅命を重んじ御堂を明て南紀雜賀鷲の森え退き給ひける其跡へ陣場を立られ繩張のみにていまだ城を築かれずこれ天正八年の事也 神社佛閣にても軍兵千員籠る時はかならず城と號く大坂の城は 後土御門院明應四年に初て築き一向宗の惣本寺石山寺と號せり天正八年釋光佐と織田信長對陣に及び三萬の兵籠城せしより大坂の城といへり

姫路に城を築き給ふは大坂の基業大坂の繩張を以て姫路の城を作り直し給ひ夫より山崎の一戰明智を亡しすぐさま大坂の城普請に掛り給ふは天正十年午ノ九月也武將みづから指圖をたたまひ奉行は淺野彈正彌長政増田右衛門尉長盛に命ぜらる右城普請ニ付番匠の棟梁を御吟味ありし所聖德太子より以來四大工の棟梁の家あり多門氏。辻氏。金剛氏。中村氏。とて代々相續なしけるか辻金剛の兩家は當國天王寺に住し多門中村の二家は和國法隆寺に住しけるが此度 秀吉公御尋ありし所先頃本願寺一亂の砌り辻金剛の兩家は一向宗にて顯如上人にまたがひ天王寺を立退き在所知れず兩家は和和に在とて尋求め給ひけるに中村氏は伏見の方へ行しとて知れず法隆寺の門前に多門兵助(介)とて幽なる暮しにて居けるを御召に預り多門氏時の面目をほどこし大坂表へ罷出けるに其身老衰せしゆへ御用の義倅(倅)に仰付られ被下べしと願ひければ則御目見得仰付られ御前へ出ける所兵介倅(倅)兵太夫が人品骨柄他に勝れ大工には似合ざる男天晴武士の風義ありと宣ひければ兵介御眼力に驚き扱々名將かな唐土の老子に勝りし上意兵太夫は私實子にては御座なく彼が先祖は 應仁天皇の大老臣武内宿禰の後胤大和巨勢の庄に住し巨勢大和寺金岡の末葉巨勢孫兵衛正義とて和州三輪大明神の社頭職を代々相勤罷在ゆ處勇武の譽あつて松永彈正久秀に頼まれ大和國乾の城にて打死をなす時舊友のよしみあるを以て是非なく義を立謀反人の爲に命を落せし事残念至極也依之一子を我に預け子として養ひ番匠の道を教くれられよと頼み越ゆ幸ひ私に男子無御座ゆ故子と仕り番匠の口傳(秘訣)秘訣太子より傳來の法を譲りいと申しかば 秀吉公御感あつて則ち兵太夫を御棟梁に仰付られ今より多門の苗字を改めの中井大和橘正清と名乗べしと御誼あり吉日を選び歛初メ斬初メあつて數萬の人歩を以て成就なし平山城と號たり



元和記ニ云元和元年四月廿六日大坂勢和州法隆寺に火をかけ焼拂ふといへ共伽藍は残り僧坊武家二百餘悉く焼亡此靈場を焼んとしける其故は中井大和の一子今法隆寺の願學也大和東軍に在て去年淀君の居間を大筒にて打崩したる時も此もの下ケ墨をして打入けると也其外攻具など皆この中井が計らひなきざといふ事なし去に依て今此事に及びしとぞ

今の金城は豊臣家の時の内郭也外廓(郭)北の方は大川筋に臨み東の方は鳴野玉造を限り南の方は宰相山世俗眞田山といふの北邊から堀を境とし西の方は今の東横堀これ外郭なり農人橋の北にて川筋曲りたる所あるは外郭の角櫓ありし趾也外郭東南の門は今の平野口町にあり墨にて黒く塗りたるとて其地を今に黒門といへり正南の門は上本町筋札の辻にありしとて札の辻東側の屋敷門の趾ゆへ今に地守へ御預ケにて町御奉行御代り毎には地守并町年寄より證文を指上而預り替る也慶長年中大坂冬御陣の時双方和睦ありて外郭をこほちから堀を埋めしゆへ平野口の黒キ門を逢坂のうへ坂松山一心寺へ遣されたり依之今に一心寺の門は黒く塗たり

### ○蓮如井戸

今時金城追手土橋先の井戸は往古本願寺の井にして世人蓮如井戸と呼ぶ

### ○御茶の水

大坂の城内はいかなる故にや水悪くして豊臣家のとき御茶の水に用ひがたきゆへ御本丸に新に井戸を堀らせ銀を以て井戸がはとなし給へ共左のみ其水宜からざるゆへ亦々天守臺へ井戸を仰付られ水を清めん爲黄金を沈め給ひ黄金水と號てもてはやしけれ共此水目かた重くして茶の香氣を失ひけるゆへ別に御茶の水を御吟味ありし所小橋のこなた清水谷に名水あり至て軽く水性よく御茶の水と成て今に其清水あり其所へ御茶屋高樓を建られ千ノ利休を召れ御茶の湯ありし也其地より西へ櫻の並木を植させられしゆへ後世其所を櫻町といふ

### ○安國寺坂

農人橋筋より本町迄の間今の百間長家の地は豊臣家御在城の時安國寺松浦法印へ下されし所ゆへ御茶湯の地藏より西谷町までの間を今に安國寺坂と呼ぶ

和漢太平廣記云 藝州安國寺瓊長老。豊臣公ニ諂事人皆其姦ヲ不知。一日小早川隆景毛利輝元ニ語曰 我嘗瓊ト公ニ侍リ公ノ語偶其先妣薨御ノ事ニ及。涕下リ數行。瓊モ亦泣。瓊ガ心何哀戚スルヲ有。唯是僞耳。公不察之親愛益深。公死只恐ハ此僧。國ヲ誤ト申レシガ。果シテ石田ニ與シテ命ヲ殞セリトナン。

安國寺松浦法印行鎮元は禪僧の墮落巧言令色を以 太閤に取入り拾貳萬石の俸録を食む終に石田に與シ關ヶ原敗北の後七條にて捕はれ石田と俱に三條河原にて梟首せらる

### ○算用曲輪

玉造鴈木坂の南側山歸來畑の地は御城普請の時假家を建て諸色算用の割場なるゆへ算用曲輪また算用場共唱へしが後世あやまつてサンセウ山と呼ぶ一名杉山共いへり





老人雜話ニ云

聚樂已後大坂に營造ありその勘定日數を経ければ太閤見給ひて汝等か勘定はかたらす定めて材木に利を得させぬならん渠等かもてる寶も我家にある寶も同じ我用事ありて取らんといふに誰か否といはんはやく事を果せよと宣ふとそ

同書ニ云

氏郷か近習の者氏郷にとふて云太閤已後關白とのに馬をつなかんやと氏郷こたへて云かの愚人ニ隨ふもの誰かあらむと云又とふて云天下の主たらんは誰そと答て云加賀の又左衛門大納言なりと、又左衛門もし得すんはいかん答て云又左衛門得すんは我得へしと東照宮の御事を問ふ答て云是は天下を得へき人ニあらず知行過分に與ふ器量なし又左衛門は人に加増分に過て與ふる潤物也取へきは此人也といへり

同書ニ

加賀大納言 秀頼のもりに附て大坂に居す此人そのま、あらは東照宮御かまひある事かたし或時東照宮を害する談合有しに肥後守同心なくして其後加賀へ休息あれと勸めて東照宮大坂へ入らせ給ふこれより天下東照宮に屬ス

同書ニ

難波の役に冬陣に大名中へ白銀を頒ち下さる加賀仙臺薩摩などは別して大々名なれば 台徳院殿より白銀三百枚東照宮より二百枚合せて五百枚宛あて下さる森作州等の大名には二百枚と百枚と都合三百枚ツ、下さる作州は其

時即日京の人家よりかりたる銀子をつくなはれたり人みな是事を聞て感しあへり

新著聞集 第七 勇烈篇

○虎勇威を畏る

大坂の城に能を催されし日にてありしがおりに込置し虎放れてかけ出しかば諸人魂をひやし四角八方へ逃散ける秀吉公も御坐を立せ給ふ大名小名も周章し給ふ事かきりなし然るに上坐に秀吉公御次に伊達(政)正宗加藤清正おはしけるに虎はいきほひか、り秀忠公を目にかけ御前の椽(軀)あがりしをはたとにらませ給へはまばらく御顔を守りけるが椽がわを通り正宗(政)清正の御方にむかひけるに兩人膝を立直し刀に手をかけ給へは勢出し虎すこくと庭へおりける也實に大勇の威にはかゝる猛獸すらおそれけるよと各感伏せしとかや

同書に

○犬虎ごもにかみあふ嚙

秀吉公大坂の城に虎をかわせたまふ其餌に近國の村里より犬を召れしに津の國丹生の山田より白黒班(斑)の犬つら長



く眼大に脚の太り逞しきを曳來りける實も尋常の形には異也けり件の犬虎の籠に入とひとしく隅をかたどり毛をさかしまにたて、虎を睨む虎日來は犬をみて尾をふり踊上てよろこひ勇みけるがこの犬をみて日月のことくか、やく眼に尾をたてさうなく嘸か、らんともせず嘖りをな、く氣色おそろしなどいふ斗り也すはや珍しき事のあらはあれ見よとて走りあつまり息をつめて見る處に虎はさすがに猛き物にて飛か、る處を犬は飛ちかへて虎の咽に咀つきしを左右の爪にて分ずくに引きさしかど犬はなを咀つきし處をはなたずして共に死けり此事御所にきこしめされて其犬の出處を尋させ給ふに丹生山田に夫婦の獵者有朝毎によく物くわせてはやく飯れよといへは尾をふりて疾山に行く主は犬の飯るへき時をはかりて鐵炮を提けゆくに近きあたりまで猪鹿を追まはして主にわたし打せけるまかるを庄屋より頻りに所望せしかどこの犬は我々を養ひければいかに申さるゝとて遣はす事成がたきとて遣らざりしを深く妬みけるにや此度の犬駈りに此犬の代りを出さんと頻りに願ひしかど此義なりかたしとてかの犬を渡しける程に夫婦犬にむかひ涙を流し汝いかなる宿縁によりてか今までの夫婦を養ひつらん今度庄屋が所爲にて非理に虎の餌になす事口惜く思へとも力に及ばす我々を恨みそ敵を取て死すへしとかき口説しかばよく言をや聞あがりつらん志ほくとして出行しと一々上聞に達しければ御所にも哀れがらせ給ひ庄屋が心根不屈也とて刑罰(罰)に仰付られ犬の跡吊へとて庄屋が財寶のこりなく夫婦の者に賜ひけると也

豊公逸史録

○秀頼公の御後見

徳川神君加賀大納言毛利中納言備前中納言越後宰相已上五人を嘗て大年寄衆と定おき給ひけり萬歳の後は秀頼公の御後見にとの御沙汰有しか近頃御惱倍被爲重明日をもまらぬ御身なればとて 神君を召れ秀頼公の御後見を御頼みなされい御遠慮なく御教訓被爲有いやうとの御事也 神君斷て御斷に被爲及けれ共餘儀もなげに御頼みゆへ漸々と御領掌あり 神君も六尺の孤を託せらるゝ事天下の大事なれば太閤の御恩顧の大名衆の内御添役兩三輩も極め置れ度との思召ありしか共當時御不豫の折からなればたごちに申も心なして宿直の人々に御病間もあらは斯御聞に達しられいへの御頼み也此事折を得て序を少も申上ければ太閤はや先を取て被仰けるは我等病來種々の事を思ふに天のなす災ひ有風雨水旱疾病稻蟲の類是也人のなす害ひあり盜賊放火戰爭の類是也禍するもの多しといへ共戰爭ほど大に人を傷害するものはなし故に嘗て思ふ大明を乗取しは諸國ともに靜謐なるやうに能守護すへき人配りをも工夫して置ぬれど遺憾なる哉近頃は快氣の程も覺東なし死後の事を思へは内府へ添役の存寄尤の事なからさせる事は露ほども思はず大明より襲ひ來らん事計がたし來らぬ事も有へけれど物ごとと丈夫に構ふるに如はなし我等千秋萬歳のときに當てまかる事あらは暫く披露する事なく遺體を密に取收め善作供佛やうのいとなみ一切にやめて我等が命令と號し早々合戦を始むへし其次第はかねて書せ置ぬむかし柘榴(石)をくわへて火焰を吹出したるは誰やらんと仰ければ御側よりそれは天滿天神にておはしませしと申上ければいかにもそれよ予が陰囊の垢ほともなき天神が吹たる柘榴(石)だも火焰となる我等が一息つかば四百餘州灰となすべし早々我等が貌を繪像木像に拵へ立まさかの時は軍神として家々の簾のほりに結付いさぎよく責靡すべし志かし引取鹽を慎むべし能鹽合に勝色を見せ十分に見へし時予か事を披露し軍をまとむべしさほどに懲しめ置なれば已後襲ひ來るの憂なし



本朝王代已來武將の世に至るまで亂やますイダシク苟も干戈起る時は静めかたきものなれば此後數十年續かん事も知べからず罪なきもの命をおとし或は辛苦に迫る者なんぞかぎりあらんや誠に不便なる事也我等が大望は死後何れもむつまじく思ひ合靜謐ならん事こそ好ましかれ添役を屬し置けば秀頼を笠に取て相争ふ事も知べからず争ふ時は必戦ひに及ばん故にかねて斯と決斷せし也約束のごとく政務を秀頼に渡せる事何ぞ疑ふべきやもし其節に至る時務に隨ひ不渡ツときは直に彼に與ふべし何そおしむべき死後の大望を達するをや殊に日本の人に與ふ旁々惜かるべけんやと御意被成しと也これを聞人涙を流さざるはなし

○後藤味噌

後藤又兵衛基次大坂籠城の砌工夫なし軍用の爲とて糠を蒸して酒の粕と鹽を合せたる味曾を制して要害とす諸人これを賞翫なして後藤味噌と名付たり

○古田織部數奇屋(寄)

茶道に名高き古田織部正屋數奇屋(寄)の趾今は所も定かならず土橋氏はなし覺ニ云 古田織部正數奇屋(寄)の内路次の籬に朝顔咲亂れし頃朝顔の茶湯と押出して知音衆へ茶湯あり其頃聞及び秀頼公御馬廻り衆我もくくと茶湯望ひて數奇(寄)にあひけるよし織田有樂齋御聞被成其頃京都にありしが態大坂へ御下被成朝がほの茶湯にあひたきよし所望有ければ則明朝御茶可申と約束して俄に籬を引崩し朝顔の蔓も根も堀おこし捨ておやり砂たき付て草木何にて

も一本もなしにして有樂公請待ありしと也諸人見古したる朝顔なくて有樂公都より下りたるかひ有とて殊外の御機嫌と也

或書ニ大坂冬陣のとき古田織部正嶋野口佐竹の陣へ見舞に行竹把の外に出て疵を蒙る是世俗ニ云茶杓竹を尋るとて左の眼のあたり鐵炮にあたる時に巾を以て血を押ゆる茶道に是を稱美す武道譽すして却て笑ふこれ其役に非ず自分の見舞也第一軍令に背くニツには猛く出るに非ず由竹を尋ん爲也三ツには君忠にあらず因て大御所御氣色あり、夫故遠慮して久しく出ざる所に一心寺の住持御茶を上ル序に出たり然其後家人林宗喜と申者の事ニ付織部も打首と定りしを京都所司代板倉伊賀守が情に因て父子切腹を致ける此織部茶道には今井奥山開山と稱じ小堀氏にならひて此道に委かりしに元來けいはく者にて有しとぞ

豊公逸史録

○小西氏の系圖并ニ指物

(侯)諸候方え先祖系圖を被差出ひ様被仰出ければ各神孫王裔の由緒をいかめしく被申立たる其中に小西攝津守殿は父某泉州堺の町人藥種屋也祖父も同前其先は代々大津町馬の口取のよし書載せられけり扱加藤清正小西行長大明御陣の御先手として出陣の砌り清正行長へ其許之指ものはと問はれければ藥袋々と被答けり系圖一件と此答兩條殿下聞召れ思召に應しける御氣色なりしとぞ



○曾呂利諷諫

秀吉公宴を近臣に賜ふ酒闌にして何れも御前に召れ汝等世に恐しき者ありや否やと仰ければ皆々畏て居けるか列頭の人より對ていはく拙者甚恐しき者は君のみ外に恐しきもの天地の間にはず其次なる人皆同然と申上數次過て其次なる人申やう拙者か恐敷者は君のみならず雷と病の類是に懸りては君公の御側を不離御奉公相務度ひても不叶い得は是等も恐るべき者にてい次なる人皆同然と申其次に曾呂利扣て在しがそろり／＼とあとへ退き身をまじめて黙然たり公曰汝何ぞ不言や曾呂利對て曰拙者が存念皆々とは大ニ相違仕ひ故申上なばもしや御機嫌にさかひもやせんと申ければ苦しからず有躰に申へしとあれは然らばと坐を進み拙者が第一恐しからぬ者は君にてい公曰恐敷者はなきや對て云何ぞなき事あらんや馬鹿なもの短慮なるもの酒を過す者は皆恐しくい君のごとく賢明に在ますゆへ被仰出い事に少しも御無理なる事なく御善行のみ御酒は程よく被召上不調法なる拙者つれへも御教訓給り限りなき御恩愛を奉戴事身に餘り難有とのみ奉存少しも恐しきとは不奉存い將また御目附様目など大勢眼をいら、け八方を見廻しひ得ばこれ千萬の御目を御所持と申物故下の善事悪事は悉く顯はれ御賞罪正しき御事故此輩の勉めまた堅固なれば人々相勵み且慎む心も生れは誠に重疊難有仕合と奉存いとうや／＼しく申上しかは中々御氣色よくいかにも汝がいふ處面白く覺侍る論議是迄なり皆休息すべしとの御意あつて入給へり

隨座其後を伺ひ見るに酒に遠ざかり給ひよろづ御性急なる事も寛に成らせられけり一言の諷諭を以君を動す賢也と謂へし

官中秘策(秘)ニ云

○長門國

一 三十六萬九千石餘

松平大膳大夫

右は阿武郡萩城主先祖毛利中納言輝元は秀吉公五大老之内ニ而中國七ヶ國を領して石田亂ニ一味有之大坂ニ楯籠然ル所關ヶ原落着已後 神君御陣所より大坂へ御使を被遣城を無相違相渡ひや但合戰可有ひやと也毛利輝元及増田右衛門其外寄合有之此程之相談一ツも不調内斯ごとく御使なれば義勢も盡て大坂を退而依之福島左衛門大夫淺野左京大夫黒田甲斐守藤堂佐渡守有馬玄蕃頭を大坂へ差向られける輝元増田も大津まで退けり是より大坂請取在番也其後輝元降參せり 神君輝元ニ貳ヶ國を 被遣則隱居被仰付實子藤三郎を家督と被成残り五ヶ國は御取上也

……以下原本空白……



大坂御城内御殿御座鋪(鋪)向拜見御間順覺書

- 一 御立關ヨリ遠侍之間 山樂筆
- 一 横ニ獅子之繪ニタ間右同斷
- 一 殿上之間 下段 同
- 一 柳ニ小鳥紅梅柳之繪御上段御床櫻惣體櫻之繪
- 一 鷺之之間 同
- 一 次之間松鷺之繪上之間右同斷
- 一 鴈之之間 主馬筆
- 一 芦ニ鴈之繪
- 一 雪之之間 同
- 一 雪松梅の繪
- 一 大廣間三ノ間二ノ間下段共 同
- 一 松梅孔雀之間 御上段松竹茨之繪
- 一 御調臺内桃之繪御襖縁リ 古金欄
- 一 御縁頼御杉戸ニ三面之麝香猫之繪
- 一 御成廊下
  - 惣體牡丹唐小鳥之繪此間御中庭ニ松あり
  - 往古生玉御神木のよし申傳ふ
- 一 御白書院 主馬筆
- 一 松櫻榎鳩松柳之繪御上段松椿山鳩
- 一 御床の内 雪松梅鳩
- 一 御連歌之間 同
- 一 御床之内奥州武隈之松の寫之よし又楠一枚いた
- 一 御間之内牡丹之繪
- 一 御料理之間 御情之間共
- 一 白壁御襖ニ濡鶴繪
- 一 御文庫藏
- 一 御黒書院 探幽筆
- 一 墨繪山水 耕作之間繪耕作之圖

東之方御鴨居上張付

大猷院様 御筆と申傳ふ御椽頼御杉戸にあねは鶴之繪

- 一 銅御殿 探幽筆
- 一 墨繪山水御杉戸ニ水飲虎 鳴鶯之籠入レ
- 一 御上段墨繪山水 御調臺御襖縁リ蜀江錦
- 一 北御椽頼御杉戸ニ穗鷺之繪御物置御納戸
- 一 御納戸藏 二タ戸前
- 一 右御代々 御厄除御守入有之由
- 一 御祐筆部屋 主馬筆
- 一 竹茨之繪
- 一 御時計之間 同
- 一 菊井石竹之繪
- 一 御燈之間 同
- 一 芦ニ鶴繪
- 一 御對面所 同
- 一 牡丹之繪三之間御襖水潜り梅 御上段山茶花
- 一 比翼鳥之繪 東之方御杉戸ニ鶉之繪同鳴鴨
- 一 右 柳御廊下左
- 一 松之御廊下 主馬筆
- 一 松ニ小鳥之繪
- 一 棕櫚之間 同
- 一 棕櫚之繪
- 一 檜御廊下 同
- 一 檜楨之繪
- 一 猪之之間 同
- 一 唐艸之繪
- 一 伺公(候)之間 同
- 一 柳鷺芦ニ鴨之繪 右御坊主部屋の跡
- 一 御老中部屋
- 一 御椽頼御廊下
- 一 上御臺所 御膳立之間
- 一 下御臺所



從是元之處へ歸り御老中部屋御椽頼御廊下へ掛り檜之御廊下取付之處より左之方伺候之間へ出ル夫より直ニ大廣間并箱段へ出ル

右御番頭御目附之節御案内之順也御老中御城代御定番拜見并ニ御風入之節伺候之間初而仕舞夫より御臺所へ出ル

一 御庭廻り

御數寄屋跡昔本願寺時分より有之由利休之作自然石之御手水鉢あり一ノ谷といふ又八十嶋共いふよし

一 六番御多門ニ 御道具有之は

御三代様 上洛之節御立寄之時御用ニ相成ゆ由

一 芦屋 釜

芦屋郷にて御用ニ相成ゆよし

一 御額 文字 流芳樓と有之

小野道風筆之由 昔之御數寄屋ニ掛り有之由

一 黄金水

御天守臺中段ニ有之

官中秘策云

一 御米藏

五間梁 長三十六間 一ヶ所

一同

五間梁 長三十六間 一ヶ所

一同

四間梁 長二十四間 一ヶ所

一同

四間梁 八ヶ所

一新藏

四間梁 長廿間 二ヶ所

一 御具足藏

右同斷 一ヶ所

一 鹽味噌燗漬炭薪御藏

三間梁長廿間二ヶ所

一 味噌燗漬御藏

右同斷 一ヶ所

一 味噌御藏

三間梁 長三十間 一ヶ所

一 薪御藏

三間梁 長三十間 一ヶ所

豊後中 作州中 越前中 越後中 丹後中上

攝津米

尼ヶ崎米 二ツ物石四升 高槻米 同上 津國地米

二ツ物 八斗三四升

一 御鐵炮御藏 三間梁 長十二間 一ヶ所

一同 三間梁 長六十間 一ヶ所

一 御鐵炮石火矢 四間梁 長十一間 一ヶ所

一 車火繩銀御藏 四間梁 長九間 一ヶ所

一 同 二間梁 長九間 一ヶ所

一 銀御藏 四間梁 長十二間 一ヶ所

帳付番所

一 大坂御藏小揚者 百廿四人

内四人は小頭今番二人扶持宛

百廿人は月三番壹人半扶持宛

大坂御城米

地米<sup>上</sup> 石州<sup>下</sup> 播州<sup>上</sup> 備中<sup>上</sup> 豊前<sup>上</sup>

攝陽奇觀 卷之一

大坂御城追手より近所道法

一 御船奉行屋敷へ 三十丁

一 越前築山へ 十四丁六反

一 真田丸へ 十一丁二反

一 加賀築山へ 十五丁六反

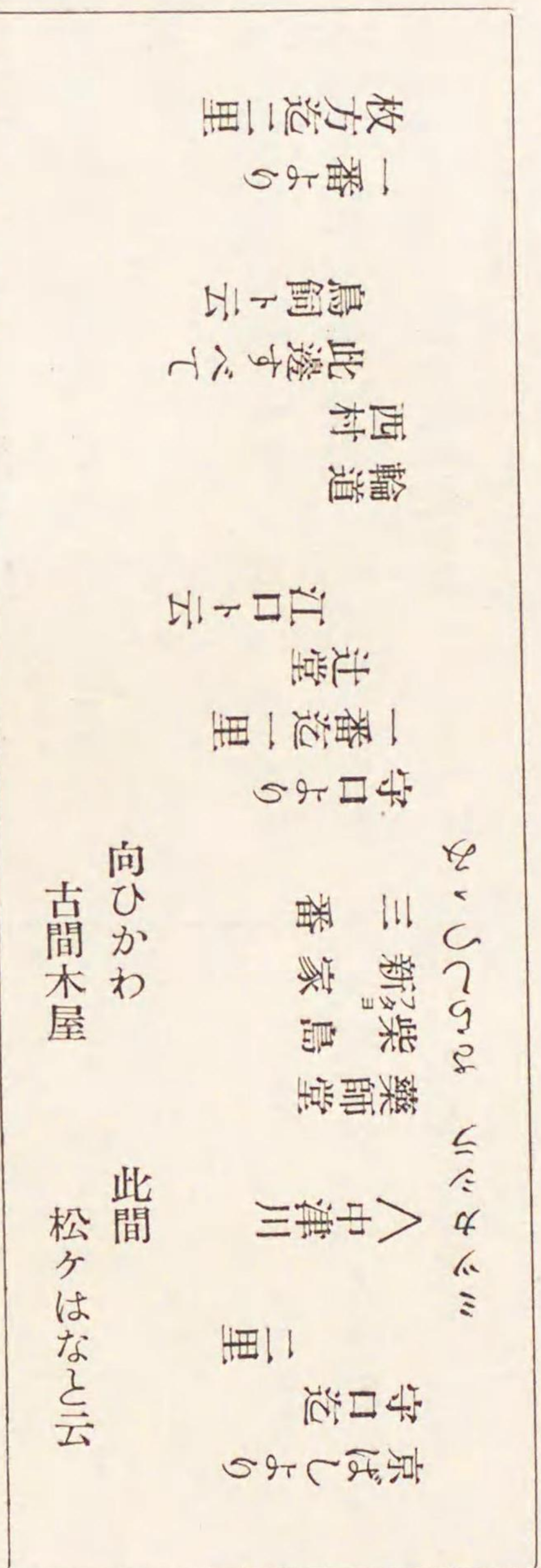
一 岡山へ 廿五丁四反

一 天王寺へ 廿九丁八反



河州佐太 守口ノ北也 一名壹番村と云此近村に壹番より十番迄の村の名あり壹番は佐太也 二番村 三番村 四番村 五番村 六番村 七番村 八番村 九番村は北十番村の屬邑也 南十番村まで以上十一ヶ村を大庭莊オホノシヤウと云下島村を十一番村とも呼ぶ  
或カ曰 此村の名は大坂金城要害の軍勢隊伍クニイを立る名也とぞ

…編者曰ク、原本  
コノ所ニ以上ノ  
貼紙アリ……………



### ○玉造口御米庫

御治世の後寛永正保の頃までは玉造口に御米藏有略圖を摸寫ス

卅	卅	十	十五	十	十六	七	三
卅	卅	卅	四	十	二	十	四
卅	卅	卅	五	十	三	十	五

卅	卅	十	十五	十	十六	七	三
卅	卅	卅	四	十	二	十	四
卅	卅	卅	五	十	三	十	五

五十五	四十五	五	四十二	卅	廿	茶番	御勤定場
五十六	三十五	五	四十三	卅	廿		
	五	五		卅	一		
				卅			



番所	御門	御門	御門	御門	御門
四十六	五十七	一十五	五	四十四	九
三十八	五十八	十	五	四十五	八
二十	六十	八十四	四	四十七	六
十六	六十	八十四	四	四十七	六
番所	御門	御門	御門	御門	御門
四十六	五十七	一十五	五	四十四	九
三十八	五十八	十	五	四十五	八
二十	六十	八十四	四	四十七	六
十六	六十	八十四	四	四十七	六

御門  
番所  
御門  
御門  
御門  
御門

○栗山

蘆分船ニ云 玉造稻荷の邊を栗山といふは上古聖德太子守屋と戦はせ給ふ時此山にて供御を召けるに栗の木を伐りて御はしに奉る其時太子祈誓しての給はく戦ひに勝べきならば此はし木今夜の間に枝葉出へし左もなからんには其儘有べしとて御はしを土にさし置給ふに一夜の内に枝葉榮へしかは程なく守屋を退治し給ふと也依之栗山といひけると也

○大霸王樹

玉造稻荷社裏手の良の人家に大ひなる霸王樹あり高サ一丈餘りまはり三尺餘にして立木のごとし凡これにつゞくサホテン海内に見ず

○眞田山

玉造の南姫山稻荷祠の地眞田山といふ眞田左衛門の壘にありしゆへ也また宰相山といふは加賀宰相候の陣屋の地也



○一柳監物墓

〔編者曰ク原本コノ所空白〕

中興武家盛衰記云

知行七萬石

一柳監物直盛

扱も是は伊與<sup>(豫)</sup>の皇子の後胤河野四郎道信の末葉也然るに一柳を名乗る事は道信より十代の苗裔河野市太郎藤原の道直といふは美濃國へ來り土岐氏ニ仕へ鞠の上手たるを以て其名世に高し土岐是を愛し一柳氏を授け一族とす此故に性<sup>(姓)</sup>を源氏にあらためけり其孫一柳市助直末か世に土岐屋形衰微し後に美濃國を流浪し市助は信長公へ仕へ其後秀吉公へ仕へ天正十二年秀吉公濃州竹が鼻の城主不破源六を水攻にして彼城を攻給ふ時一柳直末を此城の主となされ三萬石を給ふ其後市助を伊豆守になされ小田原合戦の時に武勇をふるひ打死す秀吉公其働きを甚だ感じ給ひ令嗣なきゆへ舍弟の直盛に家督を下され從五位下監物ニなる大閤没後に家康公へ志たがひ石田亂の時軍功あるゆへ伊勢の神戸の城へ四萬石加増にて都合七萬石になり入部しける大坂兩度の御陣に供奉し譽をあげ已後死去息男二人あり嫡子丹波守直重二男美濃守直則といふ依て末期に願ひけるは監物義本國與州<sup>(豫)</sup>にて先祖數代彼國を領ス兄弟の子供へ豫州におるて然へきやう配分被仰付被下い様ニ言上す依之嫡子丹波守は與州<sup>(豫)</sup>の新條郷西條にて三萬五千石次男美濃守にも伊與川上<sup>(豫)</sup>にて貳萬石播州小野にて壹萬石下されけり扱丹波守直重は家督を繼ぎ官位にす

、みて後卒ス是にも男子貳人あり嫡子監物直興二男は半彌といふ依而高の内五千石次男半彌に配分也是は直重遺言せしゆへ也嫡子監物は三萬石の家督を繼て禁裏御普請の手傳仰付られ造立しければ惣奉行不殘休息仕べしとて監物も在所へ御暇下されけり其後禁裏には御移徙の時今度普請中の諸奉行諸役人不殘京都へ召され御祝義下されける監物直興は御普請の次第悪しき旨其上普請中不作法不行跡を盡し首尾よろしからず殊に領分の百姓<sup>(姓)</sup>にからくあたり家人等にも困窮に苦しめ私欲多きゆへ上聞に達し寛永五年七月十九日直興を評定所へ召御老中御目附<sup>(列)</sup>御烈座にて右の不屆惡事等申渡され領地不殘召上られ其身は松平加賀守へ御預なされけり

但し實名の字不審也書違ひ歟寫本の儘記シ置也

監物直盛か次男一柳美作守直利與州播州<sup>(豫)</sup>にて三萬五千石を領し伊與川上<sup>(豫)</sup>へ城を築申度願ひを達する所に煩つき終に病死す美作守に一女あり男子なし依之末期に及び小出伊勢守吉親が二男宇右衛門直次を望とし家督相續を願ふ然れ共兼々此義を言上せず末期の不屆なる由にて領地を召上らる、併シ遺言せし事も不便の義と有之小出宇右衛門に壹萬石を新規ニ下され一柳の名跡を仰付られける也

私ニ云宇右衛門ハ當時一柳土佐守直好の祖父半彌跡式は當時一柳權之助歟

○眞田古城

小橋村の地にあり慶長元和年中眞田左衛門在陣の所也



○越前出張古城

玉造の南にあり同時伊達羽柴越前守大崎少將(政)正宗在陣の所也

○加賀出張古城

同所にあり同時加賀大納言菅原利家卿在陣の所也

○聚樂町

豊臣家のとき關白秀次公滅亡の後京都の聚樂御殿を大坂に移す故に今も聚樂町といふ此御殿西の方を表とし西海を見晴らす殿造りの趾は近き頃まで荒地と成て醫師古林見(宣)宣預り居たり今は子細ありて町家ながら御代官所の支配と成れり往古聚樂御殿にてありしとき毎年六月住吉御祓には堺大坂の町々より出すねりもの挑灯など此御殿の表通りを行列いたさせて見すべきよし(太)大閤の御詔によつて御祓の時は此御殿の表通りを通りしゆへ今に此筋を御祓ひ筋と呼べり聚樂の御殿は後年加州前田家へ下されて元和の頃まで有しかど攝戦の時に焼亡なし今は名のみ残りて町家と成ル

○鼠呂利屋敷

玉造八尾町に間口壹間半ばかり表通りに高塀を掛たる空地あり世俗此處をそろり屋敷といふ 豊臣家のとき鼠呂

利新左衛門が住居の跡也いかなる故にや此空地へ家建をすれば其主にかならずたゞりありといひ傳ていさゝかの假家も立す唯野菜を作りて明地とす曾呂利なんの執着ありてや此地を惜める

○越中井戸

玉造越中町の辻に越中井戸といふあり細中越中(川)侯屋敷ありしときの臺所の井戸のよし

○銀十郎潜居

同伊勢町に中頃賊首阿波の十郎兵衛といふもの銀十郎と假名して住居せし家あり院本阿波の鳴戸に玉造のだんあるも此故也

○愛宕町

京師の愛宕山此地より見ゆる故に名とす

○鎮西社

十三小路に鎮西八郎の宮といふあり安堂寺町筋上本町より東の筋久寶寺橋筋との間東側路次の内也往古は鎮西大明神の額ありしよし簀掛松といふ古木あり當時は稻荷大明神の社共いふ御弓町の邊なればかゝる神も在すへし



○十三間梅

鈴木町南側町家の庭に十三間梅といふ名木あり花は白梅にあらず紅梅にあらず餘木より匂ひ高し

○八間梅

農人橋筋谷町より東御屋敷の庭に八間梅といふ名木あり

千早振神代もきかす梅の花からくれなるに八けんありとは

貞柳

此古木今はなしまた玉造稻生社(荷)の北隣石薬師本堂の前なる紅梅を當時八間梅と名付く色香他に勝れて見事也

……以下原本空白……

親鸞聖人一向宗を弘め給ひしより年々歳々に門徒繁昌に及ひしかど其後星霜を重ね殊更四海亂世にて一向宗風も良衰微せりこれ親鸞聖人より六七世の比也しが存如上人一男を設く應永廿二年二月廿五日大谷本願寺にて八代目蓮如上人御誕生まします童名布袋丸と名つく御成長の後中納言宣光卿の猶子として菊壽と改め給ふ本願寺御相承ありしより末世の門徒の亂法を禁め正し給ひ時にのそみて衆生を教化し給ふ御制作を御文章といへり人皇百三代後花園院御惱の御時蓮如上人平愈(癒)を祈念し給ひし其賞として大谷本願寺へ禁裡紫宸殿の菊の御門を下され本願

寺の本門とす夫故本堂も紫宸殿の形をまねび禁中の唐門を下され其内に建たる堂なるゆへ御堂と稱ス外ニ歴々の大寺勅願の寺々も唯本堂と號するに本願寺に限り御の字を付る事此謂也末世の今に至る迄御堂と稱するは一向宗の本寺斗り也これあながち箇様に唱へよと下知はなげねども自然と諸人いひ傳へける事誠に譽れといひつべし天文元年十一月廿八日山門の所爲にて大谷本願寺焼失の後は御門なしといへ共本堂斗りは今に至りて紫宸殿造りに建る事も此時よりの謂也蓮如上人は文明三年より越前國に御下向まし〱吉崎に一字を御建立あり加賀能登越中越後都而北國門徒等が法義を正し給ひ五ヶ年の星霜を送り給ひしが今年文明三年の秋の頃より再び都に御歸洛あり本願寺再建の義を思し召立せ給へども洛中いまだ靜ならずばらく攝州富田に住居ありけるに河州出口村空念御坊の招請によつて出口へ御越有て三ヶ年御逗留あり文明十一年正月城州山科の地を御見立あつて本願寺造立の事を企て給ひしかば近郷近村信心堅固の門徒等雲のごとくに集りて石を運び木を引二月三日より造作始めて夜を日についで急ぎける程に同年八月には本願寺再建全く成就せしかばいよ、宗門繁昌以前に倍し山科本寺と尊敬せり其後上人七十五歳の御時本寺を御子實如上人へ譲り給ひ御身は御隱居と成本寺の北ニ住せ給ひけるが明應五年の始御年八十二歳に成らせ給ひ御往生を待せ給ふべき御身なるに宿因の故にや隱居の地として一寺建立の思召立有とも御心に叶ふ地も心の儘成らずありしに此砌御心願の事あつて攝州に御下向あり住吉大明神へ御參詣あつて夫より大坂の郷に何心なく來り給ひしが生玉の庄内石山の地にして童子一人出て云師は伽藍の地を求め給ふ成ん幸ひ此所は叡岳に劣らぬ勝地にして不退轉の靈場也師早く梵宇の造立をうながし給へ上人の曰童子の教さる事なれ共此地は山遠くして諸木に便なしあながちに求んとせば諸人の勞甚し我これを深く歎くと宣ひしかは彼童子



笑て云師其事に於ては必默し給ふ(疾)な我篤(疾)より師の來り給ふを知つて數多の用木を調へ置たり彼木を以て造立あらば不日に其功成就すべし師の心決せば河泉紀の門徒必來り助くへし用木の有所は是より西に當つて木津の濱邊にて貯へあり皆以て印あらんとする間其木を以て用ひ給へ師其船を下し木津浦に趣(赴)き尋ね給へと教ければ上人不思議(義)に思召抑童子は何人ぞや我爲にこれを告給ふ童子の曰我は此地主護神の使ひ也といふかと思へは忽姿は消て行方なし上人いよゝ奇異の思ひをなしこれ只事にあらす何にもせよ木津浦に趣(赴)き見るべしと行て見給へは童子の教に違はず數百本の材木有て本願用木といふ四字一々に備り有しかば上人歡喜斜ならず告に任せて造立せんと夫より東生郡生玉の庄石山に趣(赴)き給ひ童子の示しは此地成べしと四方順見し給ふ所に河泉紀の門徒等數萬人集り本願寺御造立との御あらせによつて參いと述ければ上人も童子の告を御物語ありけるにぞ信心堅固の輩是を聞て踊り上つて悦び勇み佛の御告にて參たる我々は一向專修の高名なれ死なば必ス極樂世界に至らん事疑ひなしと悦びツ、早々造立の御手傳ひ仕らん有がたや南無あみだ佛と同音に唱へ夫より直に船を浮へ上人諸共數多の門徒信心堅固の人々急ぎ木津浦馳行て六字の稱名を音頭として數多の材木を暫時ニ運び取本寺の再建を催しけるに近國近在の大工左官招かずして群り來り一力の功力によつて忽罪業まぬがる、は此時也と寢食を忘れひとへに造立を急ぐ程に日數を経ずして一寺成就ス今戰國の中にてかゝる造營事終るはこれ佛の御加護也と益信心肝に銘じ覺へける是より上人日頃の御願ひ成就して此地に隱居し給ひ終に明應八年御年八十五歳にして遷化なし給ふ

……以下原本空白……

○

楠左衛門正具(イサトモ)は楠河内判官正成の後胤にして數代勢州北畠家の簇下たり天正年中織田信長北畠家を誅(罰)せんと押寄し時左衛門正具は八田の城に籠りて防戦せしかど北畠父子本城大河内の城を開きて降參に及びしと聞より諸卒には金銀をあたへて暇を遣はし其身は妻子を引つれ山林に隱る、正具平常一向宗の信者なるゆへ後に石山合戰の時本願寺へ御味方なし三番の道場定專坊手疵を蒙りて難義に及びしかば顯如上人の御差圖によつて正具入道彼道場を預り定專坊は外の病にて死去せしゆへ正具入道直に道場の附屬を蒙り信心の行者にて目出度往生をぞ遂られける其子孫今に絶す三番道場を相續してかの楠正具を救はせ給ひし御眞筆は今に傳へて彼道場の寶物とす

右楠正具織田信長に捕られ既に死罪に極りたりしに親鸞上人御眞筆の奇瑞に依て助命ニ及ふまたは長島の門徒をかたらひ織田方の大軍を破りし謀畧など石山軍鑑及び諸書に委シければ畧ス



# 大坂之部

## 戲詩選 浪華ノ風

浪華城郭映江河  
橋跨縱横道似過  
千坊比屋武門少  
萬戶垂牌商家多  
男女忽々顧左右  
老壯孜孜勵切磋  
沐雨櫛風馳遠近  
坐花對月競吟哦  
北濱遊買賣言去  
南堀劇場買笑過  
白頭緩步唱巴曲  
黃口急走和里歌  
美酒嘉穀易衣服  
佛堂神社爲醉醅  
無恒產業如流水  
不定談論似奔波  
瓦文礫語能研碎  
金字玉章誰琢磨  
古今沙汰辰旦物  
朝夕出入日本舩  
穀價貴廉於此躍  
能分六十餘州科

或院本に

難波の町を繪に書ば扇のなりに末廣き地帯のはどの三ツの郷西にかなめの海をうけ生駒の月を懷に雲をかくさぬ詠のたね云々

## ○船場

船場又戰場共書とも正字洗馬なるべし信州にセバといふ所あり是も洗馬也大坂の洗馬は 豊臣家の時外郭洗馬の地也然しよりかくセンバといふ按るに京師八條不動堂青物市場の間丸をさしてセンバといふ交易輻湊の地にセンバといへる號はなくて叶はざるにや

## ○今橋通

今橋壹丁目貳丁目の邊を往古は下駄屋町といひて元祿の頃までは下駄の職家多くあつて其頃は北濱まで家建なき明地也今にても中橋筋の濱を下駄屋濱と呼びて古名残り又中古はましま町と云眼療醫師間島安德居宅今に相續す

平野屋五兵衛天王寺屋五兵衛兩角の北横町を世俗十兵衛横町といふ五兵衛と五兵衛との間の横町故かく名づく

## ○十三人町

大川町の舊名十三人町といふ

攝陽奇觀 卷之一



○浮世小路

浮世小路といふ所は南は高麗橋筋北は今橋筋の真中に細き小路ありて爰ぞ手代の隠し宿又は問屋葉柄女の身ま、になりて相應より奇麗に住居する譯はといふに奉公人の出合宿也當代の中腰元中居茶の間食燒の女に至る迄半季にわづか主人よりの給分參拾匁四拾匁五拾匁を高にして天窓のぎりぐりより足の爪さきまでを仕廻ふ事夫にかなれば冬は白無垢黄うこんの下着中着は紋はぶたへを時々流行染うへには八反がけの八丈菊田摺十反がけ隨分龜相なるが綸子飛紗綾の染小袖是にて萬事いふに及す何とて是を才覺するぞと去とはふしぎ千萬いづれも奉公しながら男の知音をいくたりもこしらへ月に四五度の假枕又は泊りのけいやく夫々に大方直段を極めて遊女同前(然)のふるまひ扱も男ほど役に立ぬものはなし女はさのみ身を働かずして金銀をもうくる事今の世のすがたぞかし

浮世小路 棠大門やしき見合

浮世かこの出所

新町色里夢想觀見合

……原本コノ所ニ以上ノ貼紙アリ……

……以下原本空白……

○高麗橋通

中古高麗はし筋繁昌のとき其頃の戯作に

- 一ニ一閑帯子
- 二ニ人形店 伊豆藏
- 三ニ三井呉服店
- 四ニ圍四角に岩 岩城
- 五ニ五明玉露堂
- 六ニ六味地黄丸 大黒屋
- 七ニ七星練藥 かゞ美屋
- 八ニ矢倉袴屋
- 九ニ櫛笄べつかう店 十二富山

○元鞆町

北濱より六筋目元鞆町といふは此所往古は鹽魚の市場なりしが 豊臣家の御時此邊を御通行ありしが鹽魚を商ふ詞にヤス〜と呼しを聞き召れ矢洲ヤスとは鞆の事なるかと御説ありしより此處をうつほと唱ふ

○道修谷

往古船場の地形は當代のごとく平地にあらず所々に谷のごとく高低ありしにや今の道修町は近世まで道修谷といふ名存せりまた島の内の鰻谷も舊き名にして谷間のごとき所にてありしとぞ

○新御靈

龜井町御靈社傳記并祭禮渡御 攝陽年鑑安永の條ニ著ス  
難波鑑に云 新御靈御弓 正月十七日



當社は津村の氏神也昔は今日いろ／＼の練りものに造り物を出すといへ共いつの頃よりか此事も忘り今はわづかに社内に於て的を立てて弓を射る人これを御弓と號くこれすなはち御靈宮の門のうちに茶屋あり此あるじこれをつとむ今日 禁裏建禮門院におるて行る、射禮を準ずるならし

○あやめが淵

新御靈の邊上古は大沼にてあやめ多く生ぜしゆへ此邊あやめが淵といふ今も平野町筋渡邊筋の石橋をあやめはしといひ御靈の社内觀音堂に五月五日より飲初るあやめ藥といふものを弘むも故ある事にや

○圓江

つぶら江は新御靈の邊より南をいふ今は津村と呼ぶ御靈の社地に菟布良ノ神社ありすなはち地主なるよし此社内につぶらの柳とて大木ありしが寛政年中の火にかゝりて失ぬ攝陽年鑑寛政の條ニ著ス

○座摩社

西成の惣社坐摩大神宮は人皇十五代 神功皇后三韓より歸陣し給ふとき神武天皇の古例によりて御船難波の岸浮見石の邊に寄す神金安鎮の爲齋(モノイ)し給ふの地也神功皇后十年庚子難波大江の岸田(袋)の島に鎮座(袋)の鎮座石なりといふ祭る所 生井ノ神 福井ノ神 網長井ノ神 くだんの三津井ノ神は竈神 名波比祇ノ神 阿須波ノ神二坐を加へて

五座とす神名口傳のよし上古賤女來りて齋を奉りける其例に依て今に例年六月廿二日夏越の大祓を齋の神事といひ往古は齋料とて田園七百六十石(寄)奇附地ありしよし難波鑑に見えたり其舊地は八軒家の南石町の御旅所にて今猶鎮座石あり世俗これを神功皇后の憩石(い)といひ此處を石町と呼ぶもこの謂也とそ上古は江口の邊まで當社の境内にして末社數多あり天正年中今の地に遷すと社務渡邊氏の説也同書に上古は住吉の神社造營の節は座摩の社も同時に造營ありしよし見えたれ共當代は其沙汰なし

難波丸ニ云 當社昔は今の八軒家といふ濱の邊りに有中ころ淡路町壺丁目に遷し其後今の渡邊に造宮勸請し奉る

○久太郎町

古圖に久多良(クダラ)とある地名は今の久太郎町也後人久多良を誤りて久太郎とするのみならず豊臣家るとき堀久太郎が邸趾(やしき)也など、妄説をも交えたり

○大坂南坊

南久太郎町堺すぢ東森祐光寺は蓮如上人御居住大坂南ノ坊の遺跡也當時大坂廿四輩 順拜の其一也

○久寶寺町

久寶寺町は上古久寶寺の趾なるよし古圖に見えたれども寺院の存せしはいと舊き事と覺ゆ



○博勞町

豊臣家の時代牛馬の博勞多く住し所を今に博勞町といふ西に上難波町といへる所元祿の頃まで二本松馬攻場町といへり按るに豊臣家の御時諸士の馬を攻たる所の名残なるへし

○順慶町

順慶町四丁目に聖徳太子より傳來の金鼓として往古よりあり例年正月元日薄暮の頃町内の時の太鼓に是を用ゆ其由縁は知らず但し亥ノ刻の數を暮かたニ打下役鐵棒を以て先を拂ひ町代右の金鼓を打宿老上下を着して警固なす事嚴重にしてこれも浪華の一奇とす

順慶町通りは毎夜商人店多く出して繁昌の場所ゆへ年中毎夜戌之刻の時太鼓を打事なしこれも希有とす

色里夢想鏡ニ云 貞享四年上木

○風景一覽

新町橋より東順慶町筋心齋橋まで三町が間商賣人のともし火夜景すがたき所也盛賣のそば打出しの麴るいことに焼まんちうは所の名物天目酒にとうふの田樂うなぎのかばやきはおどり紋付の焼もちさもしけれど食物こことか、す刻みたばこの新田屋今様の煙草入の商賣數多浮世扇屋ひん付見世小間銀替る錢ちやうばい闇の夜の提ケ挑灯

軒に聲あるこあけかご四季折々の枝おり花夏は螢の集め賣鈴むし松むし聲あるむしの商ひ淨瑠璃本の常見世に草紙物屋好色本辻打の上るり語り辻山伏の手の筋見疝氣ぐすり嫁入番養父にも功の樂うり時花哥トキハカの讀賣役者物まね太平記よみ手がひみやみせんの世渡り其他異形異類の商賣珍しき小間物道具花を鏝る商ひ此處より賣初めざるはなし酉の刻より亥の下刻まで商賣人市を飾り往來人引もちぎらす四季諸共に立込はさながら法會のごとく也夜の風景不見あられずくはしくは走廻ソウマのおり御らんとのこしり

……以下原本空白……

○初瀬町

古老云順慶町の西井戸の辻の町名初瀬町といふ往昔は此處に吉野屋某といふ人住たる時は吉野屋町と呼ひしかど右の吉野屋堀江西横堀へ變宅に及ひしより彼所を吉野屋町と改て今にかくいふ偕亦順慶町井戸の辻には其後町名を付すして數年を経たり然るに一年公邊の義出來て訴書を指出せしに町名なきゆへ何方の者なるぞと御尋ありしに順慶町通の西井戸ある辻の町の者共と申上る左あらは芳野屋町(吉)とは何ゆへ書さるやとの仰ニ付先年は吉野屋町と申せしかど同町に住宅致せし吉野屋某義堀江へ變宅仕いて則彼所を吉野屋町と呼びゆゆへ私共住居仕井戸の辻にはいまだ町名無御坐いと申上る御役人等閑なりと御呵りにてはやく町名を定め訴狀に書記し指出し可申よし仰られけるゆへみなく御門外へ出て町名を何と付べきと商議なすといへ共誰有て思ひ寄たる事もあらざれば發言なす者もなくいたづらに時刻を移せし故又もや御呼び出しにて町名は何と付たるぞと御尋ニ付いまだ定まり不申よし申上し處御役人面倒に思はれ然らば此方より町名を定め遣すべし以前吉野屋町といひたる跡なれば初瀬町



と付べし芳塾初瀬は何れも花の名處也と仰られしより初瀬町と改めしは思ひもかけず風流の名を得たるよし虚實は知らず茶話の一條をこゝに記ス

船競ふ難波堀江の水際に年経て住る老女有軒端に茂る梅檀も同じ老木といつとなくせんたんの木婆と名を流す井桁の池は苔むして世に漂ひし住居也

此難波津二年経たるせんたんの木婆といふ盜賊の張本を沈めにかけてし仕置場の井桁の中に一畫の我身を入れて井池と末世に呼すが罪亡し……………原本コノ所ニ以上ノ貼紙アリ……………

……以下原本空白……

### ○船町濱

船町の會所に火除のあみたとて親鸞上人直筆の畫像あり其外サハリ古代の太鼓を傳來ス當町會所守の元祖は長柄の渡し守にてありしか親鸞上人在世の時長柄の渡しを越給ふに(渡)涉守聖人の凡俗ならざるを見て尊く覺え様々いたはり奉りしかは聖人も其志の淺からぬを満足に思召れ折節所持し給ふあみたの畫像にサハリ太鼓を添て給はりしとなん夫より星霜を経て大坂御治世の後の(渡)涉守の子孫當町の會所守と相成り先祖より傳來の品を秘藏(秘)ス然るに中頃の主かゝる尊き畫像を俗家に所持せんは恐れありとて程近き江戸堀壹丁目圓正寺へ預けゝるに其夜會所守の枕上に立せ給ひ御佛告てのたまふやうわれ汝が家に在て衆生濟度の大願あり第一には火難の愁ひなきやう守護な

せり早々元の宅へ連歸るべしと有けるゆへ主夢覺て奇異の思ひをなし翌日圓正寺より迎ひ取奉り今に於て毎年十一月廿七日廿八日兩日は右の畫像并サハリ太鼓等を爲拜町内より嚴重に守護なせり平日とても信心の輩は爲拜せり此畫像の德によつて往古より此邊に火災ありし事なし

一説船町は往古渡し場にて此處より聖人を渡せし(渡)涉守當町の會所守の元祖のよし中古までも船町濱とて大坂第一のカセなりしとぞ

### ○京町堀

世俗京町堀を伏見堀と呼び却て其名高きは往古京町堀三丁目に伏見屋間右衛門といふ人住居して北組惣年寄十人の内なりしゆへいつしか伏見堀といひならはせりこの伏見屋間右衛門の先祖は豊臣家の士寺田某とて 太閤の御傍近く勤仕なせし寵臣なりしが老衰に及て勤仕も懶く覺えければ町人と相成身命を安く暮したきよし願上奉りしかは數度の戰勞を思召れ頼に御許容ありしより伏見に住居し折々は太閤の御城中へ御見舞のため登城なしけるにやはり帶刀鍵挾箱など以前に替らすなすよし 太閤の御聞に達し汝は町人と成ながら武家同様にして通行致すよし然れば武士と町人の間なれば以後間右衛門と名乗べしと仰られしより其子孫間右衛門と名乗しがいつしか間右衛門と呼び 御當家御治世と成しより大坂京町堀三丁目に住居し北組惣年寄役義を相勤め伏見屋間右衛門とて延寶の頃までありしが元祿の難波丸には見えず

延寶年間北組惣年寄は



北濱	大塚屋新左衛門	今橋壹丁目	米屋彌市右衛門
高麗はし	伊勢村屋新右衛門	道修町	川崎屋次左衛門
平野町	小西與三右衛門	西よこほり	木屋七三郎
京橋四丁目	伊勢屋性有	京町堀三丁目	伏見屋間右衛門
高麗橋西	大豆葉屋四郎左衛門	内平野町	天野屋利兵衛

伏見屋の子孫當時江戸堀四丁目にて書家を業とし寺田氏といふ夷曲を好んで桃李園栗間戸と呼ぶ

右惣年寄の内大豆葉屋四郎左衛門住居せし高麗橋筋の西今うをの店といふ所大豆葉町といふ

### ○勝軍地藏會

瀬戸物町信濃町の邊毎年七月廿三日廿四日地藏會あり造物夥しく參詣群集ス祭る所愛宕山白雲寺勝軍地藏甲冑馬上の尊像也殊更靈驗あらたにして往古より此所に火災なしよつて火防の地藏といふ浪花地藏會の第一とすれ共平常は小堂もなく常夜燈一基のみにて詣人のなきも希有とす

大坂市中に祭る石佛の地藏尊は上古聖徳太子此地ニ六萬鉢の地藏を埋置給ひしを後世土中より堀出して延命地藏出世地藏など、尊敬すればまた靈驗あり

### ○阿波座

あは座は往古伯樂が淵といふ  
(秘)  
冬夏秘録ニ云

伯樂が淵は大野が家來塙米田に五百餘人塙櫓をまうけ籠り居て西國方の通路を求め別而は嶋津の便を聞

傳ニ云 此所後に阿波座といふ蜂須賀阿波守に責らるゝによつて其負腹を立て後南の御堂に夜討し稻田に討れぬ

### ○阿波座鳥の考

浪花の世俗阿波座鳥か新町行て金も持たずにかをふくといへる事踊子歌にも諷ふ阿波座は新町に近く騷客の群來るさま也按るに

佛説地藏菩薩發心因緣十王經卷第一 三十八丁目

我汝舊里化成鳥示怪語鳴阿和薩加

小文才ある洒落もの此經文によりていひ出しにや

### ○四橋

攝陽群談ニ 四ツ橋西横堀ト長堀川東西ノ流ニ南北横流スルノ陌ナリ 上ツナギ橋 下ツナギ橋 吉野屋橋 炭屋橋 世ニ四橋ト稱ス河水四隅ニ滯リ船ハ二流ニ漕違ヒ道行人ハ四方ニ涉リ賑アヘル光景亦類ヒナシ一橋一名ヨリ四橋ノ一名其名高シ

色里夢想鏡ニ 橋本佐七が難波の四つばしは人あらぬ月の名所水にうかへて月は五ツ名は四ツはしかぞへてあま



遊君三世相ニ 難波の秋の西横堀水行川の蜘蛛なれば橋を四ツ渡せるも戀を通はす天の川ながれの里も程近く云々

○四橋烟管

四橋の名産烟管は播摩屋源藏を初め數軒あり或人云烟管は大坂は四歩一を好とし京都は眞鍮よし江戸は鐵張に妙ありとぞ

私考 浪華四橋の烟管は遠國津々浦々までも聞えたる名産なれ共元祿の難波雀 にはは鶴などを見るに買物所付の部に見えず其頃はきせるすなは 堺すじ 心齋はしすじとあり元祿已後より名高き名物と成たるにや

○座摩宮猿田彦

長堀高橋町の邊は博勞町仁徳天皇世俗いなりの宮と云 の氏地なるにいかなる故にや往古より例年六月廿二日の朝座摩宮祭禮の猿田彦當町へ來りて町内を馬上にて馳る事有斯すれバ其年の疫病を除くといひ傳ふ然るに一年當町の宿老いふ博勞町仁徳天皇の氏地に在ながら座摩宮の猿田彦を請待する事いかとなりて其事止たりしかは町内疫に惱み苦しむゆへ翌年より先例のごとく猿田彦當町へ臨幸あり神徳の灼然ことを知りて諸人いよ、尊敬せり

祭禮のとき神輿に先立ツ道あるべの猿田彦世俗はな高といふ所によりては王の鼻と稱じ又伏見稻荷の祭禮にては龍頭太といへり

○金屋町神輿太鼓

六月廿一日博勞町仁徳天皇の祭禮には氏地より出す神輿太鼓といふもの錦繡を粧ひ數町花美を争ふその中に異なる打扮は金屋町の神輿太鼓の撃人ウチヒタの人数紅絹の投頭巾を着せず掛烏帽子を被れり往古神輿渡御の先に立たる古例也といふ 當時は傳馬町より宮付の太鼓を勤ム

○三軒屋

大坂の昔は天満下博勞三軒屋などいふ西國回船の繁き所なりしを今新町に色つかを聚めて夜店の光り九間町の闇を月夜の晝とか、やかせて扶桑第一の花街と成れり

或書ニ云 驛亭の婢をヲシヤレと稱ふは御出有アツヤレの謬訛也然るに浪花瓢箪町の色廓の妓品に六字わけなと契價を以て品名を立る其賤き卑劣尾籠也嗚呼大坂は商賈輻湊(轉)の地に決せり



新町茨木屋四郎三郎方 表の間襖 宇治川先陣の畫

狩野筆 同奥座敷妻戸ニ 樵夫畫

狩

野筆 古物也

住吉屋重兵衛方 鮑 盃

住吉屋半次郎方ニ

種ヶ島盃

舍中大盡の送り物也

中古打われしをふた、ひ長崎にて唐紅毛つきにせし添

文あり 文略 奥に狂歌あり辛崎の松の意をとりて

住半の名をおもはく種ヶ島ふた、ひわれぬためしともかな

此盃を以て飲し強客は帳に志るす也

### ○高嶋屋奇石

高嶋屋長次郎方奥庭築山に猿の形なる石いつの程よりと知らず有しにフト人の  
清め崇むるより願ひ事もきくよしにて毎朝廓の者參詣す中古此石を盜取て外  
へ持行しにいつとなく又高嶋屋の庭へ戻りありしといひ傳ふ



……以下原本空白……

### 天満郷

上古の菟餓野<sup>ツガヌ</sup>は今の天満なりといふ説も定かならぬにや浪華舊地考ニ云 彼都賀野<sup>ツガノ</sup>を今の天満といふもいとつき  
たる言にして信がたし彼地は四方に海川の廻りて河洲の地と見ゆれば上古といへども鹿の住へき地にあらず是は  
た所の違へるならん云々

○

大坂三郷といふは北組南組天満組なれ共往古は大坂二郷にて天満は南中島の地也今土地繁昌して大坂の町續と成  
たり古キ繪圖には天満市場の邊建家見えす

萬治天和年間の俳士伊勢村意朔翁の連歌に

漕出て作る繪の船遊ひ

天満の神事見るはとこ衆

大坂は二郷に分ツ北南

念しているか宗旨改め

意朔翁は大坂立賣堀に住し其頃連歌に名高き宗匠家にて天和の高名集萬治の百人一句寛文の哥仙等に出たり

村童の口號に大坂の餅と天満の餅と競へて見れば天満の餅は大きい事は大きいが豆の粉がすくなふて云々今ニ童の口碑に

残りて大坂と天満の隔たる事分明也

……以下原本空白……



○堀川惠美須社畧縁記

祭神 三座 蛭子尊 少彦名命 天太玉命

抑當社惠美須の神社は昔時難波瓊見島惠美須の神也人皇十七代仁德天皇十一年冬十月に宮の北の郊原を掘て南の水を引西海に入る其水を名つけて堀江といふ則城州淀川より攝津國東成西成二郡に入る今の太川是なり欽明天皇の御宇予が高祖上毛野吉雄 人皇十代崇神天皇の皇子 豊城入彦命の後胤なり 夢中に老翁來現して語曰 吾是蛭子ノ神也難波堀江の芦邊にひとつの瓊あり是吾神靈也是を得て祭るへしと告給ふと見て夢覺ぬ吉雄奇異のおもひをなし夢の告にまかせて堀江に至り芦邊を見望に神氣立のほりて誠心感動すこゝによつて水底を窺見にひとつの瓊あり 忽水中に入て是を得たり茲において急き上洛して右のよしを奏聞し奉るに帝歡感ありて吉雄に瓊見の姓を給り則惠美須の神靈と崇め當社に祭らしめ瓊見の神社と號せしむ玉の出る所を玉江と稱し來れり 御鎮座より今 千二百年餘成 其後曾根の何某といふ者常に惠美須の神徳を仰き日毎に當社にまふす渴仰のあまり惠美須の神形を拜み奉らんことを祈り當社に參籠して丹誠を抽んで通夜祈念をなせり不思議なるかな五更に及んと欲する比神檀の御扉自然開けて玉の形を拜す其玉の中に惠美須の神像分明に顯れ給ふを拜し奉る歡喜胸にみち渴仰肝にめいじ則拜し奉る所の尊形を木像に刻んで吾家に祭る威徳日々に敬々歎靈驗益々盛んなるをもつて永く民家不淨の家に祭らんことを恐れ奉りて當社に來り神檀に納め祭らんことを乞ふ神主もまた前夜靈夢あつて神形を得て祭るべしとの神勅を得ることをもつて當社に納て尊敬し奉るに曾根氏の家繁榮日々に増富饒月々に盛んなりき誠に信心堅固の家には神の御惠みふかく感應ある

ことむへなるかな 孝徳帝の后當社の御告によつて淡島明神にきせいしたまひ御腦平愈まし〜により神像を彫刻し白雉二年當社三世の神主吉延に仰有りて當社に納め祭らしめたまふ 今千百年餘 大寶三年文武帝の御宇當社

第五世の神主吉明神託を蒙り天太玉命を相殿に祭り奉る是よりして當社三座に祭り奉ることよかなり

右社記に顯すことく來由いみしき神社なり惠美須の神は土徳の神にて一切萬物を生出し土農工商を撫育なきしめ給ひ海陸渡世の業を導き就中商家の幸をあたへ給ふ御神なるをもつて往古より以來其神徳を仰き奉り家々に祭らざるものなし誠信仰厚き家には横難をのがれ商業の御惠を蒙り 幸あつて富榮に至ること現然たり實に仁徳廣太の尊神なり 粟島明神は醫道の神にして分而婦人を應護し給ひ信心堅固の輩に至ては醫療の及はざる處の難病をすくひ給ふ故に往昔以來上は天子より下萬民に至るまで普く渴仰し尊敬すること衆人のしるところなり天太玉命は房州安房郡に御鎮座ましまし洲崎大明神とあかめ奉る愚昧を憐み聰明睿智をあたへ給ふ神徳不可思議の御神なり當社の來由粗かくのことし委き縁記は別卷にあり略して爰にゑるすのみ 〔編者曰ク原本ニハコノ縁起當時板行ノマ、ヲ二丁ニ分チテ貼付アリ〕

○北埜錢觀音

往古平家の侍景清は源家の支流相州三保谷ノ住人相郷太郎國久か嫡子にして母は平家の侍上總ノ忠清か妹也國久これを娶つて後其嗣子なきことを患ひて觀世音に祈ける或夜母か靈夢を感せり觀音の御手より寶劍を賜はると見て子を孕む誕生の後聰明勇氣平常の小兒にあらず幼名をは一虎と呼ぶ或夜母と俱に寢しに同じ夢を見る其夢は一虎上總國周集川に臨んで釣を垂れ一喉の魚を得たり此魚一虎に飛か、り害をなさんとす時に千手觀世音顯はれ給



ひて彼魚を吐し給へは忽逃去りぬ此時觀世音告給ふは一虎宿世より縁あつて父母の願ひに應じ汝を生ぜしめ晝夜大悲かけのごとく守護せしめ今の毒魚は汝か前生の怨敵也永く此妙文を讀誦して諸の危難を拂ふべしと宣ひて二句の文を授け給ひて夢覺ぬ其文曰

南無頂上佛 面除疫病

南無最上佛 面願滿足

かくのごとく也起上りて沐浴して夢中に感見する所の尊像をうつさん爲に黄金を撰み千手千眼觀世音御長壹寸八歩に鑄奉り背に景清自筆を以て(姓)姓名を彫刻せり平日其身を離さずして生涯の守護佛とせりこれ京都東山清水寺圓養院の觀世音なり扱景清か弟に景貞出生ス伯父上總忠清嫡子なし依之一虎を乞受て忠清か子とするこれより(姓)性を改メ上總七兵衛景清といひて平家の一族とは成れり景清兄なりといへ共母の靈夢に應じ出生せり其子なればとて母方の家系を繼ぎ忠清か嫡子となすも故ある事也後年尾州熱田の大宮司道香か娘を娶りし此由緒を以て相州より適々尾州へ來る其序に都に出て東山邊の阿古屋といふ遊女に在京の内馴染てまたしく談らひける景清馬術は百里を馳せ一弓に五箭を發し其強剛比類なし然れ共戰場に臨んで功を他に譲り勝事を千里の外に決せんとす景清常々人に語りけるは我血脈は源家にして今平家の家系をつきて源平兩家の天運を考みるに盛衰遠きにあらす我一人の功を以ていかんとすることあたはずたゞ時の變に應ずるのみなりといへり誠に此言のごとく源家衰廢の内より威風森々と盛んになり平家繁昌のうちより權勢凋シボめり終に八島の一戰に敗北して景清も三保谷と組んで勝負を決せずして跡を隠しぬ厥后源賴朝へ平家滅亡の恨を報せんとこ、かしこに蟄居し幾程なく天下一統し幕下南都東大寺

再建の供養の爲に上洛せらゝると聞景清これを忍びねらふ其時伯父大日坊を支へて却而擒にせんと謀る故に止ことを不得して伯父大日坊をうちこれより惡の字を冠しめ惡七兵衛景清と呼ふことは成れり然るに賴朝公の上洛は跡方なき事にて鎌倉に下り弟三保谷四郎國俊に逢ふて互に謀つて生捕と成り賴朝公に見參ス原來源家より出たる景清なれば降參の事を強て申下さるゝといへ共伏せず依之扇ヶ谷の牢獄に入らる獄屋の内にて自ら兩眼をくりぬき盲人と成り牢を出て幕下に謁せんことを乞ふ則是を許さる景清申ていはく我源家に産れ平家を繼ぎ然れば源平二ツながら兩眼のごとし今盲人と成り源平共に捨たり既に怨害の心なし今よりは遠境に退居し一生を過さんといふ幕下感じ給ひて日向國宮崎郡下北方の郷へ下し遣はし資料を賜ふ夫よりは右の觀世音を供養し夢中の妙文を唱へ常行とす爰に東山邊に住ける阿古屋此事を聞て日向國に趣(赴)き再會をなす景清あこやに申て曰此觀世音を汝に附屬す此尊像の脊に我二字を彫ル是全ク我名を傳ふ爲にあらす昔夢中に拜受の妙文を唱へ此利益にて數ヶ度の合戰に流矢刀刃の災ひを防ぐ其疑惑を末世に知らしめんため洛に歸り此觀世音を安置し結緣すべし則我名を水鍛(スイカン)景清居士と呼ぶべしといひ終つて行年四十八歲建保二年八月十五日に逝しぬ阿古屋遺言を慎み紅涙をおさへ遺骸を葬りぬ今日向國宮崎郡に石碑顯然たり其後あこや從弟に造酒之介といふ者ありしか佛道に歸依深く此尊像の奇瑞難有ことを尊み我方へ守り奉り佛殿を結構(魏)に營み莊嚴魏々として朝暮渴仰の思ひをなし毎日拜禮の砌には鳥目一錢ツ、水にて清め清淨になし御名を千遍ツ、唱へ尊前に捧げ奉りし事日々に怠る事なし然るに建保の末時節にて有りしや隣家より火災起り折節魔風頻りにして佛殿に火移り悉く燒失すされ共本尊は主人火中へ飛込み守り奉り御無難にて今におゐる洛陽東山清水寺に景清觀音と拜まれ給ひし也然るに右灰燼(クワイエン)の跡より不思議なる哉光明か



、やき給ひければ諸人奇異の思ひをなし灰をソト取のけて見奉れば右一錢ツ、御名を唱へ奉りし鳥目火勢にて態々細工人の鑄奉りしごとく觀世音の御尊像出來させ給ふ事凡人の手業に不及事<sup>(奇)</sup>寄妙とやいはん寔に三國無雙一躰の尊像とは此御佛の御事也殊更靈驗奇瑞目前世舉て普く知る所にして夫より時移り末世の今に至つて大坂北埜神明の近邊に錢觀音と拜れ給ふ

生玉 玄德寺

錢觀音あり

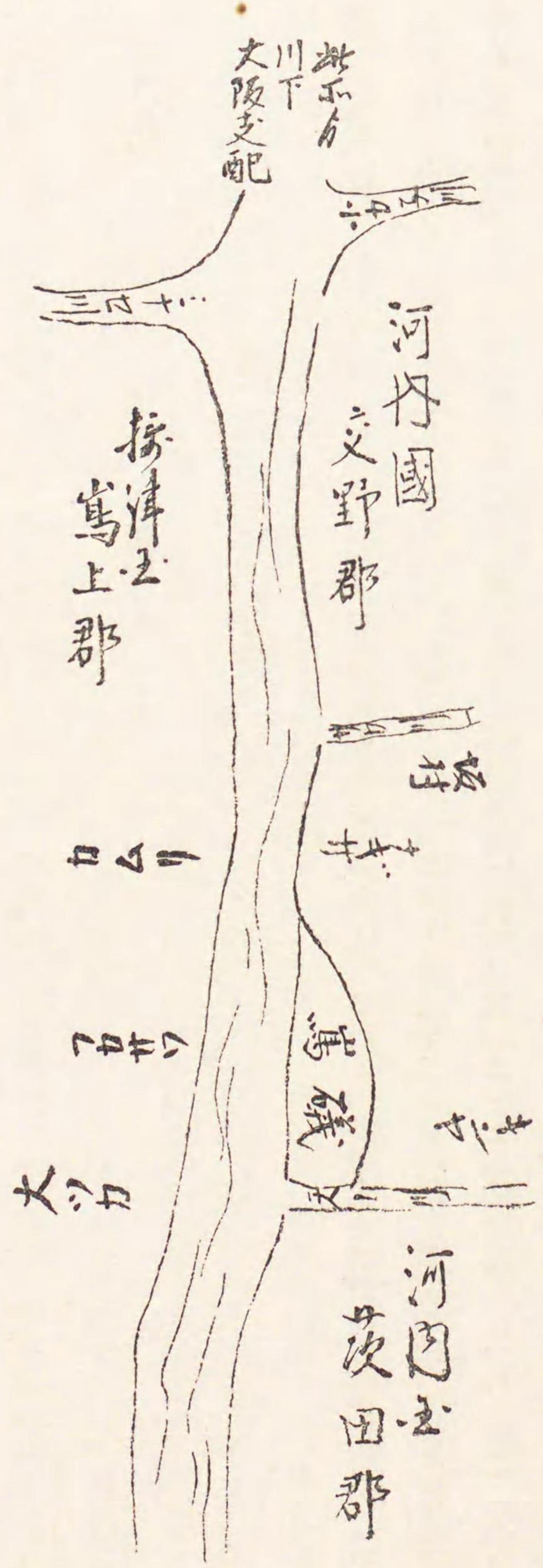
……原本コノ所ニコノ貼紙アリ……

……以下原本空白……

### 淀川之部

#### ○磯 嶋

淀川は五畿内第一の大河にして六國の水こゝに歸會す所謂山城近江河内伊賀丹波攝津也淀川の一名近江川といひしこと舊き圖に見えたり此川筋に一奇とするは磯嶋といへる地は河内に續きて川を隔て攝州領也其故は往昔淀川東に流れ磯嶋の東を通りてまた西に流れ南に通する川筋ゆへ川ゆがみて水道あしきニ付磯嶋の西を堀て淀川を直に南へ通す故に西の田地川床と成往古の川床今の磯嶋と變れるゆへ河内に續きて攝州に屬す



#### ○地の高低

京都と大坂との地の高三十六町ありとぞ

#### ○磯島の忍女

昔は磯島にもうかれ女の有しと見えて或書に

鵜殿の芦はまだ筆に見なして旅の心を書つとけて行に左りに天の川磯島といへるも舟子の瀬枕忍女ある故ぞか



かし右の方は西行の假りのやどりと詠し君の跡して榎の木柳隠れに佇しきひとつ床残り同じ汀つゞきに三島江といふ里も昔はうかれ女の住しとかや

○江口の謠曲

或書ニ云 蜷川新右衛門江口の謠曲を作して一休和尚に噂せられけるに一休次第はと問給ふ月は昔の友なればと答ふ又切はと問ふに西の空に行たまふ有かたくそ覺たる有かたくこそ覺ゆれと答ふ一休はたと手を打本文は見るに及はず嘸やよく出来侍らんと推したりと宣ひしとぞいかさまもの、首尾調はざれば全き事は有べからず

○守口漬

守口漬は燈臺下閣シにて浪華にては賞せず關より東に賞す

○淀川名所の文

都へ登りい毎にいつもあかぬは淀川の流れてい水馴棹さす手ひまなき笹船の將基島をは漕離れ野田の入江に干網の行先き續く櫻の宮こなたにみゆる鶴満寺橋の名のみは朽すして昔ながらの雉子繩手鶯塚や鶴墳の其跡留めし柴島に晒せる布は時ふらぬ雪とやこれも見えぬらん江口の里の假りの宿心のとまる君堂は其ゆかりとてなつかしく馬手を遙に詠れば先目にかゝる生駒やま驚の尾野崎龍尾寺に清瀧峠見渡せば山の名に似ぬ岩船や獅子窟寺より

程近く流れて落る天の川あまみつ神の神靈をこゝにも鎮め奉る佐太の御社伏拜みたのむ佛の來迎寺交野のみの、櫻狩またやみんとか詠しけん其歌人の面影も今は渚の里過てはや弓手にも三島江の玉江の沼に玉川の卯の花咲る水底も深き誓ひの惣持寺や芥川には葉平の露とこたへし古しへのことの葉艸のかりそめに其名を残す伊勢寺や能因塚の哀れをもいかに岩手の岩つゝし解<sup>(遊)</sup>近山の金龍寺春は來て見ん入相の鐘に散てふ櫻井は彼南朝の御代とかや父の教に正行が別れていにし古郷のその故事も千早振神南備の杜にあぐれする頃は紅葉の色を添ふ夫はそのかみ待宵のゑるしの塚を思ひやり水無瀬の瀧の絶やらで流るゝ末は谷寺に尾上の鐘は音に聞かの宗鑑の古跡とて幽に残る山の井の淺くやはくむ妙喜庵千の利休が心をは筑紫の宇佐の神垣をうつしてこゝに棟高き山崎千軒寶寺天王山の頂きに立る鳥居は是やこの所の氏の神ならし其麓なる觀音寺墓の松を霧間より美豆の御牧の跡とえは近き鶴殿に生茂る芦毛の駒の打渡す橋本の里小金川けにきらめける宮居こそ鳩の峰とてかけまくも賢き君の御靈をは崇め敬ひ奉る八幡山とは申也動きなき代の石清水清き流れに鱗の遊ふも月に影みゆる放生川を越過て雄山にも立るなる女郎花の墓男噴昔を問へは今もなを涙の淵や鳴渡る淀の渡りの郭公きこえあけたる雲の上そのゑら雲の吉野山花待頃の朝なく心に懸て見し人の仕へし君が金城は今を榮へを水車行廻りツ、いつしかも日影は西に吳竹の伏見の里に船をとどめまいらせし尙都の名所は又の便りにあるしいて御覽に入りてたくも

……以下原本空白……



浪速の里より都にのほる夜船に乗合して淀川の十里の流れにさかのほり侍る夜もすから舟人の働き竿さし綱ひき物をたうべ湯をのむ間もたゞ居るいとまなく走りあがりては綱をたぐりて舟をひき飛のりては竿をさし又楫をとる凡申の刻はかりより明るあした日の出るまでまことに寸の間も休む事あたはずこしにても心ゆるせははや河下に流下る餘處の舟におくれんことを歎きて力のかぎり飛あがり飛のりし侍るかゝる世渡りのわざ何にたゝふべきものなしされどりのり人の中には舟の遅き速きなどいひのゝしるもあれどよのつねおのが身のわざのかゝるつとめの出来侍らぬことを思ひもはからず愚にも又淺猿しく侍る此舟人夏の夜は蚊にせめられつゝ夜もすから艸むらわけて舟をひき冬の夜は霜をふみ氷をくだき河岸より飛のりて舟をさし又舟のすはるときは氷の中に飛込みて舟をもす四人の舟子われ劣らしと勵みあひて働き侍る此いとなみ見るもいたましく思ふもおそろしみな人此舟人のつとめの事を我身のうへに朝夕思ひくらべてはけみあひくつとめくし侍らは世中のいとなみ高きいやしきわたり安かるべしあかも此舟人のごとく夜と共に目もあはせずかせき働き侍るにも及はず大方晝のほど油斷なく其身々々の家のわざを勤めはたらき侍らは何か心の苦しみ出来侍らんあかあれど肱を曲て枕としたのしみ其中にあらんとぞ

電網のたゆむ間もなく夜と共にかせく舟子をまなへ世わたり

### ○淀川すはひ女

元祿の頃は淀川の船へ都のすはひ女小舟に棹さし來り小間もの晝草昏の類を商ひしと見えて宇治加賀掾の院本雁

金文七といふものに清川の道行のほり船の文中に

落<sup>レ</sup>にのこる水鳥と聲をくらべて商ふはさながら京のすあひらしめせくめされや手のごひ腰帶旅ゆがけ針や白粉揚枝さしに寒紅粉かうがい針さしはさみ毛ぬきに櫛手箱御影堂や祐仙が直筆扇奈良團かるたこきりこびんさゝら獨り笑ひのでつこのほうわかい子達のお手の道具きはすみかけ香やたきもの小田原うるらう墨筆雁金の文七や曾根崎のお初が心中繪さうし空直ごさせぬサアノめせく買んせぬかと賣聲はきやしやではすはでちやんとして云々

或人元祿九年出版の道中記を藏スその中に淀川の條に伏見下り船賃十文とあり其頃を推量せば萬事かくのごとし

○

新齋夜話云 浪花の大商辰巳屋の鼻祖は船士なりけり或富人伏見より船にのりてなにはに行とて船士に語りけるは何と此あたりの舟士の中に近年富有になれるはなきやと尋しかば舟士答けるは左様の者はいはず但し其物語も子細もいにやこなたにも少々承り度事のいといひければされは三年以前船わたしせし時五十金入て持たるを棚の下に置つゝ眠り居て船着しかば急ぎ上るとかの金を忘れ道にて心付しかど尋る共たやすくは出まじ我は是を失ひてもさのみ事かく身にもあらず拾ひし者の幸ひよと思ひてその事いひも出さざりしが其者今は富有ならんとふと思ひよりしまゝ問ばかり也と語りければ舟士いふやう我は浪花の者にていが其金は拾ひい何人の落し置れしや



んら返し遣すべしと存いへ共急には知れがたくいゆへ先持て歸り其ま、封をつけ妻子とも見付ひてもし失ひもやしいはんと持佛堂の佛だんの底にかくし置其主に逢次第に返すべきと餘所のやうに問ひへ共今まで逢申さすい我宿へ御供申右の金を渡シ申べしといふに旅人驚きさりととも正直の人かな左程まで心を盡し申さるゝ事誠に類ひも有まじ左あるうへはそれを送り申べしこの眞實たゞには置べきやうもなくい間おもく禮を致申べしとて雑喉濱の元船をゆづりあたへけるとかや夫よりして今のごとく大富者と成られしとなん

……以下原本空白……

○船の名目

- 千斛船 帆廿六反筵數三百十二枚櫓數十八丁 鐵碇八頭重サ四五六十貫目
- 檣垣 大坂廻船問屋の大船垣立の筋をヒガキにするゆへ名とす
- ハガヒソ 越前船也舳の形チ鳥の羽がへのごとくなるによつて名付ク
- イサバ 小船にして磯邊を行を以て名とす
- 押廻シ 千石船也舳を高くマゲ上ルゆへ押廻しといふ
- 北國船 ドンクリ船といふは形の似たるを以て名付ク

御座船 二階のある船をいふ

過書船 淀川筋運送の船三百積今は川筋淺く成りて用ひがたく當代は小船としてテンソウ船ともいふ世俗あやまつて天道船と呼ぶ

間三 小三十石と四十石船との間三十石船也

三十石船 淀川筋往來の船

今井船 禁裏え調進の生魚を積ム今井道伴初たり

上荷船 廿石積 堀江船は三十石もあり

茶船 十石 荷物運送の船也

……以下原本空白……

○過書船の虚談

世俗云 攝戦の初め眞田大助十五人の郎黨をつれて枚方堤に埋伏なし地雷火を以て 新將軍を却かし奉りしに辛崎村の平六といふもの小舟にめさせ己があばら屋へ伴ひ御介抱申上奉る 大將御喜悅の餘り其方事今日の働き平均の刻褒美は望み次第に取らすべしと御自筆に遊ばし下されければ其後平六右の御書付を持參なし言上に及ぶ御



老中いづれも一覽有て大きに驚き褒美望次第とは過分の事共かな然りといへ共 大將の御自筆なれば詮方なく望みを申べしとある平六百性<sup>(姓)</sup>の義なれば外の事は望まず大坂より伏見迄の通船御免被下べしと願ひければ早速御免あつて望次第との御墨附は書過たりとの心を以て過書船と其名を給はり今大坂に通用する淀川の船是也其會所を建し所を過書町といひ今は大川町にあり右平六は望みの通り船御免のうへ三百石の地面を給はりける

○關 船

西國筋諸大名參勤交代の節の御座船を關船といふは下ヶ關を渡海の船なるゆへ也

參勤交代の節大坂表大川筋にて諸荷物往來の船を指止ル諸侯はわづか也但シ川口御船奉行より小指の先拂ひ出ルときは往來の船を止ル又橋上往來の人留をなせり

○ピ ム シ ヨ

安治川口木津川口へ入津の大船へ伽やろふといひて古びたる三絃携たる女を堀江六丁目 小船に乗せ行をピンシヨより出ると呼ぶ東武にて船まんぢうといへる類にして上古の淺妻舟の遊女などはやうかはりて中古は熊野比丘尼とて地獄極樂のゑときして人にありがたからせ熊野の牛王を賣てさも殊勝けにありしもいつの程にか色を商ひ舟比丘尼といひて小舟に打乗り大船毎に漕寄れはいつとても米薪などをあたへるならひと成りしが今のピンシヨといふものも米薪を受るは舟比丘尼へ布施物をあたへし遺風なるべし

攝陽奇觀 卷之二

東 生 郡

……原本コノ所空白……

○蛙 岩

東生郡林寺村<sup>（いんじやう）</sup>の民家の裏にあり此奇怪の岩なり鳥獸の類ひ來りて此石上に觸れば石の頂きニツに割れて口を開らくもし鳥蟲の類を落し入るれば又もとのごとくになるを以て世人殺生石ともいへり又岩の形り蝦蟆<sup>（カエル）</sup>のごとくなれば蛙岩ともいふといへり今は在所もさたかならぬにや

狂哥絲の錦ニ

林寺とかやいふ在所に蛙岩といふあるよし見にまかりしにちれざりければ

埋れしかはつの岩を見るならば五兩十兩何かいとはん

百子



○鶴橋

東小橋村平野川筋にあり 所傳ニ云昔此橋の邊ニ鶴多集る事あり夫より以來橋の號と成といへり一説猪甘津ノ橋の古跡共いへり日本書紀ニ所載小橋の號あるに因りや

○うぶゆノ雙月

うぶゆの東田の中に雙び月とて望の夜の月かけふたつ雙ひてうつる所あり更科の田毎の月とはやうかはりてひとつの田の中に二ツの月影みゆるを希有とし秋の中空にはかならず尋行べし殊更所がらも閑情にして稻葉に戦く風のけしき千艸にすだく蟲の音もあはれ深し

……以下原本空白……

西成郡

……原本コノ所空白……

○北埜大融寺

佳木山大融寺は 嵯峨帝弘仁辛丑年御勅願所也本尊は釋迦藥師千手觀音の三尊也則弘法大師を請し開眼供養をなし給ふ 帝御幸の地也其後左大臣源融公志願を起し承和乙丑山鐘經七堂を建立し給ふと也故に融公の御諱を以て寺號と命し大融寺と稱し給ふ

三千風笈探云

大坂佳木山大融寺の縁記をかき又觀音堂の軒のつまに一板の法樂に

一阿の命月は佳木山林の露にやどりて不生に生をあらはし三密の息風は大融寺園の花をかほらせて不滅に滅を志めす信に世の音を觀世のかたちをきくむへ妙成かなかつ法なるかな



思ひきや都にちかの鹽釜を難波わたりにうつしみんとは  
鹽竈やむかしを拾ふさくらの實

# 天筆如來回答條記

攝州西成郡南中嶋濱村淨土天念佛宗本山三昧院源光寺本尊天筆の阿彌陀如來は御長壹尺八寸有餘の畫像來迎引接の尊影也蓋以元是神天所持の靈佛にして此世の工の急がける所にあらされは古より傳て天筆の如來と稱す情人界下來のらんじやうを尋に人王(皇)五十六代清和天皇の御時播州賀古郡に教信といふ人あり西には垣もせず極樂と中をあけあはせて本尊をも安せず聖教をも持せず僧にもあらず俗にもあらぬ形にて常に西に向て念佛し其餘はわすれたるが如し身をもて人に任せ日を送る計をなしたまひ耕耘の時たも隙なく念佛して口占としければ雇仕の人字してあみた丸と云かくて貞觀七年七月七夕の事なるに今夜は星合の祭なれば比屋連門みな甘瓜靈机の供を設己が願の絲を竹竿に掛て飲醺の樂を極る事甚多し時に教信おもへらく我這般の事をし羨す唯望所は是より西方に吾儕衆生の慈父ましますいとはやも此尊にあひ奉らんと願ふの外他なしと通夜西の空に向て念佛す時に西の方より奇雲むらがり來り其中に聲有ていはく我は吉野勝手明神なり汝が年來の願望至誠にして甚佛意にかなへり我今西方彌陀尊の勅によつて汝に希代の本尊を授ん我此尊の威力をかりて人間を利益する事既に年久し汝全く生身の彌陀を拜する思をなし念佛相續せよ尙往生の期近からんとて是を教信にあたふ教信感涙肝にめいじて修得しいよ

く信心勇猛に念佛して翌年八月十五日いみじき往生をとけぬちかのみならず其夜勝尾の勝如上人に往生の事を告げるとなん其より後此天筆の尊像教信が庵にとまりき國中の道俗信心のあゆみをはこひて供養する事たへざれば草庵自然に寺と成ぬ今教信寺是なりあかるに當寺傳來の由縁は五百餘年を経後醍醐帝の建武年中河州深江の里に法明といふ人あり是則良忍上人昔日鞍馬の多門天の發起に依て立所の融通念佛の行業をつとめ無二堅固の道者なり時に建武四年八月十日の夜口に佛名を合ながらまどろみければはからざりき夢見らくひとりの沙門の髑髏眼口ゑめることくなるか空中に現じ法明に告ていはく我は是播州賀古の教信也奇哉上人ひとへにおもひを西刹の蓮臺によせ信を他力の本願にこらすこと日久し豈往生の益むなしからんやあかるに賀古の郷我住し舊跡にあみたぶつの像をとどめ置ぬねかはくは彼に至て聖容を拜し且退代の爲に結縁弘通して平等の巨益を得せしめよとなり時に法明夢さめ告のやう身の毛もよだつばかりに信しあへ急て彼寺に至に僧侶みな待ことあるがごとく先をあらそひ出迎ひ法明に語ていはく我等昨夜靈夢を蒙りぬ當寺の開祖衆僧のまくら上に立告ていはく明日河州深江の法明といふ人此場に來るへし二心なき稱名の行者なり當寺傳來の天筆の靈像をもつて彼を附屬すべしとなり是に依て上人に度與し奉るといへり法明異口同音の感得を聞て歡喜の涙せきあへすいな、く請傳て歸るいまし攝州南中嶋の内鷺嶋村に至りゆかりある家に宿を投す時に此縁よにもれ聞ゑて貴賤男女渴仰の袂をつらね雲のごとく集り結縁せざるをはちとす貧家狭少なれば四衢大道に出て竿の上た如來の像をかけておがましむる事既に一七日毎日の群集およそ三萬餘人一たひ尊顔を瞻仰するものはおのつから無上ほたいの心をこしあるひは聾盲暗啞癩狂癩の業病にくるしむものも懇祈するに平復の利生を感じあるひは難産逆子の愁にまづむ婦女も頼を懸てたちまち



易生の紐をとき一人として現當の諸願成就の志を得ずといふ事なし終に其所に供養の塚をつき鷺嶋村を改て塚本村といふ今猶其名を存せり爾時法明おもへらく當國はによらい有縁の地なれば居を卜て安し奉らんと其夜又夢ともなくうつゝともおほへす佛ちよくを蒙りていはくたへたる法灯を繼ぎすたれたる道場を興し我を（コノ間一行脱落か）ぞつてゆづう大ねんぶつの本山と稱しあがむあかしより已降如來の靈驗日々新に年々に夥し毛舉にいとまあらず粗其一を述べて示ん大永三年の秋富嶋領の近里遠村田畑おしなみ稻蟲のわざわひありて稼苗を損し農家うれふる事かきりなし翌年の秋もまたあかなり故に國の主をはじめ百姓萬民天神地祇に祈り呪願おもひをつくせとも此わざわひ排かたし時に衆議していはく是いかなる天災にや此たゝり存なるあるは又天曇り雨降るの朝夕にはものゝ怪の聲など聞もの多し若是想ふに此ほとり往日の戰場なれば數萬の亡魂住持せよと法明且おとろき且よろこひ急て千載の聖蹟をたづね求るに同中嶋の内三昧院源光寺は人王四十五代聖武天皇の御宇天平十九年行基菩薩ふしきの因縁有て七堂伽藍開基したまふといへとも星霜ふり盡して佛閣僧舎みな陵夷して形はかり残るもいとふたはれければ是なんかけまくもかしこきによらいの御はからひの處成へしと志を抽て中興し蘭若をいとなみ建て天筆の尊像を安置し融通大念佛の宗風を振ふに五畿七道の人民草の偃かごとく信を投してきそひ來り花臺の芳契を結ぶ是に依て四來の緇素古今に至まで輪廻して修羅の苦域を脱れす其餘習の成す所にもやあらんまかじ唯天筆の如來は本より大悲の利生新なれば此時に臨て功験を頼みなんとて村の長なるものとも國の司る訴る僧侶をいさなひ尊像を荷戴して鐘太鼓を打ならし念佛して經廻るに果して一夜の内に枯れ萎める千町田の稻葉も忽に青み出て億多の蝗も跡形なく消失けりあまつさへ茲年は穀物たぐひなくみのりぬれば偏に本尊の現益淺からず不

儀とも尙いはんかたなし佛恩を報し奉らん爲に人は箇々分に隨ひ斗舛の供米を捧奉る時の守護細川高國公も猶感心の餘り家累代寶物澤摩法眼みつからゑがけるあみた佛の尊像一幅并に教書謝糧拾石を寄附し毎歳永規として門徒中千部讀經の興行に助力したまひ太鼓念佛の法要を勸修し如來を函に安し錦の袋に入れて村々の戸々を廻りて護念の益を弘通せしむと也 雖爾星移り物換りて舊式皆滅したれ共今猶其轍を追て秋毎只門徒の中のみ如來を守廻りて念佛勸進す古今世異共不共の攝益何ぞ隔ん恰谷の響に應かごとし何況利物偏増の蜜意は尙未代に頼有やお嗚呼可仰可信此世及後生能令速滿足の如來也各自に深歸して諸願を成し給へ仍略緣起如件 正徳六閏二月十五日 〔編者曰ク 原本ハコノ縁起ノ板行ヲソノママニ五丁ニ亘ツテ貼付ケアリ〕

……以下原本空白……

○攝州北中嶋江口君略緣記

諸佛薩埵利生方便は水にやどれる月のごとくにて更に凡心をもて思議すべからず當院光相比丘尼諱は妙のまへ此里に住給ひて往來の船に（一字）の一ふしをこめ心を慰しむるに似たれど眞は生身の普賢菩薩苦海の衆生に出離の縁を結ばしめ給へり西行法師天王寺に詣てしかへるさに一夜のたびねを求むとて

世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりをおしむ君哉



とよみしに妙のまへ返事

世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなとおもふばかりそ

と詠じ給ひき其後此所に地を志めつ、普賢堂法花三昧堂など經營し寶林山寂光寺と號す又みづからの形を法體に刻み五障の女身といへ共菩提心を發し衆生を慈念したるためしを見せしめおらしめ貴婦賤女乃至遊君白拍子のたぐひをもあまねく無上道に入らしむる結縁とし給へりかくて元久二年三月十四日西嶺にかたふく月と共に普賢菩薩の相をあらはし白象に乗て去給へり御弟子の尼衆更なり結縁の男女哀悼の聲隣りにきこゆ終は遺舍利を葬り寶塔をたて勤行おこたらざりき然に元弘延元の亂を経て堂舎佛閣焦土となりつれど猶寶塔はつ、がなく靈像は嚴然として安置せり去る明應の初赤松丹波守重病にて醫術手をつかね既に今はと見へし時此靈像を一七日信心供養せられければ菩薩の御誓ひたがはず夢中に異人來りて赤松氏の頂をなで給へば忽に平癒を得たり猶如此の應現あけてあるしがたし爰におもふに妙のまへの妙は轉妙法輪一切妙行等の妙なるべしされば此君の御名を聞人も現世安穩後生善所の樂しみを極めん事疑ひ有るべからず

普賢院

〔編者曰ク原本ハコノ縁起ノ板行ヲソノママニ一丁ニ貼付ケアリ文字廢滅讀ミガタシ〕

……以下原本空白……

北登福鴻天満宮本縁

旧地ニ曰振列古坂の邊に山折村といふ  
梅有り云氏号して綱安れむめと云  
法右は徳の御後福後乃宮に  
善い大付氏なり一人も女なり姫子  
之り後人その異を天神と  
阿が先海つる



上福嶋 穂積氏女照子靈也

中福嶋 穂積宇喜多靈也

下福嶋 妻大伴氏靈也

其本縁は往古菅原神君築紫大宰府へ左遷の御時淀の川船にめされて御下向有御船を此嶋にさしよする岸頭に梅樹あり御船の鰲を繫て菅原君舟よりおりさせたまひ。梅の樹下に座したまひて四方を眺望し給ふ。時は秋のはじめなり。梅に對して御詠哥有

行水の中の小嶋の梅さかばさぞ川浪も香に匂ふらん

爰におひて京師より御供の御家人等に御對面有て御暇を被遣。各々京都に歸り。洛西大將軍村に住居して野夫と成り畢ぬ

御家人等子孫今に到て北野社役を務毎年六月爲恒例奉供御に榮種の御供といふ

御家來新羅氏某といふ者。菅原君の御先途を見届ケ奉らんが爲。頻に配所の御供を願ふ。時の奉行新羅氏が忠誠不淺の志感に堪すと雖も。天聽の恐れあり。後難遁るに所なしとて。終に御供を免さず新羅氏がいわく。進んで配所に行事あたはず。何そ退ひて帝都に歸るべけんやとて。此嶋に留りて野夫となり耕し耘して春秋をおくる

子孫代々北野村に住居す新羅氏は也

菅原君穂積氏が茅室に入れたまふ。宇喜多夫婦息女照子心をあわせ。菅原君を勞奉り饗應の志シ淺からずといへども。家貧くして心にまかせざることを欲き宇喜多菅原君を奉拜落涙して申様。野夫此嶋の主として住居する

事年久し。然と雖も連年五穀快熟せず。まいたと成りて不作す故に家貧しく饗應の儲。心に任せずとて麩飯を備へ奉る菅原君宇喜多が志を歎悦したまひ。この嶋は何と申ぞと問せ給ふ。宇喜多畏て申様。舊名は兎鹿野のすへ續きなり。當時鹿飢が嶋と呼いと申す菅原君被聞召。暫少有て宣ふやう地名は好字を用ひて宜によるといへり鹿飢が嶋は地名甚ダよろしからずとて富貴嶋とあらため給ふ。夫より水田種子陸田種子。快熟する事を得たり。

富貴嶋といふを誤て福嶋と呼べりきとくと通音なれば也 案に福嶋は南中嶋の惣名なり後に村々の小號を呼その領を分なるべし

菅原君宇喜多が亭に十餘日御滞留なる照子御傍近くみやつかへ申御勞り奉り申事最念頃なり菅原君月の明かりし夜あたり近き野邊に出させ給ひて野つらの石に御腰をかけさせ給ひ月を見そなはしく御詠歌あり

なきくらす袖には如何やどすべき曇ならはぬ秋夜の月

御寢所にいらせ給ひ庭の松風の音を聞せ給ひて御詠歌有

旅衣木の根のまくら松の風幾夜なれてか夢は見てまし

穂積宇喜多が屋鋪跡梅より東南のかた行程三丁餘有案るに今堀川北東寺町の邊なるへし

御腰をかけさせ給ふ石今に有

案るに此石今の川崎に有しを元録年中に蜜に天満宮へ引取宮殿に納め神體となすよし也 則氏子の者三人して夜中に是を引取その壹人なる者先年直にかたりき可秘々々



庭の松は明曆年中に枯たりしを再そのもとに松を植ふと也案るに寶珠院の松は天神の古跡と云傳ふ是可成ル享保年中大火に焼失たり

時の奉行明且此嶋を御出船有て鹽穴莊八十湊まで御下向なし奉り。御迎の本船に移し奉るべき旨奉祈しかは宇喜多親子新羅氏某御別を歎き御名残を奉惜事最切なり。時に菅原君鏡にむかはせたまひてみづから御像を一時に御彫刻有て御形見に残置せたまふ。新羅氏その御像を床上に居置奉り朝暮如在つかへたてまつりしと云々

鹽穴莊とは堺の津の事也舊名鹽穴莊といひしを攝泉の堺なる故にさかると呼んで舊名を唱へらしなふ  
八十湊とは多びす嶋の事也

北野といふ事は菅原君の御靈を 天満自在天神と贈號し洛西北野に御鎮座なし奉るそれに准して新羅氏かかまへ居る所を  
北野と呼ぶ終に在名となるもの也北野天神と申奉るは菅原君 自一時に御彫刻の像也則爲御形見新羅氏へ賜ふ所の神像なり

……編者曰ク原本ハコノ縁起ヲ書寫シタルモノヲ七丁ニ亘リ貼付アリソノ第一丁ノ表ハ本書第六十九頁ニ凸版トシテ組込

……以下原本空白……

メルモノナリ……

# 鳥上郡

## 〇三 嶋

島上島下豊島以上三郡上古すべて三嶋といふ

### 〇原村天王祭

毎年二月八日原村天王祭あり原五ヶ村の生土神にして牛頭天王を祭る社前に繩を以て大きな蛇形を作り松の木二本を立てこれにウネタラ泛しめ其上に方一間の的を上ケ是を蛇の目に表し神祭頭家の者上下を着し川向ひより箭二手を携へ的をねらひ甲の矢を乙矢を射るを相圖に五ヶ村二ツに別れ彼蛇形の頭を上組四ヶ村 上條村 東條村 中 村 西條村 のもの山上へ引登らんとするを下組一ヶ村下條村のもの蛇形の尾を曳て山下に至らんと川を隔て互に曳合ふ事綱曳のごとく終に蛇形を曳斷て左右へ分る下組は一村なれば加勢の者ありとぞ

傳云 往昔此川の淵に惡蛇住しを退治せし遺風なるよし



## ○景度の淵

天川村に景度の淵といふありいつの頃にか近郷冠村といふに景度某といふもの一人の娘あり容顔美麗にして心ばえやさしく一たび見るもの心を動さずといふ事なし然るにいかなる過去の業因にや三歳の頃より啞瘖と成ければ父母大きに歎きて神佛を祈る事年ありその験にや十五歳の春より言を云ひ出しければ其後諸方より妻に迎んと乞ふ父母も是に同じ彼是と相談に及ぶに彼娘申けるはたとひ何方へ嫁す共一たび天川の蓮池を見ずんば嫁せしといふ父母もいなことをいふと思へども詮方なければ娘を駕籠に乗せ富家の事なれば多くの人を付てかの蓮池に至るに娘は駕籠より出て草履をはきながらする／＼と水の上を十足斗り歩行けるを人々はとあわて騒ぐ隙に皆のものさらはぞといひて水中に入れば忽黒雲池上を覆ひ雨風車軸を流しければ供の男女命から／＼に逃歸り主人に斯と告げるに父母大に歎き悲しみてあわて騒ぐといへ共雨風はけしく闇夜のことくなりければ何と詮方もなく忙然として居たるに其夜父母の夢に我は蓮池に幾千年を経る所の大蛇なるか我大願の事ありて假りに其方夫婦の子と生れひとつの願ひ成就せしかは二たび淵に歸る也かならず我子也と歎き給ふ事なかれといふかと思へは其ま、廿尋斗りの大蛇と成て飛去と見へしが夫婦の夢は覺にけり夫は是にてあきらむるといへ共女房は女の事ゆへたとひ大蛇にもせよ一たび腹を借せしうへは我子に違なければ今一たび見へふるしを見せよとかきくとき歎きければ第三日の夜母の枕上に告てさすが女のやる方なく歎かる、はことほり也今はふるしを參らすれば是を記念と見給ひてあきらめらるへしと上着を脱て置ざと見て夢さめあたりを見るに丸盆のとき大なる鱗三枚有けるに母も

是を見て得心なしけるとなん夫よりこの蓮池を景度の淵と呼ぶ

## ○青梅寺

眞上村安正寺の境内に青梅あり實を結びて夏日に能熟し冬月に至り落す葉の落る時は實もとのごとく青く成り枝に残りて翌年の春に至り花咲あらたに實を結びて古き梅の實落る也四季いつとても梅の實あり故に土俗青梅の寺と呼びて却て安正寺といふ寺號を知る人稀なり梅品數種ありといへ共此一木希代の別種なれば行て見るへし高槻より乾の方にて程遠からす天神馬場芥川光徳寺眞上に至る

## ○氷の化石

伊勢寺に七不思議あり其一に當山鮎川の氷は消すして底に沈みて石と化す色黄白にして厚サ壹分斗り板のごとく氷れる石也拾ひ得て奇とすべし

## ○曼茶羅ノ峰

萱野村にまんだらの峰といふ處あり此山に登り見れば東西の山嶺にかゝる雲に太陽のうつれるか色々怪しく異形に見えて曼茶羅(茶)のごとしまかし風烈しき日または雨を催せる日は見えす至極の晴天に行て見るべし



○小女郎火

芥川の邊に八町繩手とて長き松原ありいにしへより雨の夜にはかならず火出るこれを小女郎火といふむかし小女郎といひし婦女此處にて害にあひて死けるにその妄念なりといひ傳ふ雨のそほふる夜にはかならず出て往來の傘のうへ或は荷物の上にとまる是を恐れて念佛題目などを唱れはいよくふりぞかす是を構はず小唄淨留璃の類ひを高聲に罵れば彼火たちまち外に飛行となん

……以下原本空白……

寫下郡

○紅屋奈良漬

冬夏軍鑑ニ云 神君攝戰の御時敗軍あつて長柄堤を落させ給ふ御供の軍勢身命を捨て支ゆるうち大久保彦左衛門永井左近追付奉りて富田まで落給ひ傍の酒屋へ伴ふ此酒屋は富田の福人紅屋市郎右衛門とて名高き者なるが三人の人々空腹ゆへ御膳を望ム茶漬を出し御菜に奈良漬の香の物を差上る香のもの澤山に有とは吉左右と御悦喜ましまし此後も陣中へ香の物を送るべしと御詔にて御歸陣ありしゆへ御在陣の間御膳の度毎に紅屋方より香の物を指上し處御利運に相成御悦ひの餘り三百石の地面を被下毎年奈良漬江戸表へ献上仰付られ今におゐて紅屋方より奈良漬を仕立京都愛宕山長床坊方にて冷し所司代長床坊紅屋三人立會て江戸表へ獻する事とは成りぬ

○勝尾寺百濟樹

應頂山勝尾寺の山内に白檀木あり世俗百濟樹といふ百濟國より渡りし故也



○桑門火定

一 至心の火定身儀不亂

新著聞集 第七 勇烈篇

池上意三は大儒の譽れ世に聞へ十六歳にて水戸黃門公へ召出され和漢の萬卷に眼を晒しいといみじき人にておはしきさる佛縁のありけるにやある時延命地藏經を拜見して忽ち世の無常を悟り菩提心強くおこりて大守へ御いとまをこひ世をなきものになし曾節と名をあらため形を桑門かへてけり都方に上りて童の風車を弄ふをみて

舞は舞まはねはまはぬ風車これや我身のゆく衛なるらん

と讀てけり風車軒と甲けり其後勝尾山二階堂にこもられしが九日めに及び思ひよりし事有て火定に入へしとて薪あまた積せ我中より香烟を出すを相圖に火をかけよと約束し辭世の詞とて

世のちりをはらひてのほる勝尾山法の爲には又かへりこん

と讀て入りぬ志はしがほと念佛誦經の聲聞えしが人々烟を見て火をかけしに山々谷々に滿々參詣の鞞同音に念佛し漸々事あづまりて各寄て見しに左の手に香爐をさ、け右の手に念珠を持れし行義すこしも亂れずおはせしと也

○登保志の白馬

茨木の邊にとほしといへる墓所あり此邊に雨夜になればかならず白馬出るといふそのかたち小牛のごとく白キ毛

は繪にかける羊のごとく渾身顔に亂れて其顔の象見かたちえずといへり折々には強氣なる者ありて是を捕んとすれ共手に廻らすまた棒などを以て打共まほろしのごとく也然共昔より人を害せしといふ事を聞ず或時は街道に臥居る事あるに往來の人これをまたけ越るに其毛のさはる事なし故に化生のもの也と覺ゆと土俗の茶話也

……以下原本空白……

豊 嶋 郡

○池田ノ市

池田の市は上古尼ヶ崎に在たるを慶長年中 太閤伏見御在城のとき小堀遠江守承はりて池田の里に於て市を建ル又元和亂の時亂募禁制の書物松平武藏守承りてこれをいましむるの御朱印此武品とも池田満願寺屋九郎右衛門預







池田すみは一倉といふ里にて櫛ウヅキを焼て池田の市に出ス也燒炭は諸國より多く出るといへ共池田を最上とす烟草の  
 火に池田炭を用ゆるとき炭を火入へ堅に入小口斗りを灰の並に出し扱其上に梅檀の木の黒燒か犬蓼の黒燒を此炭  
 の小口にをき火を紙燭にて付れば其まゝ下へ火うつりて小口の炭に火つき終日烟草の火消る事なし

池田すみは一倉といふ里にて櫛ウヅキを焼て池田の市に出ス也燒炭は諸國より多く出るといへ共池田を最上とす烟草の  
 火に池田炭を用ゆるとき炭を火入へ堅に入小口斗りを灰の並に出し扱其上に梅檀の木の黒燒か犬蓼の黒燒を此炭  
 の小口にをき火を紙燭にて付れば其まゝ下へ火うつりて小口の炭に火つき終日烟草の火消る事なし

池田すみは一倉といふ里にて櫛ウヅキを焼て池田の市に出ス也燒炭は諸國より多く出るといへ共池田を最上とす烟草の  
 火に池田炭を用ゆるとき炭を火入へ堅に入小口斗りを灰の並に出し扱其上に梅檀の木の黒燒か犬蓼の黒燒を此炭  
 の小口にをき火を紙燭にて付れば其まゝ下へ火うつりて小口の炭に火つき終日烟草の火消る事なし

○池田炭

○杉の苗

土俗云 薩摩杉は攝州池田より杉の苗を取寄て植る也彼地に生ずる杉苗にては空目あしきよしこれも我國の一奇  
 とす

○祈雨鍋いたゞき

宮の前村と長興寺村に住吉神祠兩社あり一祠は井口堂野村東市場中の島石橋玉坂麻田宮の前村都て此八ヶ村の氏  
 神とす又一祠は長興寺村にありて早魃の年は雨を祈るに鍋いたゞきとて其年此所へ嫁せし女の役として鍋を頭上  
 にいたゞき此神を祈る舊例ありしかど姿の醜きを厭ひて近世は此事止みたり

○燈籠大明神

寺内村岸龍山觀音寺は境内十八丁の大伽藍たりしが今燒失して諸堂僧院共に廢せり又山中に燈籠大明神といふあ  
 り元和亂のとき 神君勝利の御祈の爲御鑑の金物を以て燈籠に造らしめ給ひ此寺に寄附遊され元和三年辰三月吉  
 日御諱を彫刻せしめ世に類ひなき御燈籠なれば七寶の宮殿にも納め奉るべきに此寺廢して貧地なれば漸々雨露を  
 防ぐ假屋に納め祭るゆへ土民燈籠大明神と呼べり



○藥師岩

萱野村醫王山大宮寺の山内に十二支の巖石あり自然と藥師如來の尊像に相似たるゆへ世俗藥師岩と號く高サ十二丈餘あり

○奪玉祭

同寺に毎年正月元日より七日の間修正會行はれ八日には奪玉祭といふ大法會あり木の枝もと一ツにして枝十二あるを撰み餅を付て堂上に備へ萱野の庄内十二ヶ村の土民富の札を入れてこれを受ケ其當りし家には必ス幸ひありといひ傳ふ

淺野長矩の家臣萱野三平田生の地にて今に子孫相續せり

○無蚊家

東畑村庄屋太兵衛の居宅を里人蚊なき家といふ往古弘法大師諸國遍參のとき此處に一夜を明し給ふ頃しも六月半にして極暑にあたり亭主蚊の群れるを大ひに厭ふさまを御覽ありて不便と思召れ符じさせ給ひしとて奥の一間にかぎりて蚊の入事あたはず勿論紙帳蚊長を釣るに不及といへ共襖一重を隔て蚊の群れる事往古にかはる事なしわづかの家の内にて奇瑞を分ツこと大師の法力奪ひても猶奪むべし大坂の八軒家または上町金井町 舊名蚊無丁 此

邊も大師の符じさせ給ひしといひ傳ゆれ共土地によりてはたとへ大師の符じさせ給はずとも蚊のなき所も多くあれど實に奇とするは東畑村蚊符じ家なるべし

○池田愛宕火

愛宕山は古歌に所謂五月山ウツキヤマなり山上に愛宕權現の社ありて毎年七月廿三日廿四日兩夜種々の灯笼に火を點すこれを池田の愛宕火といふ大坂北の町はづれより望み見れば星のごとし又愛宕の神社は有馬郡道場河原新町口にあり祭る所火産靈尊カノスビノミコト毎年七月廿四日祭禮あり世俗これもあたご火と稱ス

此兩夜池田樽屋町榊屋某といふ造酒家に秘め置笑ひ猩々といふ古物の木偶を鋸ル神作なりといひ傳ふ

○釣鐘火

池田の山に釣鐘火として七月の火を燈す事京師の大文字火のごとし昔此邊りの富家に老婆一人ありて常にいふやう我過行し跡にて貯置し金銀を以て毎年七月十六夜には北山へ釣鐘の形に火を照し給はれと懇に頼みて過行ければ其詞にたがひ吊ひ(巾)の爲昔は毎年執行ありしが年ふりて今は豊作の年は山へ火を照らせり此夜は三四里も外よりみるにまことに釣鐘のごとし

○蛇形の辨天

池田壽命寺は行基菩薩の開基也當寺に蛇形の辨財天の大像あり頭に觀音の像をいたゞく往古は辨天堂ありしよし



然共いつの頃にか破壊して跡方もなし彼大像は其後客殿に安置せしが星霜累り像も崩れて今は大長持に納ム是を  
作る時は八疊敷に及ふとなん世に蛇形の辨天まゝありといへ共かゝる大像ある事を聞かず又當寺の什寶に楠正成の  
菊水の篋并ニ兜など有之

○箕面福富

箕面山瀧安寺吉祥院は本尊辨財天女役行者の作日本四箇所辨財天の其一なり 江州竹生嶋 相州江之島 夔州嚴島 當山  
役小角 一日葛城より戌亥の方に靈光あるを見て三鉢を投るに遙に雲中に入て當山に止るよつて爰に辨財天の祠を  
建て勸請ス

毎年正月七日福富あり其式元日より七日の間天下安全五穀豐饒の祈禱あり是を修正會と號す滿座に富會あり此夜  
諸國の詣人群をなし各木札に姓名を記し堂前三箇の唐櫃に入置其後此櫃を大ひに轉々して寺僧繆をかけ衣の袖を  
か、け長き柄の錐を以て櫃の小孔より中なる木札を突あぐる第一第二第三と突あぐる也然してあぐる所の札に記  
せし姓名を見て第一の富何國某と讀上る二三も亦是に同じ此當人修正會秘法(秘)の御守を授く此守を得るものは大福  
を得るといふ靈驗世にある所也守を得る者は如何程遠方といへども夜通しに持歸るもし一宿する歎途中にて他の  
家に立寄り事あれば授る所の福其家に止ると云て貳人三人にて是を守護し中食休息するにも互に代りて守を持者は  
必ス外にありて茶店酒戸にも入ることなし又此富に當らざる者は許多の金銀を出し當人より譲り受る者もあり又二

月二日より翌三日迄修二會の法夏あり此時にも富あり其式前に同し是を二の富といふ 官家より内侍宣を賜ふ例  
あり

夫木集

君が代は富突山のさきくゝにさかへそまさる萬代までに

兼隆

此富會いつの頃より始りしにや詳ならず兼隆の歌を以て見れば由來久しく當山を富突山といふにや又八雲御抄に  
富突山近江國とあり

……以下原本空白……

河邊郡

○多田院十景

多田庄神秀山滿願寺は人王(皇)四十五代 聖武天皇神龜元年に勝道上人に詔し堂塔を建立させられ寺を滿願と號ケ給  
へり此時大日本國六十餘州に各一寺の滿願寺を建立させられんと勅願寺に任し給ふ其一寺也

圓融院天祿年中源滿仲公御再建あり美丈丸出家して法名源賢僧都圓覺坊といひてまばらく住居し給へり大凡開基  
より以來一千年に及ふ精舎にして殊に十景の名所あり



華嚴岳 寺の東の高き峯也

鹿野苑 今の寺中のこと也  
四方に散る花をかさりし岳までも法の香とめし道ならぬかは  
とく法にその國の名をうつしてやこゝも佛の跡とこそみれ

涅槃嶺 西の方なへくら山のこと也

西に入月日を見てもおもへ人佛の後もひかり残して

跋提河 瀧の水上のこと也

松風も水の流れも諸ともに法の教にいかてもれなん

等覺峯 奥院觀音堂の上の峯の事

一聲にかれたる木にも花咲し誓ひは盡ぬ峯のまつ風

妙覺峯 あみた堂の峯のこと也

妙なるやさとれはおなし峯の雲はらはてもまた佛とはしれ

孤絶岩 池の南の岩尾のこと也

ふたらくのそのいにしへをうつしをきて佛のみかけ今もたえせず

立旗山 城山の事也

はたをたて國をあらそふ山々もおさまりし世の松風のこゑ

最明寺瀑布 寺の西南にあり

世をすくふ心の瀧のなかれをは汲てたのしむ天の下人

萬年坂 寺の東より池田に下る道にあり

よろつとし坂こえゆけは老の身もまつ春にあふ鶯の來て

○多田庄奈毛天躍

多田院村に毎年八月廿七日奈毛天躍とて鬼の面をかぶり衣服を粧ひ玉だすきを掛て胸に太鼓を付ケ數十人ひやうしおかしく躍れり多田ノ庄七十二村より一人宛出てこれを勤ム

○狸 火

東多田村うなぎ繩手に狸火といふ燐火あり此火人の形をあらはし或ときは牛を牽て火を攜へ行さまをなせり是を實の人間と心得其火を乞ふて烟草をのみ咄などして行に尋常の人に異なる事なし曾て害をなす事なく雨の夜には折々出るとぞ里俗これを狸火といへり其外二階堂村の二眼坊火或は別府村の虎の宮の火など所々に出るといへ共怪しむに足らず

○不 啼 蛙

西多田村の蛙は聲を發する事なし世俗源満仲公符じさせ給ひしといふ



○伊丹大踊

七月廿三日廿四日兩夜伊丹の町の大踊は曠がましきこと也人家委(悉)ク家内を鋸り藏庫を開きて遠近の諸人に残る方なく飽まで見するをならひとす此夜池田の愛宕火これまた壯觀也  
……以下原本空白……

○猪名野篠原

伊丹の邊に猪名野篠原といふ所ありいな寺の北伊丹より 四丁巽にあたる

新後拾遺

假寝とふ月を一よの契にて手枕うとき猪名野篠原

定頼法師

小笹が原共いふにや

正治百首

まなが鳥るなの、海に駒めとして小笹が原に風を待らん

隆房

今はすこし斗り残りて其篠原のめぐり井池のごとく常に水ありもし知らずして往來の人此篠を折取事あらば亂心となれり

○團子茶

鎌倉村に團子茶あり昔より此村に限り茶を蒸しまろく搗かため用ゆ

○小部村の牡丹

小部村藤兵衛といへるものよく牡丹を作り花形紫白を交へ艶色籬園に争へり三春の最中に至りては浪華近郷の輩連誹詩章を賞じて西山の落日を知らずとなん

○大物橋

尼ヶ崎大物の町に橋あり南 北 十三間松平遠江守殿領なれども此橋は 公儀より命ぜらるゝは其橋詰にむかし源義經西國下向の船場にて有し時旅館をせし子孫今に顯然として諸役御免也

○皿屋(鋪)舗

世俗皿屋敷の怪談を播州姫路の事として人口に膾炙ス一説江戸番町に皿屋敷といふ播州番町こゑの相似たるゆへ東都を實説共いふ或書ニ寛永十三年青山大藏大輔殿攝州尼ヶ崎を領せらる其頃藩中にてお菊といへる婦女を殺害せし事ありしよし今に皿屋敷といふ荒地あるよし何れを實とせん

○難波梅

尼ヶ崎の少し南難波村の農家に難波の梅と稱する古木あり其傍に鶯宿水梅の水ともといふ井あり 仁徳帝の御宇落花



水に浮んで薫して味ひかろくふかも濁る事なし落花の頃鶯井邊を去やらず依之鶯宿水の名ありとぞ

……以下原本空白……

○鎌 淵

西多田村に鎌淵といふあり往昔此池に悪魚住て村民の小童日暮て此池邊に遊へば池中より彼巨魚出て水中へ引沈む故に道路の煩ひとなる偶村民の中に勇者ありて鎌を攜へ入て水中へ終に彼魚を探り得て割捨ける本ノマ、をる彼鎌たちまち失ふて有所を知らず夫より彼鎌此池の主となりて鎌淵と號ス彼魚は川鱸といへる大魚也といへり

○投 石

山本村に投石といふあり往昔此石道路に在て往來の旅人の妨となる其のみならず此石にツツキカケ跪倒れたる者は三年の中に死すると俗人いひ傳へたり一時行基菩薩此所を遊歴し給ふて加持力を以て側の田圃へ投捨給ひし故に投石といふといへり

……以下原本空白……

武 庫 郡

○西 宮 居 籠

武庫郡武庫郡西宮祭神 天照太神 素盞鳥尊 蛭子尊 相殿大己貴尊 八十ノ神 傳ニ云 神武天皇長髓彦と戦ふとき天軍矢盡たるに椎根津彦神シノネツヒコ數萬の矢を奉る又食盡たる時は食を奉る天孫天下を治給ふ時問云汝は何なる神ぞ椎根津彦神答云吾は蛭子命也吾世の富事を司るこれ西宮大神也俗に得美栖トビシと稱ス

傳云 正月九日蛭子尊廣田社に臨幸あり容相異成により人の見ん事を忌給ふとて村民門松を倒に立て門戸を堅く閉筵などにて透間をふさぎ内には親しき輩をあつめ酒飯豆腐の串焼等を調へ一夜禁足して物靜に神祭を勤むこれを居籠祭と云 居籠といふは實は齋籠にして神吏に潔齋し籠るはいにしへの名目也 鹿の贄ヒメの事同郡鹿鹽村にあり偕また翌十日鷄鳴の頃より市中門戸を開き社頭に詣ず物賣放下師觀もの芝居等ありて甚賑やか也これを號て十日夷と云

土俗云上古當所のこんがき戸を出て神の過すあらんとする此もの怖れ畜獸の如くして逃去しより今に其家の職を繼ものを畜生紺屋と云傳ふ



○西宮釣鐘

土俗云 西宮社内の釣鐘はもと當所圓滿寺の鐘也昔は戎の社僧持なるゆへその時の鐘にて其後社人斗りと成社僧なし或とき此鐘を撞に鐘の音自然と地賣と鳴たりとて夫より今は社内にあれ共撞ことなし四方を圍て知れがたし圓滿寺といふは戎の社の西にあり

○百太夫祠

西宮の北に小祠あり内におさむる像は三歳ばかりなる小兒の座したる人形也これ神にあらず毎年正月に白粉を以て厚サ三四歩ばかり顔に塗置也此邊に其年生れたる小兒宮参りをなすとき此人形の顔を撫てその白粉を小兒の顔に塗也これ瘡瘡惡病を除くといふ又云これ日本人形の初めにして此人形あるを以て西宮に笠井氏といふ人形芝居の株あり

此人形百太夫と稱する其由縁にて淨留理をかたるもの太夫と呼ひあやつり芝居の株も此所より得たる歟

○山上村

西宮の北に山上村といふあり此處に百太夫の末孫笠井氏なるもの家數六軒にして枝葉數家に分れ共<sup>(株)</sup>棒は六軒の外に増ことなし往古は西宮の民家の婦女此地へ來りて平産をなす所ゆへ産所と唱へしが今は其事も絶て地名も山上

○おかしの宮

と文字を改ム百太夫の宮へ産レ子を參詣させるも産所の忌明のならひ歟平人笠井氏を厭ひて縁組をなさすとぞ  
小松村の南に岡田ノ神社といふあり<sup>式内の神也</sup>俗世おかしの宮と云傳ふ例年の祭禮に社前へ供物を備ふ男舊例を以て其年此村へ嫁たる女の衣服を着して此役を勤ム衆人後口に從ひ手をたゝきて拍子をとる一時女郎ア、おかしといふ夫故おかしの宮といふ

○天皇宿

濱田村に天皇宿といふあり往昔 後醍醐天皇隱岐國へ御下向の時濱田村寺井氏かもとに泊り給ひて御製を残され給ひしか後世焼失したり惜むべし今世天皇宿の古名のみ残れる此所は昔の西國海道にして神崎の宿西の宮の驛といふに同じ今尼ヶ崎へくだる海道を通し書残されし文に津國菜切の里に宿りてとありけるよし聞傳へり菜切の里は濱田村といへる事明らか也

○村雲の燕子花

今北村八左衛門の庭に白紫の絞りに咲る燕子花あり珍花なればとて城主よりこれを賞じて村雲といへる銘を下し給ふ



○種なし蜜柑

守部村藤右衛門の庭に種なし蜜柑の木あり形は他に同しけれ共種なくして味ひ勝れり諸人種なし蜜柑と稱じて賞翫す

○  
正月西宮の民家の門松は家毎に至て見事にして竹を添て立る注連繩は垂れを長くす正月三日過れば竹ばかりを残して門松を内へ取入れ又九日に出す時逆に立ルなり九日齋居延年共よねん講共云此夜家毎に豆腐こんにやくの田樂にて酒えんを催し終夜ばくえきを専らとす

……以下原本空白……

菟原郡

○  
菟原郡住吉村住吉の神前に輓石といふものあり此石の頂キ凹にして水溜めありされ共平日は水なくして天水をも受ず毎年六月土用に入る日に至つて自然と水を湛へり土俗時を知るに奇也とすいかなる旱魃といふ共水に増減なく土用過れば水涸て元のごとし

○  
上野村に兵太夫といふ者あり累年所持する春日の作の翁の面あり例年南都薪の能に此面を以て兵太夫翁を渡す事古例にしてすなはち白銀十枚を給はる

此面を世俗誤つて春日大明神の作也といひ傳ふ佛師春日の作の佛像諸寺ニ多し

○金瓜

田邊村小路村より金瓜出ツその色黄金のごとし三州より銀瓜出ツその色白銀のごとしとぞ

……以下原本空白……



# 矢田邊郡

## ○長田社

矢田邊郡長田社は生田の並也 祭神事代主尊 額ニ曰長田大明神

啓蒙云 皇后伐新羅之明年二月皇后之船廻於海中 以不能進更還務古務古は水門而ト之於是事代主尊誨 之云祠 吾子御心長田國 則以葉山媛弟長媛令祭

當社は諸鳥をきらひ給ひ詣人鳥を食しまたは婦人鐵漿筆にも鳥の羽を不用あやまつてこれを持扱へば忽神の祟りありとて土人大きに怖る也

## ○箬の梅

生田の社邊に梶原が箬の梅鏡の井あり

長門本の平家物語一の谷合戦の段ニ云

源太梅の花のさかりなるを一枝折て箬にさして敵の中へはせ入てた、かふ時も引時も梅は風に吹れてさつと散ければ敵も味方もこれを見て感じける所に城の内より本三位中將殿の御使にてい梅をさ、せ給ひていに申せとい

こちなくもみゆるもの哉さくら狩

と申もはてぬに源太馬より飛おりてあばし御返事申いはんとて

いけとりとらんだめとおもへは

と申されけるとあり

按ずるにこの連哥のこちなくもみゆるもの哉といふ句は無骨にも見ゆるもの哉といふ心成へし骨なくと書て無骨とよむ故也

謡曲のえひらニ云

惣而この生田の森は平家十萬餘騎のおほて成しに梶原平三景時源太景末一(季)の木戸きつて落し分捕高名目を驚かす處に景末何とか思ひけん此梅花の枝を手折て箬にさす此花笠あるしと成て高名いちしるく名をあけたりしによつて景末却て此花を禮し則八幡えるかんの神木と敬せしより名將の古跡の花なればとて箬の梅とは申也

老人雑話ニ云 箬にさす矢の数は多は二十四也此内一ツは矢がらみの結びにて鎧にからみ付る也二十三は射はらひて跡に一ツ残さねば箬くづる、也これゆへに是非一ツは残す也平家物語橋合戦の段に二十四さしたる矢にて敵二人射をとし十一人に手を負せたれば箬に一ツぞ残りたりとあるはこれ也其後箬もとひて捨てけりとぞ残りし矢も射はらひ箬がくづれて働きのさはりに成ゆへに解すてたる也梶原が箬の梅もまたく風流にあらす矢を皆射はらひて梅の枝をさして箬をかためたる成へし



籠の事釋名に矢を盛る器也とあり

秋艸 = 逆頰籠 葛籠 柳籠 蜻蛉えびらなど有てさま／＼の説をあけたり

梶原景時二度の懸といふ所は生田の森より五丁程西に當て城か口村といふ在所也とぞ

### ○生田の幕祭

生田の馬場並木の櫻樹彌生の花満開の頃近郷の男女酒殺を攜てこゝに來り侍女奴僕を連たるは木間に幕を粧ひ下民とてもおのが茅屋を閉て花の下につどひ着物を脱て枝に打掛ケ終日花見の興を催ス是を生田の幕祭りといひ傳ふ花の頃の小袖幕は古きより傳えし風流にして本邦のみにあらず

林日清錄に 中華長安の士女春野に遊んで名花に遇ふときは席を設ケ草を藉き人々の着せる紅裙をとつて遷に相挿み掛て以て酒宴の座幄となすと漢和ともに事々物々變れるさまもあらしと覺ゆ

○

駒ケ林村に毎年歳越の夜雜喉寢堂に籠る事あり往古は此一村にいまだ嫁せざる女娶らざる男年越の夜此堂に籠るこれを雜喉寢といふ其夜契りたるもの夫婦となり結ぶの神のひきあはせ給ふといひ傳へて舊例とせしが年若き男老たるに契り老年の男若きを妻とし大ひに年の不都合なる事多くあるゆへ中古これを止ム然共今も毎年歳越の夜は女ばかり籠る也此堂に籠れる女は難産の愁ひなしとぞ

### ○駒ケ林左義長

駒ケ林村の左義長は西<sub>ニ</sub>所 中<sub>ニ</sub>所 東<sub>ニ</sub>所と三村の土民正月十五日ノ朝世上の左義長とは變風也材木にて篋<sub>ツク</sub>を組その上に大竹を立て種々の鏝ものをなし三村の人数これを荷ひ神輿のごとく持廻りさて眞柱に横にゆひ付し材木ありこれを角といふ數人東西に別れて此角を乗せ合し勝たる方は勇み手を打て悦び踊り負たる方は逃歸るを舊例とし勝たる方は其年の漁場を第一とするゆへ年中の利徳多シ依之甚祝ひ祭れり

### ○和田ケ崎綱引

正月十四日和田ケ崎の綱引といふあり左義長の眞の竹<sub>下三本 中二 本末一本</sub> すらに一番短冊とて色<sub>いろがみ</sub>番の尺ケ五十間程なるを付ケ竹の枝々には一間程ツ、の小短冊を付る數多の短冊風に翻りて見事也右の左義長を牛車に積て兵庫和田ケ崎へ持出年徳神の額に惠方綱といふ綱を付て此方へみなく打懸り年徳竹を必ず其年の惠方の方へ倒す事也夫より六町の人數双方へ別れて綱引をなす

### ○兵庫爆竹

兵庫近郷には正月十五日の前夜土産神の社壇に一村のもの及び往還の旅人を引止メ燈火を消し男女闇中に入亂れて一夜を明す事大原の雜喉寢に等し今朝大きな爆竹<sub>トシド</sub>を建て双方へ引合ひ引勝たる方は獵よしとて大に悦ぶ事綱



引に同じ

○北風酔

兵庫ノ津北風六右衛門に製す千とせ酔は日本第一の佳味にて關東へ獻す平日に商ふとき印紙を別に封じて渡せり



或人云 北風酔は六右衛門に製する斗りをいふにあらず世にぬるきを南風といへば夫に對してきぶきをいはんとて北風酔いひならはせりとぞ (編者曰ク原本コノ所ニコノ商標ヲ貼付ケアリ)

○兵庫津

武庫山といふは往昔神功皇后新羅を征討し給ひ歸陣の後金甲鐵冑弓箭等の武器を埋ませ給ふ故とぞ ……原本コノ所ニコノ

貼紙アリ…

上古は諸國に便宜にたがひ兵器を納めて是を武庫とも兵庫共いふ諸國に同名ある事此由縁也攝津國兵庫津は福原莊海陸都會の地也町數四十四名西海道の驛にして大坂入船の要津也官道に岡方。北濱。南濱。等の名あり一名武

庫の水門武庫の泊あるひは輪田泊ともいふ諸國の商船こゝに泊りて風濤の平難を窺ひ諸品を交易す繁榮大坂に均し此海底に洲あり長きこと菟原郡深江浦に連る毎年三月汐干のときは必ず見ゆるなり天長八年八月大輪田ノ泊を造つて使の遷替を定むとは則こゝ也又承和三年入唐使の船を此澳に泊るなど古書ニ載たり  
平相國此地に嶋を築きて今のごとく水門とはなれり古の兵庫津はこゝより西北の山手にして渾て其地までも海濱なり町小路もなく漁村也諸船入津して交易することは天正以後のことなり  
琉球事畧ニ云 琉球人日本へ往來の始は 後花園院寶徳三年七月琉球人來りて義政將軍に錢千貫と方物を獻す是よりして其國人兵庫の浦に來りて交易すと云々 案るに十五代尙金福といへる國王位に在し時也

○築島

築嶋は則今の兵庫の津也平相國嘗て遷都の志ありて應保元年二月上旬阿波民部重能奉行して畿内の課役五萬人を保し鹽打山を崩して海上三十餘町を埋し事兩回なりしかど築果れば土石を漂流して故のごとし其時陰陽の博士阿陪泰氏に命て考さし給ふ泰氏卜て曰龍神此海底に住で陸地となることを惜むこれを宥んとならば一町一人の宛を以て三十人の人柱を沈めこれに加ふるに大小の石に一切經を書寫し海底に沈めて島を築かば速に成就すべきよしを申にやがて生田ノ森に新關を居へ老若を分たす往還の人を擒さし給ふ近郷の村民これを歎き愁訟絶間なかりしかばさらば兵庫の者をば免すべしとありし程に其難をは免れしとぞ

毎日晝の七ツ時に往來を捕けるゆへ此刻限を誰いふとなく鬼時と名付く然れ共當津の者は擒ざるゆへ此よしを聞知りて心



利たる旅人は兵庫の者也と偽りて關を越て危きを遁る今諺に兵庫の者じや御免あれとは此由縁也とぞ

漸三ヶ月にして三十人を擒得人柱に沈むに極りしかば其親族群來て悲歎の聲喧し平相國もこれを聞給ひさすがに  
(側隱)側陰の心頻りにして兎角するほとに延引すること五ヶ月に逮べりこゝに讚州香川の城主大井民部の嫡子松王小兒  
年十七なるが進み出て云願くは小人一人を沈めて三十人を赦し給は、龍神も某が志氣を感應あらんと再三望みけ  
れば平相國歎賞して其望に任し給ふ遂に應保元年の末に嶋成就し築留に經石を入また石棺に松王を入れて海底に沈  
む龍神も感應ありけるにや築島の功なれり其沈めし所に寺を建られける今の來迎寺これ人柱に松王沈めりとい  
ふこと平家物語鎌倉實記等に見えず然れども松王小兒が墓來迎寺にあれば敢て妄ならず諸史に載ざるは故あるこ  
と、おほゆ

### ○清盛石塔

兵庫の南眞光寺の傍に十三重の塔あり大政入道平清盛の石塔也高サ貳丈六尺あり瘡を病むもの此石塔へ詣て、祈  
願すれば忽治スといふ近年神祭を始て靈を尊み清盛まつりといふ

### ○一の谷逆落

源平の合戦に一の谷の逆落しとて源義經難所を攻寄せし事世人よく知れり畫馬屏風などの畫に嶮岨の絶頂より逆  
落しの圖あり大ひに非也逆落しにあらず坂落し也平家物語卷之九坂落と書りこれを證とす平家物語は古き詞の多

くありて耳遠きやうなれ共事を探るには便利ある面白きもの也

因ニ云 武藏坊辨慶の七ツ道具義經記其外古き物語にも見えず諸事當用集 北畠家記 古書ナリ ニ云 七ツ道具といふ事は具

足 太刀 刀 矢負 弓持 母衣 かへる冑 着類也 これを七道具といふ又七物共いふ他流には太刀二振長刀  
などをあまた持事といふおかしき事也と見えたり

義經記 住よし大物ニヶ所かつせんの條に武藏坊は弓矢をも持さりけり四尺二寸ありける柄しやくそくの太刀帶  
て岩通しといふ刀をさしいのめほりたるまさかり鎌熊手を船のかゝりにひしと取入身を放さず持けるものはいち  
るの木の棒の一丈貳尺ありける鐵ふせて上に引上したるに石突したるを脇にはさみて小舟の先に飛のる云々  
此物語によりて色々の物を負ひたる圖を畫成へし義經記には脊負しとはあらず船に取入れしとあり

### ○須磨寺の鐘

須磨寺の釣鐘は形チ至て小し原はこれより三里斗り山奥安養寺の鐘也壽永の亂に武藏坊辨慶當寺へ持來りて陣鐘  
とせしといひ傳ふ銘に安養寺とあり

### ○須磨寺の額

須磨寺の額は源義經公一の谷合戦のときの馬盃なり今は額となりて中に上野山と書り



○須磨簾

平家一谷の城郭いまだならざるほど 安徳天皇二位の尼公を初め大宮人この須磨の海士の筈屋に入らせ給ひ珠簾をかけ給ひし古例として今も家毎にすだれをかくる也

……以下原本空白……

相州藤澤藤澤山無量光院清淨光寺時宗の開祖一遍上人は原俗姓伊豫國領主河野七郎道廣の二男也童名を松壽丸といふ幼より聰明叡悟にして菩提を尊信あり 後深艸院御宇建長五年同國天台宗繼宗寺縁教律師を師として出家受

戒し隨緣坊と號す十五 厥后 龜山院文永元年の時十六 淨土宗聖達上人に隨ひ名を智真と改て易行念佛門に入聖達は法

然上人の徒弟西山證空に隨ひ筑紫太宰府弘西寺の住職となる 九十年代 後宇多院建治元年の冬十二月下旬より紀の熊野山本宮證誠殿に一百日參籠念佛安心の正路を祈願し給ふに翌る建治二年三月廿五日大權現示現の頌ニ曰

六字名號一遍法 十界依正一遍躰  
萬行離念一遍證 人中上々妙好華

此文を得悟の時より名を一遍上人と改給ひ神勅に任て南無阿彌陀佛六十萬人決定往生 札を國中の庶民に賦算す十八ヶ年の間回國修行し給ひ九十二代 後伏見院御宇正應二年八月廿三日攝州兵庫津に於て遷化し給ふ 年五十歳 今眞光寺

に墓あり

……以下原本空白……

に墓あり

……以下原本空白……

○敦盛塔

矢田郡西須磨村にある敦盛の塚は往昔彼大夫敦盛の靈魂再び現れ出て此石塔を建といへり高サ一丈壹尺臺石方四尺あり

大夫敦盛空顔璘莊大居士

と銘ス

東行筆記云 敦盛の石塔とてあり平家物語に修理太夫(經)常盛のおとこ大夫敦盛とて十七歳になりしか沖なる船に目をかけ馬を海へ打入五六たんおよかせられしに熊谷次郎直實追かけ扇をあけて招ければ取てかへし波打際にて組んで討れ玉ひぬ首を包んとて鎧ひた、れを解てみれば錦のふくろに入られたる笛をそ腰に指れたるあないとおし此曉城の内にて管絃したまひつるは此人々にておはしけるやさしかりける物をとて大將軍の見參に入たりけるよし詳に見ゆ但盛衰記には敦盛の尸骸を父のもとに直實送り遣しける事見へたればこゝに埋るに非るへし今須磨寺に敦盛の笛とて傳へたれとも笛も送り返せし事見へたればあらぬ贋物にそ有へき



○關吹こゆる須磨の浦風の歌

旅人は袂涼しく成にけり

關吹こゆる須磨の浦かせ

花鳥餘情に 關吹越る須磨の浦風の歌は壬生忠見か集に侍る也行平中納言の歌のよし此物語にのせたりそれを續古今に源氏にもとつきて則行平の歌と入たるたしか成忠見の歌にて侍るかやうの事いかなるかしこき人の上にも漢家本朝ためしある事なりと見へたり源氏物語にまゐりし又勅撰に行平とのせられたればそれより後の世行平と定たるにこそ

✓○松風村雨の説

須磨村に松風村雨の舊跡とて村雨堂といふありこの事蹟は謡曲または戲場に伎藝して世人よく知れる所なれ共あとかたもなき妄説也行平中納言須磨へ流され給ひしは七十一歳のとき(法)鳳皇北山御狩の御時御供に召れけるに若々しき狩装束にて出られ人や笑はん事もやとて

翁さひ人なとかめそ狩ころも

けふはかりとや田鶴は鳴らん

かく詠し給ひしを不吉なりとて此科に寄りて須磨へ流され給ひしと也其後三とせを経て七十三歳の時歸洛し給ふ

配處のつれづれに鹽くむ蟹と契り都へ歸り給ふ時えほし狩衣を筐に残し給ふとは謡曲の趣向に立しものとぞ或説に行平二女を愛し給ふ事若かりしとき因幡へ任國に下り給ふ折から一谷の北なる多井畑村の長が女二人ありしを召連れ松風村雨と名付て召れしは因幡國にての事なるべし任終つて歸路のとき立別れいなほの山の詠哥はすなはち二女に給はりし也とぞ 案るに須磨の驛の北なる村雨堂といふはたゞ旅人の時雨村雨を志のがん爲の辻堂なるべし

土俗云 村雨堂はむかし小ふじもしほといへる二人の女此須磨の浦へ潮を波に通ひしか行平卿に召れし折しも村雨のふり來て松の風吹き渡りければ折にふれたる名なれやとてまつ風村雨と召れし所とて形はかりの堂あり又行平松東須磨の濱邊にあり松かせ村雨の舊跡一木の松ともいへり稻葉山月見の松は西代村より十町程西にて東須磨の西はづれ山の中壇に松ありこの松の邊に月見の御所といふ古跡あり

或書ニ云 松風村雨は北朝廢帝のとき行衡といふもの主上の御怒を得て海邊へ流され四年配所に住居せしが古郷の便りも間遠く諸ものうかりければ配所の庵の傍に松樹を植て朝夕にこれを見て慰みけるが磯山あらし烈しく吹て折ふしは嵐の面白き聲を聞入懶き便りの友となしまた秋の夕は一村雨の折々音信て淋しき心をとふらひしによつてあるとき朝の松風夕の村雨を文會に書

松風蒼々破謫居夢

村雨蕭々伴羈官窓

其外松風村雨を愛して書し筆跡行衡が見へたり此行衡が事跡を載たりし書は萬川通略十一にありさて本邦に



此事を在原の行平か須磨の浦にての事と思へるは行衡の字日本にて名乗字に行ひらと讀ゆへ取違しものならんか  
非情のものを二女が身の上にとりなせしは作者の發明せし也

五〇

○白川白楊梅

白川村の白楊梅は例年禁庭<sup>(延)</sup>へ獻すその色白く味ひ甘しこれを白川の白も、といへりまた薄紅梅いろもありいづれ  
も味ひ他に勝れて此地の名産とす

……以下原本空白……

白川村後田氏持山  
高御座山岩之圖

か乃<sup>は</sup>乃<sup>は</sup>乃<sup>は</sup>  
法<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>招<sup>も</sup>  
名<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>人<sup>人</sup>  
名<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>山<sup>山</sup>



五一



○木葉石

丹生の山田の西播州の境岩谷に木ノ葉石とて小きさゞれ石ありこれを打かきみれば石中に木ノ葉の模様ありて至極の風流也或は柏の葉松風の類畫るごとく希代の珍物也

……以下原本空白……

有馬郡

○

津國風土記ニ云 有馬郡に有鹽原山エシヤマ山の間ニ有鹽湯 因以爲名と見えたり釋行基毘陽寺より爰に徘徊せしとき藥師如來病人と現し奇特を告給ふニよて湯槽ユフネをかまへたりとなん其後承徳元年に淫雨甚しく洪水山を崩し家を溺らせるまゝに温湯の所もわかず成しを 後鳥羽院の御宇建久二年二月半に和州芳野山の僧仁西熊野權現の御告により彼所を尋ねて十二坊舎をたつ湯槽は村の中期に有廣さ方丈はかり中を板にてさへきり南を一の湯といひ北を二の湯といふ仁西上人温湯再興のとき諸國より集る湯入の次第を彼十二坊に奉行させられしと也湯入の人々跡先を争ひ或は湯壺より久しく出やらぬ者ありてとく出よなといひあがりて鬭諍度々に及ぶゆへ何れの時よりか婢女を拵へ湯入の支配させつ、今に其わざ替る事なしされは湯壺より遅くあがる者ありて縦あけなく怒りわる口いふにも原來優しきかたある女の事なれば厭ふ人なし温湯もいよゝさか行まゝに婢女を抱る坊一の湯二の湯に十坊つ、婢女も一坊に二人つ、都て四十人其内に大湯女といふは或は何坊のか、と呼び小湯女を何坊のまつ たけつるなどいへり扱二十坊といふは一の湯に



御所坊 小湯女 まき

御所坊に絲よりほそき聲や酔つ、くたをまきか挨拶

奥坊 小湯女 なつ 付坂口

谷越て奥の坊へと来る客の日暮てうてる火はこちりこち

伊勢屋 小湯女 たけ 付京屋 鑰屋 播磨屋

哥のそめ阿漕といふと伊勢屋なる鶯聲の竹か一ふし

中坊 小湯女 つな 付鹽屋 籠屋 松屋 竹屋

きかまほし舞つうたへる湯女衆の中の坊なるつるの一聲

尼崎坊 小湯女 ゆり 付網干屋 鏡屋

花の貌にへにさす尼が崎坊のゆりの口ひる人もこそみれ

禰宜屋 小湯女 すき 付赤穂屋

神木のそれにはあらず戀しくは禰宜やにきませ杉と尋て

大門 小湯女 たつ 付池田屋 足駄屋 平野屋

思ひきやかほとよき湯女有馬にて大門前に市のたつとは

角坊 小湯女 つた 付泉屋 朔日屋 有野屋

角の坊に葛とはむへも名付たり客たに來ればはひまとはる、

二之湯

上大坊 小湯女 くり 付二階坊 番匠屋

かね付てえみぬる栗が貌はせの上大坊をこす湯女もなし

若狭屋 小湯女 いち 付二見屋

有馬山私雨のぬれものは是弟いちそ若さやの湯女 太女

池坊 小湯女 まつ 付明石屋 左奈木

立別れ池の坊をは出たれとまつか呼ふなら今かへりこん 吉次

休所 小湯女 たけ 付岸下 多田屋 杓子屋

さ、まいれ我一ふしをつたはんは何よりもいとやすみ所のたけ 同

川崎屋 小湯女 や、付井筒屋 絹屋 筆屋

養生にくる病人も湯女の名のや、ともすれば千話をしぬめり 伯水

下大坊<sup>シシラ</sup> 小湯女 なへ 付富士屋 檜物屋 升屋

咲花の下大坊で酌酒にうたふ調子もよさなへかこゑ 重香

川野屋 小湯女 みつ 付裏筆屋

湯名のなのみつ拍子にてさくりたか川のやつさとうたふ一ふし 行風

萱坊 小湯女 きい 付河内屋 菊屋 御影屋

攝陽奇觀 卷之二



うた、ねの枕につれるかやの坊のきいか小うたに夢はさめけり

正房

水船西坊共 小湯女 付 橋屋 横坊

暑き日も波につきせぬ水船を酒になれよと思ひつるかな

重治

大黒屋 小湯女 たけ

竹の子も祝へふたまた大黒や

酒拍

兵衛北坊共 小湯女 みや 付 塗屋 新屋

有馬山遠近人の宿かりを兵衛のかとも見やはとかめむ

宗賢

素麴屋 小湯女 ふち 付 角屋 爪屋

素麴や藤咲門に立ならひあふて語るや有馬山ほと

道人

○ 一の湯の湯女十人をよめる

夏くれはゆり栗竹に蔦まきて鶴たつときは杉はいちなり

藤原光廣卿

二の湯の湯女をよめる

○ 松に竹かさりたちツ、有馬なる二の湯の口やいつも正月

行風

入湯の内によめる

○ 此たびはまやくも取あへす有馬山留湯の数はゆなのまに〜

遠江守一政

○ 正月に延年とて大湯女小湯女のこらす集りて終日酒盛しつゝ祝ふ事あるを

○ おこなへる大會の場の夫ならて爰に有馬のゆなの延年

行風

○ 報恩寺より湯のうちに灯をあくる油つき如何なる故にか蝶の貝なるを見て

湯の口の闇を照せるともし火は月の行衛のにしからにこそ

伯水

○ 闇き夜もくらき湯壺に入ぬめりかきたてともせにしからの火を

太女

### ○ 間の 錢

非人やうの者舎りの門に立居ツ、何のあやめも知れずこは高に物いへるは仁西上人のいにしへよりかれ入湯の人々に録をうる事はを間の錢といへり其人々の在ス門の前より大路までの掃除を朝夕につとむる也都におかしく興あるわざなりけらし

物まうか何そと、へはいやこれは湯入の客の御坐の間の錢  
行風  
わらさしのみしかきふしの間の錢をとりて命をつなく也けり  
方碩



○湯本町名

谷町 北町 菩提町 瓢箪町 寺田 鍛冶町 藪内 馬場先 京口 魚店 門外

○人形筆

名物人形筆といへるは五色の絲を以て其軸をまく管頭に小木偶人あり筆を手にとれば出納れば軸の内にいる抑筆はもろこしに江淹コウマンといひし人五色の筆を得ると夢見しより文章日々にまさりぬ其後又かの筆をとりかへさると見て文章をとろへしとなれば生さきを待らん人の子の爲高き賤しきをわかすかならず此筆を求めて國のみやけとすへき事か

軸にきる竹とりわきてうつくしき人形筆はかくや姫かも

愛好

有馬山に魚うるもの簀イシガに入提來るは行基長洲の濱よりもて來り給ふ遺風也とぞ

染揚枝はくろもしといふ木をいとあらゝかに削りなし十あまりをわらにて編つらねまばらく出湯ヒタに浸せは其色うす墨に染しやうになれり老若をわかつ歯うきうごくにつかへば忽治する徳あればとて入湯の高きいやしきみやけ物に第一是を求む

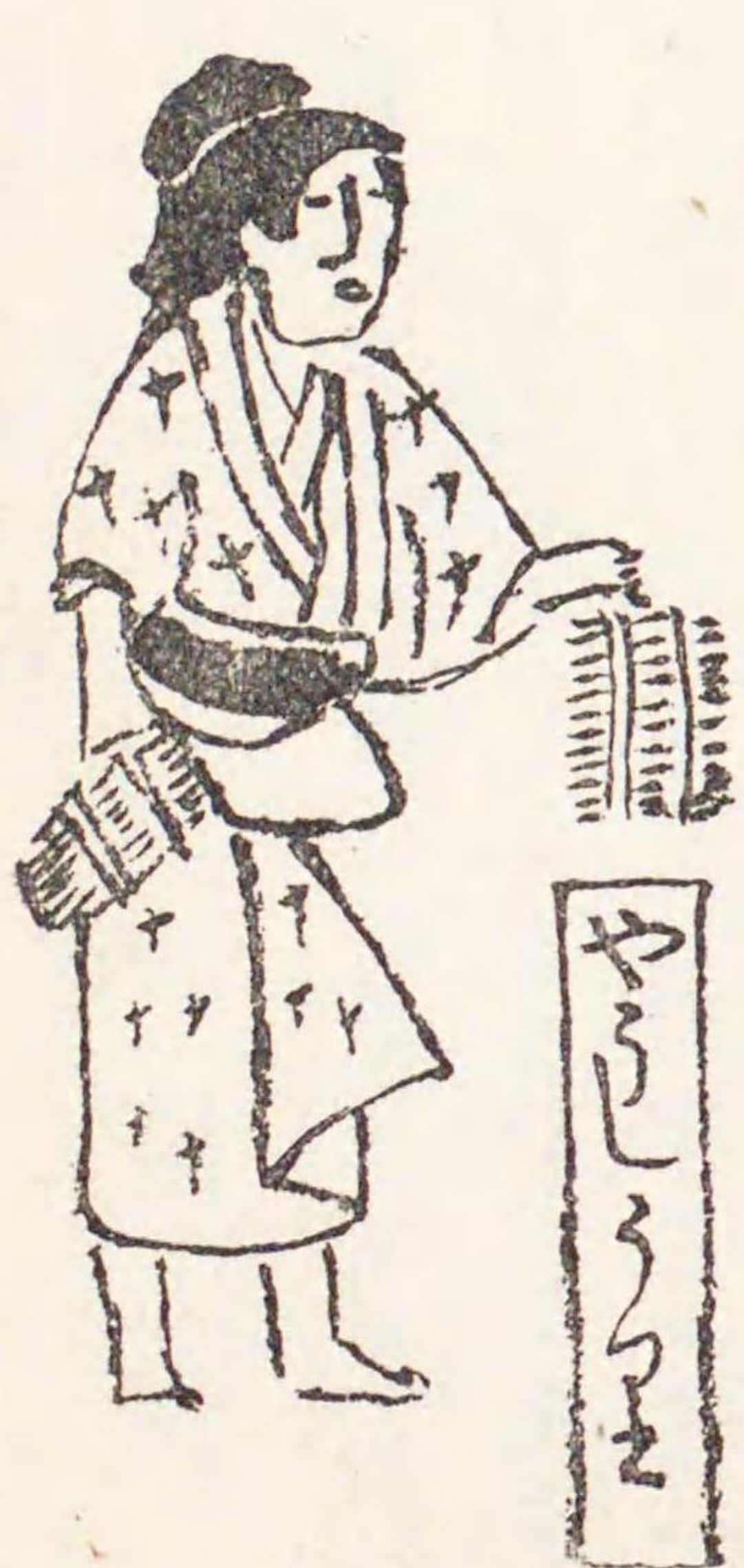


此里の挽物師六十餘國の冠なるべしうつは物のかたちまゝをき外のたくみの及ぶ所にあらず物數奇好む人はかみなか下ともに誂求めざるはなし

此地はわきてふとくすくなる竹多し其竹の内ソクイのうす皮をさき續飯を以て箱の外につけ色々のかたちに作りなすものあまた也其外銚子ひさく様々の器物あり

……以下原本空白……

〔編者曰クコノ頁ノ插图ハ原本ノ著者歌國ノ自筆ヲ凸版ニセルモノナリ〕





○上湯

上湯といへるは天正十七年卯月始つた關白秀吉公御入湯の爲有馬山に趣(赴)かせ給ひ青銅二萬疋を村中へ下し給ひ御坐をまめさせ給ふ事十餘日其内色々の御遊覽は申もさら也或日此地にわたらせ給ひおほん杖を以て爰の程にも温湯あらましかはとのたまふおほんこと葉の下よりわき出ければ御感斜ならずなはち上湯と名付給ひぬいと妙にめつらかなる事ながら此殿の御事吾日本はいふに及はず高麗琉球あらぬ嶋國まで掌の内におさめとり給ふほどの御徳あれは成へし去とて百とせをふへき人の命ならねは慶長三年八月十八日黄なる泉に趣(赴)かせ給ふにひとしく此湯もかはきて出すなりにけるとかやあはれ希代の事に侍らずや

日本の手にいる君の威光には杖の先てもわき湯也けり 貞因

○

有馬の温湯は一たび絶にしを熊野權現の御教を蒙り仁西上人再興に及ぶ熊野湯乃野米音同じ水と鹽のかはりこそ侍れ熊野に本宮の湯あり有馬に鹽湯あり尊號も共に權現と申奉れは一躰分身の御神なる事明らけし

三熊野の牛王を轉しかへけりな湯文有馬の山の權現 行重

○

温泉の留湯は夫々の幕を引せこと人を不入次なるはせばからぬ程に入夫より下つたなるは入込と名付く五畿七道の老若を分たず疾病苦惱或はことやうの片輪のまで蟻のことくにあつまり入ぬ扱かの地に行つき初めて湯に

入を足洗ひと云又一まはり湯に入みて重て來り入を向ひ湯といひならはせり入湯に湯より遅くあがる者あれば大湯女小湯女手々に棒を以て湯口の戸をたきあがれとのしれはみなく足を空にして湯つほより逃出るもいと興あること也湯口非番の日は京田舎人のやとりの方に間寄り御つれいかにと愛敬らしく打笑みツかはらけ取かはし今様うたひなとするけはひ有しやうにもあらず棒もて怒れる人とはおもひたらすめて愛しうち物かたらふ方も有けり

○有馬の藤

いつの頃にか有馬二の湯素麴屋の藤といへる湯女京都の商人松屋某と契りしこめたりしが彼男心かはりせしよし聞て牛瀬川に身を沈め死靈京都へ至りて松屋某を惱せしよし時に藤は十八歳也よし藤は素麴屋の小湯女の通稱也

素麴屋藤咲門に立ならひあふて語るや有馬山ほと 道 入

素麴屋ほそくくり出すくたの絲の亂れてなひく門口の藤 秀 之

松の落葉 京鹿子踊の中に

松に成たや有馬の松に藤にまかれて寐とござるくいよ寝とござる藤にまかれて寐とござる

同書 三ツの車女踊に

松になれく時雨の松に藤にまかれて寐とくござる



○有馬名所歌并一二湯女名寄

二上リ

有馬名所は、薬師に愛宕、富士の朝霧龜の尾の、つゞみが瀧や落葉山、清水いなり鳥ぢごく、絲細工竹細工、

一の湯と 二の湯との、湯つほに入たいな

御所は大もん、すをうにえほし、それは上大坊名は若狭、戀をあらねば尼か崎、まきしにすみて奥の坊と、中の坊と知らしやんせ、禰宜屋のな、みなかみは、いせ屋じやないかいな

一ちに大黒、たわらをふまへ、休所かかるかやの、戀にこがる、水船の、行衛は池か川崎か、つるなれしそうめんや、川のやと、兵衛はな、湯口の下大坊

一の湯口に、名よせといはど、ゆりの花とや葛錦、常に思ひは夏かしや、いちこの契り神かけて、むすびしゑんじやいなア、大まんか、久ほくか、せいちにあげまきか

二の湯口に、松竹つ、じ、竹き心はみつみやの、まけき思ひはや、まばし、咲亂れたる藤の色、そんなアではないわいな、池の坊の、花ちよぶ、見事なことじやいな

あみだ茶釜に、利休の庭よ、爰に秀吉願ひの湯、高つこ清水や袂石、清盛公の御塚や、うはなりゆ目洗ひゆ、池の坊の、たから物、拜見なされたか

有馬ぎしきは、二尊のみこし、いで湯入ぞめうたひぞめ、湯女よびぞめ島田髷、にこくくのおこないや

十一日のくじ取に五番もなア、十番も、……以下七字抹消……

初音さゆれば、谷の戸も明き、瀧の櫻や郭公、夜半の枕にかじか啼、紅葉が谷の鹿の聲、茸狩や瀧巡り御風雅は、ちとおいで、てい主もいたします

花は有馬に、愛宕の小藤、東御堂の未開紅、はいがた山の岩つ、じ、清涼院の京ざくら、清水の谷楓、有馬の櫻花、見事なことじやいな

三下リ

有馬みやけは肴籠、いかきみそこし、ふせごみ、かき、枕のあんど、(合)茶こし針さし有なしのそき、孫の手ふり出シ塵取花生、はぐろ筆手拭かけ人形筆ぢんこ、染やうじ、湯の花、いな竹めしかご、ひけこ竹のくし、ごんぶりちやくよ、はちきすみとり、ふじのどうらん染ばちさじ、けさんかごみ立、ほつす、うすば、小がたな花切かまよ、はさみ毛ぬきの名やた、ん

染ゆかた

浪花 茂作調

有馬山、めぐる名所の数々は、つゞみが瀧のこたまして、落葉の山やつぶて石、有馬さくら薬師堂、一の湯二の湯さしのぞそ、月のいなかのはつか山、霧立のほる富士よりも、お藤に思ひそめゆかた、染る紅葉の谷がけに、あはれつまかふ、鹿のみのほては、戀の文かく筆となる

おんど

爰に有馬の二柱、二の湯にうつる花の顔、其名すどしき水ふねの、辻にまどけきおどりぶり、其名はまつむ池の坊、松はときはの色をへて、まけくかよふ下大坊に、ふかき思ひのさうめんや、ふじの高根にけふり立、白



きをみれば大黒屋、竹き心は川のやの、みつゝかわすむつことに、深き戀路を川崎の、や、ともすればかほふりて、人目を志のぶかやの坊に、きいてほんほに休所の、竹きもの、ふやわらぐる、兵衛のみやとかこちがほ、これをきてみよかわせのへ

有馬ぶし

上ハル

瀧のちら絲、いとうてならぬ、ゆるせぬしある、我かたたもと、おちば山こそ名所なれ、よさまやうゆた、おろかのさたよ、落葉山こそ名所なれまやうがへ

上

鳥丸光廣卿御作

枝もさかゆる若みどり、あをぐにあかぬ御代ぞ久しき

今朝の初音に水と氷の中なをり驚ときをわすれぬ

床しゝが、みゆかしござる、みすの内よりかほるがゆかし、山路々々に一こゑゆかし、あはでこがる、身ぞゆかし

あだに見なそか、あのちら鷺を、雲路にかよふゆきつもて、つもる恨みのけふりとなさば、とめてゆるさぬ床の山、あへばうれしき心にまよふて、いわぬおもひをみにのこす

こよひまつとは、契りの外よ、ちらせましたい空中に、月もひとりさはさへぬもの、ちらせましたい秋のよやそもえびと申るは、幼少よりも髭長く腰に梓の弓をはり、目さへめでたきものなれば、いは、ぬ人こそなかり

けり

戀しゝと啼蟬よりも鳴ぬ螢が身をこがすエ、きのわるひきりゝすきつとそれではすまぬぞへ

高砂の松のちとせのよはひをば君にゆづりていつまでも長き命をあをぐなり

二上リ

有馬二階を、下からみれば、わかい女中やとのたちが、……〔十字抹消〕……、竿竹ふいてむすびさけ、風ふきに

さまさんせ、一以下十九字抹消

寛政七乙卯年正月 發行

文化六己巳年六月 再板

有馬横坊

田中久右衛門

○  
古老云攝州有馬の地はあく深き所ゆへ温泉におのづからかなけありて味ひまばはゆく湯力烈し血虚より發る病性は此湯に浴して可也又加賀但馬龍神等の湯は其土地あくなき所ゆへ湯の力和らか也内に猛しき病ひある人は和なる湯よろし其病性にて湯治可否を考ふへし

有馬の温泉四時の中に土用同じき前後寒の湯殊更よしといへり



○有馬の私雨

有馬の山中にわたくし雨といへる事あり

から笠もえもたてているか湯の山の私雨にみのかつきかも

重友

湯の山のわたくし雨に町なみのたくり木履をはける諸人

重香

○あみた堂の名器

有馬の湯本より一町斗り北なる蘭若院は曹洞宗にして本尊あみた如來也故に土俗あみだ堂といへり此寺中頃大ひに荒果て人も住ざりければ狐鼻など猥に入て所得かほなる折節正覺國師入湯の時こは淺猿とて在しごとくに修理させ給ひしと也其後豊太閤より黄金を給はりて寺門猶輝きけり此時の住職澄西大徳は骨柄きはめてふとくたくましき法師にて殊に頭頂大きに勝れて異様なりつるを殿下興に思召れ千の宗易を召て此法師が頭の形りを釜にうつ



させよと仰事ありしかは頓てさるごとくに釜に鑄うつして奉りけるを大ひに興し悦はせ給ひしと也  
環付海尾あり今に此釜のうつしとて當寺にあり今の名物にあみた堂といへるは是より起りたること也

○百丈石

有馬郡生野村鎌倉谷にあり其高サ數十尺廻り數十歩ありて古今無雙の大石也昔最明寺時頼公遊行の砌り此石上に登りて暫らく美景を愛し給ふ故に世俗最明寺石ともいへり石の臺廣くして百疊を敷ゆへに百疊岩と號といへり今百丈と作るも其高大なるをいふにやといふ人あり極て怪しき大石也

○氷柱石

同郡小柿村にあり石の形チ氷柱に似たり故に名つくといへり

○夫婦岩

同郡本莊町の辻れ田圃の中にあり昔此所に夫婦睦まじき者あり互に死するも一所に居らんと兼て約束せり死して石と化す互に其間十歩程を隔て、向ふこと相並がごとし石の形も亦相似たり號して夫婦岩といふ婦人縁をむすぶの神石也とて來て此石に祈るに果して驗ありといふ

○猿首岩

同郡生瀬村にあり其形チ猿に似てまかも猿の首のごとく自然と眼耳鼻舌を具ふ奇怪なる岩也



○屏風岩

同所にあり高サ五丈ばかりの大岩也形屏風を立たるがごとし故に屏風岩といふ空海大師此岩に六字の名號を書す  
今も雨降てこれを濕せば文字見ゆるといへり

○ひやうたん岩

生野村の谷間にひやうたん石といへるものあり至て大岩にして色黒く石のはだこまやか也人みなこれを望みて硯  
石とす此石を打搔みれば石中にひやうたんの模様あり故にひやうたん石と號く

○吉凶池

三輪村に吉凶の池といへるあり此所の氏神三輪太神宮村民の吉事災難の神託ある時は池の水おのづから廻り動く  
事車輪のごとし右に巡れば吉事あり左に巡れば凶事の知らせ也とぞ

○

三田の町鍵屋某といふ酒造家の庭に白藤あり花の長サ凡五尺餘にして國中藤花の冠とす

毎年寒中に酒の粕を多く藤の邊りに埋むゆへ花房長しとそ藤の根の酒を好む事を知るべし

○最明寺櫻

三田より東桑原村欣勝寺藥師堂の庭に最明寺櫻とて名木の櫻あり時頼入道諸國修行の時馬鎌倉谷にまはらく燕  
居し給ひける時手づから植給ひし櫻也時頼入道閑居の地なるゆへ鎌倉谷といふ今に庵室の跡あり

○

三田より三里半餘り異の方に酒滴大明神といふ社あり社前の盆池に酒の香平日にありて酒瓶に臨めるがごとし

○

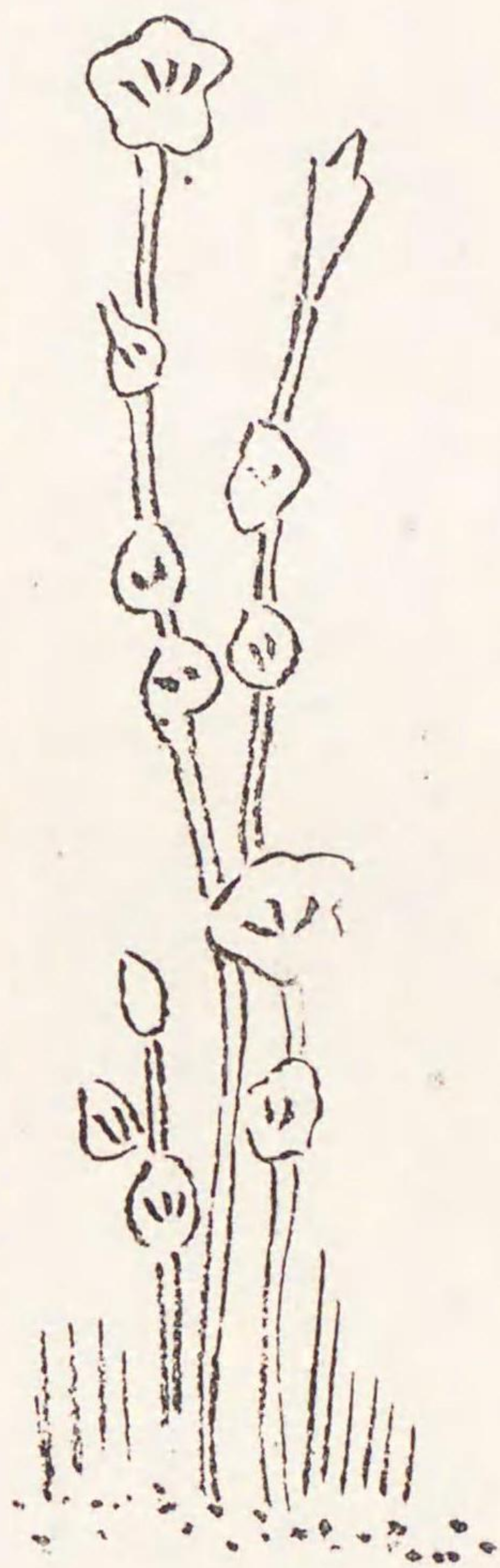
深田村の道の傍に道粗神(祖)あり祭る所五大尊の畫像也厚サ貳寸高さ四尺巾壹尺餘りの板五枚に五大尊を畫き石を疊  
み土手を作りてこれを祭り雨露などの覆ひもなけねは畫像損するゆへ又あらたに造りこれを祭る其故を問ふに土  
俗道粗神(祖)と答ふ按るにこれはなほだ舊き例にして道粗神(祖)は幸の神といひ則神書には庚申にして神體猿田彦命を祭  
るの地なり旅行の人此幸の神を拜し主親妻子までも此石のことく堅かれとて石を積みて立願をなし行也かくの通  
り幸の神所とす其數少からずこれみな猿田彦道分の御神也されは佛法昌んに成てよりいつとなく神佛混雜して小  
石を積たる所を見ては地藏尊を祭りて(賽)蹇の河原と心得幸申は庚申と思ふ愚俗多し此地も又これに類して五大尊の  
畫像を書りこれみな坊主の辨にまかせて愚俗を惑はせる故也我國に生れて神道を知らざるは愚にも又淺猿し幸神  
は伊勢磯邊に祭奉る猿田彦命と覺えて道分神なる事を知るへし



○梅ばち艸

七〇

武庫山の谷間より梅はち艸といへるもの出る有馬の名産にして櫻艸のことし花白く梅ばちの紋に似たり



○唐櫃村には出生の小兒額より耳の前に

髪を置いて後へは髪を剃(剃)て舊例とすこれを唐櫃の後半甲と呼ぶ近頃かたち醜きを厭ひて剃(剃)ざる小兒ありしが危難にあふて落命す其後おそれて舊例にまたがふ

130

○母子村の永澤寺は開祖通(姓)幻俗性は永澤家光として因州磯崎の人も母懐胎のまゝ死して土中にて出生の男子成長の後もつはら佛道に志深くつるに薙髪して母の菩提を(申)吊ふて諸國の靈佛を順拜し此地に寺院を建て氏を以て寺號とし永澤寺と稱し村里の名も母子村と呼へり三月三日蓬糕をなす事こゝに初るといひ傳ふ

○船坂村の茄子は形チ淺瓜のこことく長サ七八寸もありて色はなはだ麗しく其味ひ佳なる事市岡小松にも勝りたり

○湯山より二里西平田村の西に菅か岡といふ所あり和歌に多く詠し有馬菅は此邊に作れる也

拾遺 みな人の笠にぬふてふ有馬菅有ての後も逢んとそ思ふ

人丸

○有馬の富士は大坂嶋野橋を渡り左專堂へゆく堤より乾の間に高根見ゆるを浪華の一奇とす

……以下原本空白……

131

七一



# 能勢郡

## ○ 立 猪 餅

能勢郡木代村の庄屋門太夫といふ者あり屋敷は三町四方にして四面竹林を以て圍む毎年三ツの亥ノ日に  
 朝廷<sup>(延)</sup>え餅を獻す其來歴神功皇后三韓歸朝の御時より初り今に舊例を闕せず代々の 帝に奉りて子孫も今に血肉を  
 絶さず相續せり寔に目出度家系也偕又立猪餅といへるは餅米に小豆を合てこれを蒸し半搗て其色薄紅也長サ六寸  
 五分亘り四寸深サ二寸の箱に入れて納む上に栗五ツを五角に置いて蓋を覆ふ都合百箱初の亥ノ日に獻す十月亥ノ日三  
 日ある時は初めの亥ノ日百箱中の亥ノ日終りの亥ノ日は年に依て増減ありといへ共八九十に及て百に不及門太夫  
 が枝別の家百軒ありて順番に是を收む朝廷<sup>(延)</sup>より白銀を下し給ふに八木の價一石ニ付五十目なる時は餅一筥の價三  
 匁もし五十目わづか及はざれば價二匁五分ツ、白銀を以て下し給ふ初亥の百筥は年々定て門太夫是を獻す中ノ亥  
 は次のむら大丸村邑中より獻す後ノ亥は切畑村の郷中より獻す亥日二日の年は後の切畑村を除く也右山城國山科  
 の土民こゝに來て京師に運ひ其日の亥ノ刻に 禁裏に獻スその節會の事終て後其筥を分チ 武城に至る例の初め  
 凡千年に及て怠慢なかりき就中二百年斗り以前此事兩年懈怠ありしかば 禁裏例年の政事なるゆへ忽御惱ありけ

り博士是を奏して復古例に續けりとそこれを木代の亥の子餅といふ

或説ニ垂仁帝の朝三輪ノ神告て日十月亥ノ日富福智惠尊<sup>(トミフチサイノミコト)</sup>巳ノ日降て地を富を行ふ亥ノ日昇りて天の富を

行ふ餅酒を以てこれを祭らば災皆消シ幸ひ悉おこらん此御告より始ル云々能勢郡土民門太夫毎年亥猪の

餅を 禁中に奉る大錢の大さなる白餅二ツ添るに忍艸菊葉たとふ紙に包て諸臣に給ふとそ

○

木代村門太夫が家に神石といひて大サ三尋長サ五尺の圓石あり神石と號く古來より祭れる故にや今古雷火の難な  
 し

○

大丸村に大サ方二間斗りその形チ鉦鉸のごとくなる石ありこれを磬ば釣鐘の響きあり依之釣かね石と號く具川三  
 位當郷開發の時まはらく此所に遊曆<sup>(歴)</sup>あつて甚秘藏<sup>(秘)</sup>し給ひし名石也

○

天皇村の後に脚木摺峙<sup>(タシ)</sup>といふあり此處道いろく曲て石高く木の根にて踏處を痛めり此峙を越れば丹州靱井村  
 ニ出る



○有リ無シの宮

野間村の神社は式内の御神なれ共往古は在かなしかといへる至て小宮なりしゆへ式内の神なる事を知る人なし依之有なしの宮と異名して土人今に其名を呼へり

○御門屋敷

片山村の御門屋敷といへるは 土御門院ノ御宇公卿御名不知ちばらくこゝに春秋を送り給ひし舊地にして今に御門屋敷と呼べり土俗此地を廢しまたは家建をせんとすれば忽(崇)ち崇りありて其人を損ず故に土民大ひにおそる

攝陽奇觀 卷之三

○難波の希有

初篇

- |             |                |              |           |
|-------------|----------------|--------------|-----------|
| 一月々に替ル看板    | 天満十丁目筋東かは紅粉屋   | 一いほなしの半鐘     | 金屋橋西へ入    |
| 一ござノ暖簾      | 瓦町一丁目筋南へ入東がは   | 一三角ノ橋の欄干     | 富島中津ばし    |
| 一門のうへ大黒ノ彫物  | 谷町筋法妙寺         | 一松ノ切口雨除ケの釜   | 薩摩堀北のはし   |
| 一鳩番ひノ瓦      | なんば橋北詰の角       | 一金物まがひニ塗たる垂木 | 立賣堀中はし北詰東 |
| 一彫物細工ノ用心ノ溜水 | ばくろう渡シ乗場より北    | 一間口五間ニ一本の軒けた | 御池はし東詰南   |
| 一薩摩杉ノ藏の腰板   | 天満吹子屋町南西角      | 一火の用心ニ工夫の杓十本 | 九之介はし西詰   |
| 一左りざんノ瓦     | 堀江辰巳屋のうら北へ入東かは |              |           |
| 一願掛ル水道の石    | 天満橋南詰一丁東       | 一舌出して笑ふて居ル鬼瓦 | 谷町筋久本寺番神堂 |
| 一溝石の砥石      | 道頓堀汐見橋南詰西がは    | 一釣鐘の龍頭四角     | 東天満寺町龍海寺  |
| 一三段の瓦ぶき     | 新町はし東詰         | 一まつくい塗の看板    | 南堀江二丁目角   |



- 一三尺の提ケ烟草盆 順慶町心齋はし西南かは 安治川はし北詰東
- 一片下りに見ゆる門 源聖寺坂北側の小門 大寶寺町疊屋町南西角
- 一ちんば門 ばくろう渡シ乗場より南 心齋橋筋米屋町東北かは
- 一角ノ柱丸太 堺筋清水町角 天満吹子屋町南かは荒物屋
- 一壹間壹小間土藏付の屋敷 九之介橋かぢや町角 高津山より北西
- 一軒柱にて建とゆう 難波新地芝居裏南東かは 中はし筋大寶寺町南東かは
- 一墓所の板塀に忍び返シ 千日にあり

一一 篇

- 一鼻毛抜て居ル力士 天王寺金堂屋根西の中 一門の入り鳥居 天満寒山寺前の圓妙院
- 一くるまきの繩鎖り 肥後はし北へ入東かはうら 一くろかねの格子 阿波座古金町濱角
- 一町中に道おしへの立石 松屋町安堂寺橋角 一番所てうちん紙屑籠 石屋はし東詰
- 一水上へ流るゝ川 ざこば咲吉橋の下 一四十間の間大屋根惣たゝき屋ね 鯉座はし
- 一自然石の人丸 渡邊はし北詰 一白がの松門の上の猿 白髪町觀音
- 一賣物ニ一ツくの發句付 上大和橋筋松屋町東へ入北かは 一土ぬりの天井 道修町淀屋はし北へ入せんべい屋
- 一間口間中壹小間への家 新町橋西詰南濱かは

- 一水道の石橋ニ生れのへ此かたあり 新難波橋筋籠や町間 一鍵で明ル雪隠 四ツ橋北西詰
- 一大門ニ五本の垂木 南の御堂南の門 一目の玉ノない鬼瓦 高津宮ノ内自性院臺所
- 一間口一間の長持屋 心齋橋筋安土町北へ入 一取り置きの壁の腰板 本町中橋南へ入東かは藏
- 一鐘馗(鐘)の瓦 靱油懸町羽子板橋筋西のすし角 一水道の石はし車止の立札 生玉坂の下
- 一藏の壁塗上ケの藥の看板 西横堀尼崎はし西詰 一兩方ざんの瓦 新町阿波座南側東のはし
- 一二王門の寺 口繩坂のうへおよぶゆん寺 一菩提樹の木ノ有處 高津植木屋吉介
- 一自身の看板となりの屋ねニあり 四ツ橋東南詰 一丸破風造りの家 堺筋唐物町角貝杓子屋
- 一正月門松のかわり椎の木 中之島平戸の屋敷 一ツの井戸ニくるまきニツ 北の御堂臺所まへ
- 一切籠形ニ作りし用心の水溜 順慶町せんだんの木南東かは 一引戸の雪隠 湊はし北詰東濱かは
- 一大道の土手二筋 福島羅漢前

一二 篇

- 一大屋根うらニ廿五貫ノちぎ有 新町東口よしや 一石細工布袋のあし 天王寺西門南かは
- 一座敷の内ニくる巻井戸 薩摩堀橋詰の風呂屋 一屋根うらニ中ニおたふくの面 下寺町大蓮寺まへ南
- 一橋の欄干ニ大鋌打あり 東ほり今橋東より 一入口貳ツニ簀戸一枚 伏見兩替町三丁目南かは
- 一四角ナ壹文の糊 過書町心齋はし筋笠巨屋 一楠の石の手水鉢 濱の寺源光寺



- 一 正の辻 堂島松屋の東行當り 一間口壹間半奥行壹間半屋敷 備後町心齋橋筋 せんべい屋
- 一 堀に丸瓦生れなりの本ふき屋根 平野町境筋東へ入南かは
- 一 水はきまぬ立とゆう 太左衛門橋筋河音 一 屋根の看板下より出シ入の店 心齋橋北詰 象牙屋
- 一 立六尺ニ横壹尺ノ藏の窓 内久寶寺町追手町角 一 惣まつくい塗の小屋根 金屋はし東詰北 濱かは
- 一 屋根瓦に一枚ノ家名あるしあり 道頓堀西ふかりのふきや
- 一 四枚折の門の戸 高津鳥居の内西かはの寺 一 橋の欄干ニ唐草の金物有 西横堀信濃はし
- 一 茶屋の掛あんどウニ馬のゑるし有 御池通二丁目北の筋北かは
- 一 赤金瓦の紋町の辻ニ有 北久太郎町中ばし 一 かけねなしといふ看板有 今橋御靈筋東ちやく屋
- 一 濱ノ石かけニ蓮臺彫付あり 住吉橋北詰西角 一 金箱で堀のこし板 北埜村いなり山北へ入南かは
- 一 雑穀の中へ巴をゑるす店 天満池田町池田屋 一 四角ナ酒はやし 過書町難波橋西南かは
- 一 入口ノ柱杵石の風雅 本町御堂筋少シ南西かは 一 屋根看板の上ニ徳利あり 佐野屋橋南詰西
- 一 入口のうへ祈禱札凡四百枚斗り 難波はし北詰壹筋内東へ入角 一 堀の三ツかうら出してあり 高津鳥居の内西かはの寺
- 一 一間口壹間ニて商賣三色 天神橋北詰一筋北の角 一 堀の三ツかうら出してあり 高津鳥居の内西かはの寺
- 一 四ツ辻ニて四丁町あり 堀江笹ば、北の辻 一 松屋町筋ニ一軒もない商賣 薪屋
- 一 五十年來編笠の非人 長堀二ツもん

四篇

- 一 大家根ニ猿の土人形あり 中はし備後町北へ入西かは 一 門の屋根掛かねにて取はづし 安堂寺町東ほり
- 一 獅子がゆびくわへて居ル瓦 天満東寺町天神橋一筋西 一 垂木に色々の顔あり 天王寺御影堂
- 一 家根ニ鐵のまんこあり (塚) 今橋境筋角 一 大鶴の彫物の額 天下茶屋村安養寺
- 一 樂燒の石塔 谷町寺町經白寺 一 松梅櫻竹文字彫込ミ 天神社内新土手南穴門
- 一 とゆう竹なしニとゆうが有家 坂町中はし東 一 石の叩きかね 大師廻上の宮前御茶所
- 一 有馬の富士見ゆる所 鳴野はし邊より北西をみる 一 十五日所と書た看板 堀江瓶はし北餅屋
- 一 土塗の釣鐘堂 曾根崎長池藤井寺 一 一こしからこしがつき有 難波橋すし樽屋はし角
- 一 あわび貝ニてふきし屋ね 難波新地角力場まへ 一 屋根迄白イ土藏 阿波座堀北かは西横堀西
- 一 大界石堀にぬりこめあり 北野村太融寺南萬善寺 一 文字なしの臺かんばん 道修町井池西
- 一 新引出し門の戸 東御堂北べり 一 鶯の瓦 難波村東より入ル
- 一 木の叩キ鉦 天王寺西門内南へ入堂 一 一本堂天井大龍の墨畫 一心寺内
- 一 一筋の丁ニ土藏百十三有 浮世小路 一 一川を隔て四所ニ丁の名同じ 四ツはし平右衛門丁
- 一 一米の半切ニ杓付て有 天満池田町東かは米屋 一 看板の文字ニ鏡入レあり 尼崎はし西詰
- 一 二階ニ底なしの明宮有 松屋町筋九之助橋石屋 一 一京東山のみゆる所 大江橋上より東北の方



- 一折れた枅に竹がく、つて昔よりあり 安堂 渡邊筋米屋 寺町
- 一狛親子の瓦鶏の瓦 天満寺町堀川西光明寺
- 一佛の大足がた 天王寺西門
- 一二タダかへ程ナ椎の看板 道頓堀新道
- 一棟より軒迄大百足瓦 高津社内いなり社前

五 篇

- 一模様つぎの溝石 唐物町御堂筋北西角
- 一用水ノおもし大ひやうたん 橘通五丁目へつつい屋
- 一ちつ薬ノ看板ニ大杓子 周防町御堂筋西
- 一十間の間まゆるノ木のとゆ 本町橋 西詰 北へ入所ノ土藏
- 一大鼓ニ乗た石の地藏 堀江辰巳屋うしろ北へ入
- 一半鐘上下ニ釣あり 島之内綿袋町
- 一十疊の間ニ一字天井 樋ノ上大和はし西へ入濱かは
- 一法衣のおゆホ斗り賣ル家 高津鳥居少シ西
- 一軒の腕木ニ三ツのたすけ 新難波西之町 飯
- 一鳥居の書てあるごもくきんせい札 高麗橋壹丁目 南へ入角
- 一唐の太鼓の用水桶 久太郎町心齋はし東へ入北かは
- 一角ノ柱大丸太 順慶町渡邊筋西南角
- 一一間半四方の土藏 前垂島下の涉し場
- 一本ぶき勘畧ふき分のやね 天満九丁目吹子屋町筋角
- 一二筋みそ 久太郎町境筋北西角
- 一鰐口棒にて鳴らす 堀江橋北詰西の辻北へ入
- 一とのなしニ雨たれ落さぬ家 坂町中橋東へ入北かわ
- 一米屋の半切ニ竹の杓入あり 天満池 田町ノ 北東かは綿屋
- 一入口ノ庭ニ奥州松島ノ十景 島之内 周防町すし
- 一大坂中ノ大町 南瓦町
- 一團の衝立 宇和島橋南詰油屋
- 一ぐるりニ目を切た挽臼 三休橋安堂寺町角

- 一木綿ノ暖簾晝夜掛捨 天満靈符
- 一簍着て居ル大黒の瓦 鹽町佐野屋橋西へ入北かは
- 一ほうしや米の箱ニツ入口ニ釣りあり ばくろう町心齋橋西へ入北かは
- 一格子の隅に錠蓋してある 尼崎町御靈筋北西角
- 一芝居の幕のやうニ引のうれん 梶木町よど 北かは
- 一鎖りてつないだ質屋の看板 八幡筋心齋はし 西へ入
- 一毎日々々ふく石 島之内大丸向ひ寺子屋
- 一鬼瓦の目ニ眞鍮入て有 鍛冶屋町うなぎ谷角の寺
- 一大屋根 古れん木掛てあり 心齋橋 周防町
- 一二丁兩側とも箱の溝 靱新天満町
- 一五丁目の中に一間四丁 目といふ 本町心 さいせん屋
- 一かくの通りの小屋ね 清水町佐野屋橋東北がは
- 一向ひニせんざい拵へ有所 新町九軒井づ
- 一土俵のうへニ猿の角力取ル瓦 中橋北 西かは 備後町門の際
- 一末にて七色ニ替りし大木 住吉石の鳥居際
- 一大布袋の瓦 北の御堂お茶所となり

六 篇

- 一石橋ニ名ニツあり 福島上天神の隣りの寺
- 一二階窓の柱三本青貝ふせ 天神橋三筋北東へ入風呂や
- 一入口半分々々祭りが違ふ 道頓ほり若太夫芝居
- 一上にて間半廣い門 天満天神土手ニあり
- 一二間の間楠の一枚板上ヶ店 順慶町 心齋はし まんぢう屋
- 一二間の間二寸垂のくだのうれん 戎はし 北詰 すすほん屋
- 一半丁間溝石紫石 北きつき屋敷長屋
- 一雪隠三軒並び三方ニ入口有 北濱壹丁目濱かは
- 一安曇寺柱石 安堂寺町ほね屋町南へ入角
- 一入口の敷居三角 淀屋はし高麗はし 南へ入 西かは



- 一名産煙管所 大清吳趣程赤城 此通りの出し襖ニ書あり 四ツ橋小山
- 一屋根看板ニ瓦細工四尺の玉 橋通六丁目角 一橋の金物一ツノ名ほり付あり 尼崎はし
- 一用水ノおもしろくさりつなぎ 堀江出世薬師東南かは 一二丁兩かは三段瓦ぶきやね 北こんひら長家
- 一入口のうへ堪忍の額入内へ向てかけ有 備後町一丁目南へ入西かは
- 一商賣大にして代品物片荷つゝ買うち 高津ゆどうふ屋
- 一備前大壺ニかすがい三丁うち有これはうり物也 長堀三休橋北詰西へ入所
- 一狂歌して表へ出してあり 大目はし南詰 樽屋 一取置キのはし 堂島小はし
- 一看板ニ家名斗り書てある 順慶町鍛冶屋町南へ入西かは 一雪隠に忍びがへし 心齋はし南づめ

七 篇

- 一風呂屋の書付にゆせん跡取り 湊橋北づめ西 ふう屋 一くもたばねた彫物の看板 島之内大丸西のかんばん
- 一溝蓋入口兩方一尺下てして有る 淡路町心齋はし西へ入南かは 一大屋根 壁ニ德利釣り有 北久寶寺町御堂筋西へ入
- 一藏の棟ニすかしあり 渡邊筋尼崎町北西角 一三間半の釣り格子 うつほ門樋ばし西東ニ有
- 一家根うらニ松かはの彫もの 新町阿波座東の口より少シ西南かは
- 一地藏堂ノ戸ニ題目と念佛書て有 高原のうへ南かは地藏堂
- 一かどのやねうらニ鐵のくさり 淡路町御靈鳥居南の角

- 一入口ニ五右衛門風呂の釜理み有 天満天神鳥居より五筋東北へ入東かは
- 一饅頭屋の臺ニ蓋して錠ふたつ風して遣ふ所 天神戎門西へ入
- 一袖壁のかわら 北の新地芝居西隣り 一石で拵たついたて 心齋橋筋安堂寺町浮田
- 一格子打返して藥の看板ニなる 南久寶寺町せんだんの木西へ入北かわ
- 一ゆがんでみゆる屋根 土橋北詰西へ入北かは南かはよりみる
- 一入口が夜ルは壁ニ成ル所 ほやけ地藏さま 一錢つき十五枚出してある菓子屋 御靈北の門角
- 一松の木皮なりにて堀入の用水 御小人町ほねや町北へ入西かは
- 一一角ニて一軒斗り下て立た藏 福島中の天神まへ 一右ザン左リザンの瓦ふき分やね 下寺町遊行寺のくり
- 一軒下ニて大べつとい釜かけて用水 伏見堀新中はし籠屋町西へ入北かわ
- 一格子ノこ委(悉)ク上ニてついで有ル 新町越後町西 播與 一石佛の脊中ニ錠風してある 下寺町大仙坊門の前
- 一二重戸の雪隠 瓦屋橋東詰北へ入

八 篇

- 一浪花の四ツ流れ 安堂寺橋筋上本町 一藏の腰板惣鋌打 長町貳丁目 ひげそりへぬけろらし内南かわ
- 一橋の名横手ニ書ある所 天満市のかは太平はし 一ふし穴ニ色々の入木 天王寺龜井の水手すり
- 一鶏の瓦 同所庚申井戸屋形 一間口一間ニ奥ゆき十三間の家 同所愛染前 中こうじへ入西かわ



- 一 ほうけんとうの先の玉なし 同所寺内元三大師前か、みの池
- 一 内の名と看板の名と違ふ所 難波村骨つき東 石屋といふ所 一 立どゆう丸太の中くりぬき 新町東口おざ、へに
- 一 大屋根ト小やねとの間にやきもの、藏置きあり 瓦町御霊筋東南かは
- 一 毎日々々墨かける石 木津村中之町寺子屋 一 色々の貝の瓦 下寺町口繩坂北角ノ寺の堀
- 一 前栽惣泉水 同所孔雀茶屋北となり 一 一間半ノ下店ニ足六本 境筋うなぎ谷南へ入東かは (堺)
- 一 きれいなたどん 八幡筋御堂筋北へ入西かは 一 豊島の用水にかすがい打あり 南本町 せんだんの木すし西へ入南かは
- 一 猿の三番叟ノ瓦 北御堂北隅堀の上ニ有 一 三間斗り小よりの暖簾 長町四丁目東かは
- 一 三角の橋のらんかん 木津難波の間ニ有 一 寺の暖簾ニ當字で寺號書てある 口繩坂之上 三五寺

九 篇

- 一 佛前の花立土入て植木 天王寺骨堂の前 一 藏の臺石ニ地藏ほり付 道修町壹丁目 北へ入西かは垣ノうち
- 一 石燈籠の臺ニ箱が置て有 心齋橋筋鹽町の角 一 四角の用水桶 京町堀壹丁目南かは樽屋
- 一 とゆうなしニ雨垂落ぬ家 堺筋順慶町北へ入東かは 一 裏大長屋に銅のとゆう 堂島相場の濱 日野屋裏
- 一 豆腐屋の店ニ細工の鳥とまらせ有 くらがね橋の北詰東へ入
- 一 巴瓦つきぬきノ立とゆう 安堂寺町堺筋西へ入北かは 一 辻から辻迄一軒の家 堂島中壹丁目東の端菓子や
- 一門口五間ニ店五ッ付あり 島之内心齋橋筋吉文字屋 一 用水おもし共出シ入の處 御霊裏門南の行當り

- 一 大木のもと壁ニぬり込 生玉金比羅南へ二軒目東がは寺の内
- 一 連理の枝の看板掛ケ有 島之内綿袋町中はし北へ入かんざし屋
- 一 大だいこの胴井戸がはにしてあり 南堀江 壹丁目 一 はしごさして付ル店の帳 島之内難波はし筋 小西
- 一 大門の戸ニ窓明てあり 北の不動寺西の門 一 くらかね細工用水の箱 安堂寺町谷町南へ入東がは
- 一 後口向キの石塔 千日釣鐘堂の下 一 入ほくろして有ル石塔 千日法華堂向ひ 南寄りの西かは
- 一 想婆所 よりあけのぼ、とら 京町堀紀伊國橋北かは東 一 寺ノ大門解船の木一しき細工 北埜大融寺東の門 過書町南の門
- 一 一堂の天井いろくの畫あり 大融寺内北向堂 一 丁の門ノ戸開キト引戸合ス 淀屋はし筋 橋の上より西を見る
- 一 寺の臺所ノ入口上陰陽のほりもの 中寺町うんらいじ 一 大やね突ぬきはねつるべ有 堀江高臺橋 橋の上より西を見る
- 一 うけあいのこ所といふ看板 (堺) 境筋うなぎ谷南東かは 一 さげおだれ 樋のうへへの端の方ニ 日月星の三光ほり有 道頓堀 清津橋東詰
- 一 中船場ニ大船のてんま庭ニ有 淡路町壹丁目角ノ八百屋
- 一 家根の棟二筋ある家 田籠はし一筋南へ入少西へ行東のやねをみる
- 一 店の暖簾ニ犬ト猿のすまふ うなぎ谷佐野屋はし東へ入北かは
- 一 上正ゆと書てある看板 堺筋うなぎ谷西へ入南かは 一 嵐小うりト書てある醤油のかんはん 舟町橋東詰北
- 一 表二階の窓五色ぬり 天満老松町 難波はし一丁西北かは 一 小屋根の裏ニ寶盡彫もの 薩摩堀中筋はし北詰西
- 一 壁に錠おろしある所 島の内周防町御堂すし東へ入 一 わたり二尺横八十間の石はし 生玉眞言坂のうへ
- 一 隣り同十萬事揃ニする所 新町越後町東の門より少シ西南かは



- 一 辻地藏のやね石でまてあり 長堀高はし北詰角 一 紺島ノ木綿暖簾家名斗り白ぬき 大黒橋北詰 東へ入
- 一 からやくの 天上と書有 松屋町高麗はし西へ入 一 江戸より幽霊の持て来た佛 千日法花堂ニあり
- 一 かんばんに 軒の柱にて立とゆうにしてあり 太左衛門はし筋河音 一 二王門のある寺 中寺町 正法寺

十 篇

- 一 溝石が砥石でして有 江戸堀五島の屋敷 一 寺町でなしニ丁内ニ寺五ヶ寺有 天満七丁目
- 一 笑ひの繪馬 生玉鳥居の南こしきづか 一 のうれんニ八月一日やと書付 京町堀 紀伊國は
- 一 大屋根烟り出シのやね細工物 平野橋西詰北角 一 細工ものほうしや米入の箱 南久太郎町 心齋はし
- 一 一町の門戸門兩方よりヱル所 阿波座日向町 三筋西 一 五角ニ建た家 北ノ新やしき神明ノ 南西
- 一 一門口三間ノみぞ石がはりニくわのふろ 長町南半町 一 辻地藏堂鐔口かはりニ小釣かね 阿波座日向町 四ツ
- 一 一番所ニ車付引あるく 御池通四丁目 一 げんさい 淡路町北へ
- 一 餅店の 真鍮のさくらの金もの 北ノ縁はし北詰もちや 一 住家三間土藏八十疊敷 上町おかん
- 一 一辻地藏堂廻り道具 阿波座戸屋町西よこほりより一すし内かど
- 一 一丸太格子ニ鐔口釣り内ニ地藏あり 天神門前より七ツ東 北へ入
- 一 一五月の幟竹の末すぐニ出しニする所 高津下寺町極樂橋南八百屋

- 一 一入口のとうろうノやね大摺ばち 四ッばし 西詰北 一 柏錠の風シてある雪隠 江戸堀 大齋橋
- 一 一菓子袋の書付の名人 松屋町柳の前 源氏豆 一 身代りの石地藏 大げさニ 一 心寺骨塚の北の方
- 一 一路次の内やねうらニ大杓子 馬屋町すし渡邊北へ入 一 辻地藏堂の内ニみき徳利數不知 新町西口山本町ノ角
- 一 一六角堂觀音様箱ニ丸太ニ付立てアリ 順慶町壹丁目南西かは
- 一 一用水入ものニ忠孝ト書付有 淀屋橋筋伏見町北へ入門ノ際
- 一 一下より壹尺上ニ掛て有ル小便たご 大江橋北行當リ一ツ西北へ入
- 一 一土ぬりの天井 新町はし東詰北西かは 一 寺の門のうへ犬ト鶏の瓦 堀川戎西むかひ
- 一 一亩ニ有ル大石塔かさね臺石すきアリ 一心寺本堂前南井戸の際
- 一 一水道の中ニ駒よせ 新町西口井戸南寺の前 一 丸太格子壹本ツ、ぬきさしの成ル所 高麗はし 御靈
- 一 一行拔ケの雪隠 筑前殿はし北詰西へ町の中ほとニ有

○新 希 有

- 一 一三重の家 西横堀筋違橋東詰少シ南東かは 一 菓子屋の看板ニ碓リ 本町せんだんの木少シ 南へ
- 一 一酔屋の看板のはたニ三尺斗りの棒一本釣りアリ 西横堀新一橋北詰
- 一 一犬と猿とのすまふノ暖簾 松屋町 農人橋 少シ南小間物屋 一 土藏の四方に丸瓦有 新町阿波橋の門口
- 一 一土藏の窓凡家の口ほど 高原會所むかひ 一 土藏ニ看板ぬり込あり 道修町堺筋少シ東



- 一 地震の骨にて用水のおもし 南久寶寺町 心齋はし少
- 一 雨た、きの溝二すじ 心齋橋鹽町北西角
- 一 石にて拵た看板 大江橋南詰
- 一 魚の骨にて扇子の地番のかんばん 伏見町淀屋はし少シ東へ入南かは
- 一 五色の化粧壁 新町はし西詰少シ北へ入
- 一 古木ノ龍手ニ鈴持せ有 三休橋うなぎ谷すこし南西かは金物屋の店
- 一 門口ニ百方遍のおゆす釣り有 松屋町筋安堂寺橋少シ南へ入石とうや
- 一 間口間中にて造り酒屋 順慶町心齋橋少シ西北かは
- 一 間口二間にて奥行二十間斗り土藏はなれ座敷中庭付キ 道頓堀樋上橋東詰南かは
- 一 石にて切籠の用水入 順慶町三休はし南西かは
- 一 燈籠拵 やねれん木も付あり 新町橋西詰 二丁南きせ
- 一 いんようの道具所と書付あり 八幡筋難波はし東へ入南かは竹さいく屋の出しふすま
- 一 解船板一式の門 天王寺増井南となり
- 一 看板丸太拵にて晝夜置キ有 大寶寺町中橋少シ北西かは 酒屋
- 一 岸木の水た、き砥石 中之島筑前殿はし北詰の西
- 一 門塀屋根瓦石にて拵へ有 谷町筋寺町海法寺
- 一 軒下の井戸内より錠おろす 高麗橋骨屋町 少シ南
- 一 籠屋町新なんば橋 少シ北へ 入大水道
- 一 一石橋ニ黒キへなり 籠屋町新なんば橋
- 一 豆腐屋の庭ニ木像の大黒 御池橋一筋西北へ入所
- 一 豆腐屋の庭ニ木像の大黒 御池橋一筋西北へ入所
- 一 道頓堀樋上橋東詰南かは
- 一 一石の額 心齋橋南詰一筋西角地藏堂
- 一 一紙くす籠のちやうちん 西横堀石屋はし東詰番所
- 一 一土藏の腰板はん木 京町堀なんば橋南つめ

○夜の希有大寄

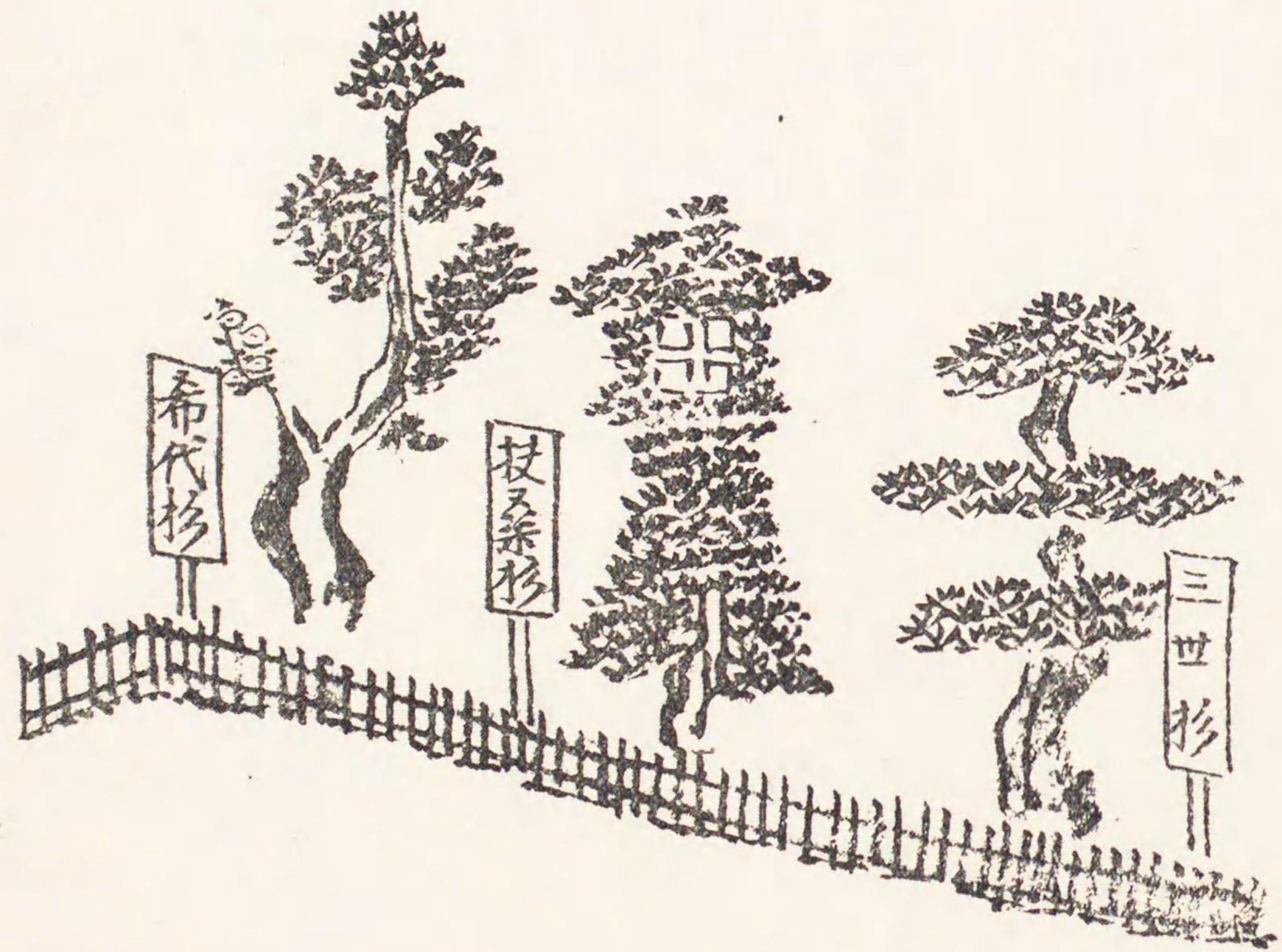
- 一 四角ナちやうちん釣て有所 江戸堀紀 田邊屋藥の店
- 一 晝は南艸屋よるは四ツ時より番所ニ成ル 伊國はし 天満十丁目吹子屋町北
- 一 暮方より門口ニ立るかき 竹のくだにてつなぎ有 心齋橋うなぎ谷角
- 一 一時太鼓初夜ニ一ツ夫より一ツ上リニ時打町 道修町二丁目
- 一 狐に馴染のある惣嫁 難波新地野がは 天神門前町
- 一 十五町の間初夜打ぬ町 順慶町堺筋より西口迄 網島さくらの宮邊
- 一 晝夜門口ぬ所 八間屋
- 一 火除ケのたいこ毎月晦日ばかり打 順慶町四丁目 一油こほれぬ工夫のちやうちん 心齋はしおぐらや店

○浪花繪馬の希有

- 一 竹の皮ノ晝馬 千日自安寺
- 一 塵取り竹箒 千日自安寺
- 一 衣装入三十六歌仙 玉造いなり
- 一 なべのふた お初天神
- 一 物まね 千日法善寺
- 一 千匹狐 千日自安寺
- 一 忠臣藏ノ地獄 老松町
- 一 まないた お初天神
- 一 笠の蓋 お初天神
- 一 摺子木火吹竹 久寶寺町中橋角地藏



- |           |                      |            |            |
|-----------|----------------------|------------|------------|
| 一長畫馬      | 太ゆう寺                 | 一大天狗       | 高津         |
| 一長いきの會    | 清水                   | 一德利茶碗      | 生玉こんひら     |
| 一杓子てんぐ    | あみだ池                 | 一彫物ノ金時     | 生玉こんひら     |
| 一衣装入大畫馬   | 朝日明神                 | 一連理の木      | 眞田山        |
| 一中村慶子畫    | 眞田山                  | 一嵐國市十四歳ノ畫  | 眞田山        |
| 一丸木造リノ看板  | (堺)境筋安堂寺町北へ入西かは神教金剛丹 | 一堀の裏ニ漢文塗の壁 | 天王寺町吉祥寺    |
| 一隔年に蚊の出る所 | 山崎町東側ト西がは            | 一菰づゝみ酒樽の石塔 | 千日墓所       |
| 一琴形リの石塔   | 下寺町大仙坊               | 一釣がね松      | 天満天神社内     |
| 一釣がね松     | 天王寺                  |            | ……以下原本空白…… |



杉の名木

○弘法のなげ橋

上町三軒屋生駒丁金毘羅坂といふ所に弘法のなげ橋として石橋あり往昔大師諸人の爲に投げかけ給ふとぞ

○杉の名木

玉造森の宮より一丁斗り北西御屋敷の内に希代杉三世杉扶桑杉とて名木あり三世杉も扶桑杉も作り木にして圖のごとく珍らかなる木也希代杉は中にも青々たる木のまたより山吹の花咲出るさかりの頃はあたりまばゆく七重八重に見事也

○假井戸

松屋町筋九之助橋より南西側に井戸あり此所に涌水は悪水ゆへ東側の井戸よりかけ樋にて此假



井戸へ移す見かけは浅き井戸ゆへちらざる人不思議(議)に思ふ也

○石 不 動

寺町天龍院の境内に大石の不動塚あり浪花入江氏老醫建り拜石に弘法大師の御手のかたちをうつし刻む左右に石燈籠正面に華表あり

○高野山遙拜所

同傳光寺南池のはたに高野山遙拜所あり山坂の苦しみなくて居ながら拜するとは老若ともにありかたき事也

○天の探女塚

寺町より野中觀音堂へ行道に近き頃より天の探女の塚を建り往昔天の盤船(磐)にて天降り給ふ所とかや

○毘沙門池

此所より少北に龍泉寺としてお茶所あり昔此池より上り給ふ毘沙門天は當寺にありよつて池の名とす古名は蘆間の池といへり

○鶴 之 橋

猪飼野村に古橋あり仁徳天皇十四年冬十一月橋を猪飼津にかける則其所を小橋村といふ日本に橋をかけるはじめなりとぞ今に鶴の橋とて木の村猪飼津の村にかゝれり

○鬼の目の玉なき瓦

高津境内自性院の家根鬼瓦の目の玉なし

○百 足 の 瓦

同稻荷社の前なる寶藏の家根は百足の瓦上には四天王の瓦世に類ひなき名作也

○梅 の 彫 物

生玉社内大師堂の内正面に梅の大木の彫物あり大坂上町長尾氏造る名工なり

○題 目 石

谷町筋寺町法妙寺地内に古き塔あり題目をあらはすたけ一丈餘はゞ三尺餘あり一説には往古玉造石山の邊り題目



堂の本尊となして日夜題目を唱へし古き塔を文祿年中當寺へ移すとぞよつて山號を本石山共いふよし今におゐて諸人心願をこむれば成就すといへり

○番神堂鬼瓦

同寺町久本寺地内番神堂の鬼瓦は舌を出して笑ふ類ひなき名作也

當寺ニ其昔梅の由兵衛がために一命を捨たる長吉の塚あり

○金剛力士ノ小像

口繩坂のうへ南側□□に金剛力士の至て小像を門の兩脇に安置し給ふ伽藍の二王門はいづれも大像なるに當寺のごとく小像はめづらし

○四文錢ノ瓦

下寺町稱名寺門の瓦并塀の廻りまで四文錢の形に造りし瓦也

○天井の雲龍

坂松山一心寺本堂の天井一面に大畫の雲龍古閑和尚の筆跡也この僧の畫き給ふ大黒天は火除の徳ありとぞ

○黒佛

同寺南の方の堂に在す黒佛は衆生濟度のため難行苦行をなされし體相也御顔色あしく世俗黒佛といひて餘佛とは甚異體也

○俊徳丸ノ古跡

河内國高安の俊徳丸を捨し所は天王寺石の鳥井(居)の内引聲堂の邊りといふ一説には俗に釘なし堂といふ後なる駒ヶ池の邊り或は施行院ともまた猪飼野鶴の橋の邊に俊徳街道といふ所あり是は河内より天王寺へ通行の道なるべし

○五葉の名木

天王寺南門より西堀越といふ所の民家の堀の内に五葉の松あり世に類ひなき名木也

○十五日所

北堀江瓶橋の邊に餅屋の看板十五日所と書付あり浪華隴陽居士の筆也按ルに八月十五夜を望つきといふは入日と月の出汐とむかひのぞむによりて家業の餅つき臼の音に買人がむかひのそむといふ心にあ



○入内雀

中之島所々に入内雀ウチノイヌといふあり常のすゞめよりは小さく羽色は黒めがち也又集る事も別也

入内雀實方の故事  
世人よく知れり

○有馬富士

大川難波橋の橋上中ほどより乾の方の山間に當國有馬の富士山みゆる

○藤井寺釣鐘堂

北埜長池藤井寺の釣鐘堂は土塗也

○四天王の瓦

同不動寺本堂の瓦に四天王の拔身してゐる又天狗が鼻おさへ居る瓦もありおかし

○梅塚

同常安寺の地内に年ふりし古木の紅梅あり梅塚といふ北野天満宮の御神木也當社内に往昔一夜の内に松七本生ひ出し古木に青々たり

○權現松

北野の野中に古木の松あり樹下に小祠ありて昔は此所へ參詣多かりしとぞ其頃よみ人志らす

千とせふる松に壽命をことふきてねかひをかける權現の宮  
年々枝葉榮へ十かへりの花の春は緑の色をます

○大蜘蛛松

小曾根村涉し場より北の堤の竝松の中に大蜘蛛の松とて大木あり此古松より西の方天竺川の松へむかし大蜘蛛巣をかけて鳥獸を取喰ひ往來の人に妨ゲをなすゆへこれを退治す今に大蜘蛛の松といふ

○二名橋

上福島正福寺地内の石橋は岡橋春曙橋の二名あり

○鶺鴒森

同梯掘寺内にかさゝきの森といふあり元祿年中天野屋何某の古跡とかや

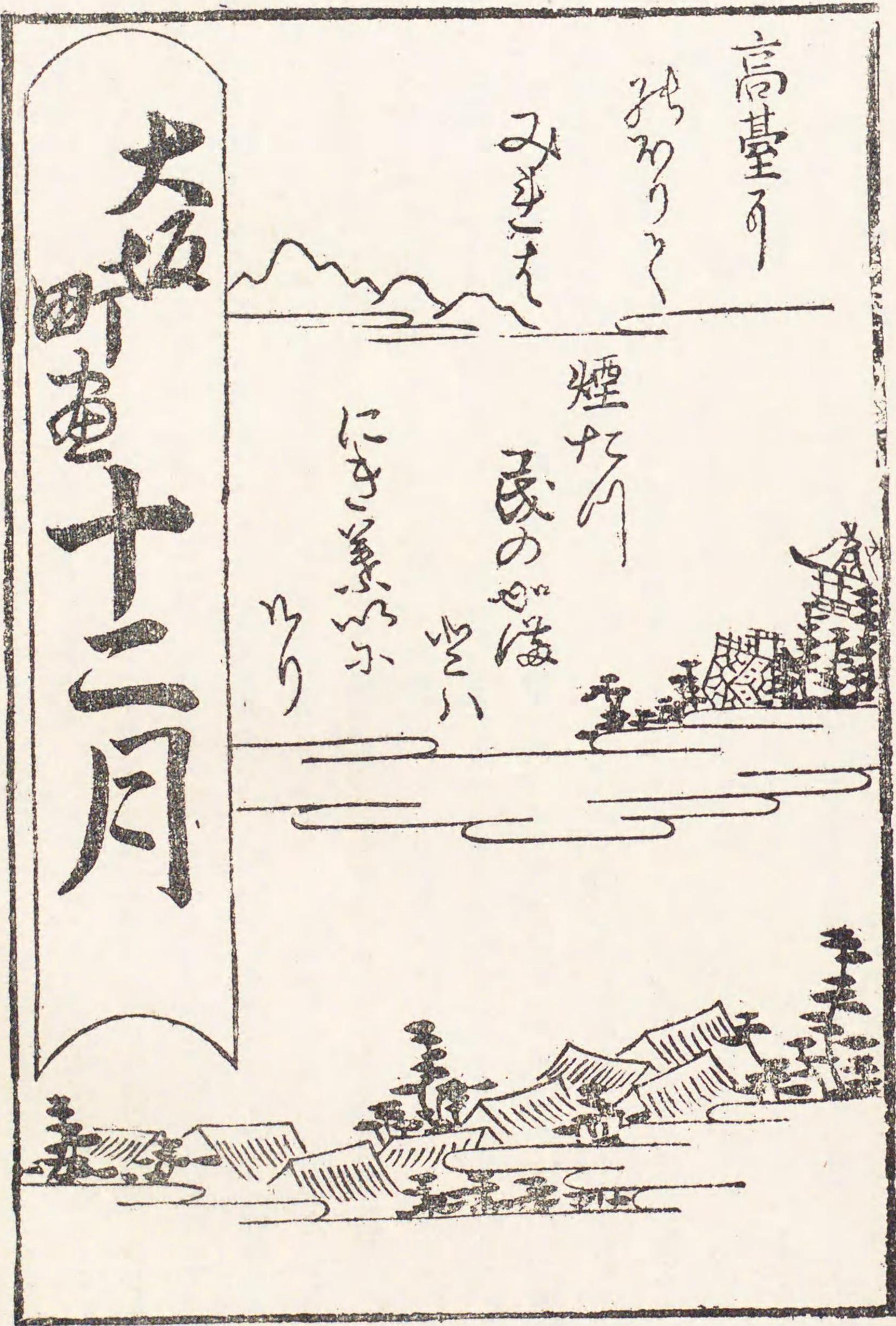


○御愛樹石

天満天神社土堤南の穴門の石に梅櫻松竹の文字を彫刻せり菅神御愛樹の名によりてや一説に此石は當氏地青物市の民家二年久しくありしを奉納せし共いふ

○開運の牛

同社地に開運の牛あり往昔土師連吾筈といふ人土器の細工人を山城國伏見の里に住しめ稻荷山の三ツの峰の土を交へ今の代までも傳はりて伏見街道の産物となれり





となんくくまづ大坂の。町をひらくや。こちよいぞや。みなひろこうじ。一ツ上人町としをかさや町。よ  
 わい折や町つかじやまち。おれい茂左衛門丁新地かぢき町。れいの瓦や町まち。なづななや町はやし玉や町。  
 心いきく新戎丁。おつとてにてを嶋の内とてうなぎ谷二丁目も。はねや天満町ひやうし惣右衛門丁。おともと  
 んだや丁と。ついてもらゑばほねや町通。こたへ鐘すじゆくきくや町もれて長町。水は丹波や町のふ初せ丁。ま  
 やも松や町はつむまや町だいてねぎ町。くもにかいふ堀兵庫や町と。とこのひなや町きくもまうらへ町あ、よい  
 八百や町とゆびでわたや町にくと伏見町。も、の關町は鹽町とゆうて。ちはの米や町あしでかいや町まゆどうつ  
 り鐘すじ高野御池通さて三ツ寺丁。うづきくものちには日向町坂町も御はんじよ。いきも田嶋丁。とこのねり  
 くよ。つくによしや町かねのひゞきにごん右衛門丁。ぬれてあんほり三右衛門丁は。どをきよまんじが辻。のほ  
 りさのや橋。こびき中丁。まくや新町の。せつく帯や町。もんと御せうはみな御堂すじ。ゆくな柳町とめてこうら  
 い橋。つい常安町中之嶋すぢ合みなべ嶋にぎはしはやる小供志なの町はよいなんば丁。すぎたまんほ丁いかい常珍  
 町。おおう玉水丁てせいをつけてはみな御はらひすじ。うはきなんば新地つけるふや町おりにふくたま玉手丁ぎ  
 やくは。本町のあいだはおどりかごや町よねや長堀丁くどきときふね。おんど富嶋。白子うら町つらお宇和志まは  
 まかは。さてもた、みや町けいき堺すじおば宮川丁。ぐつとつきじみりやみなよい町と又とりかゝる二本松丁ひ  
 かん。これぞりうけい丁ト半丁合とし金や丁のこゑおきぬや町茶うで炭や町。札の辻とてみな片町に。まつりあ  
 ま町二ツいど三すじのべ。おきれ町上なんば丁。いどの辻とておくび町木幡町も。おまへ丁のあたりを五やも  
 まゆんけい町も。つるでもめん町。ほんにせきだや町こわいおうかめ谷。もそとまらか町あはをふな町ふいご町と

てせいおいせ町。大し小嶋町ついまや町。おともをわり坂よいこうじ町。ようき魚や町のほうきや町とて。中  
 の丁やみぞのかはを。はいてまんねん丁やすゞや町。のちにや空心町ほんの安道寺町はやせんば丁。けかれ福井  
 丁のやくおはまがは町のかづかづちよど三百六十四ツつるたひいふうみるよう

〔編者曰ク原本ハコノ項板行ノママヲ二丁ニ貼付ケアリ茲ニハ其第一丁ノ表ノミヲ凸版ニセリ〕

253453



○元祖巡并詠歌

第壹番 妙香院 あらたうと妙香院も初めより月のいるさの道はかはらし

二番 法輪寺

をのつから法の

はやしとなる寺は

納る御代のまろし

也けり

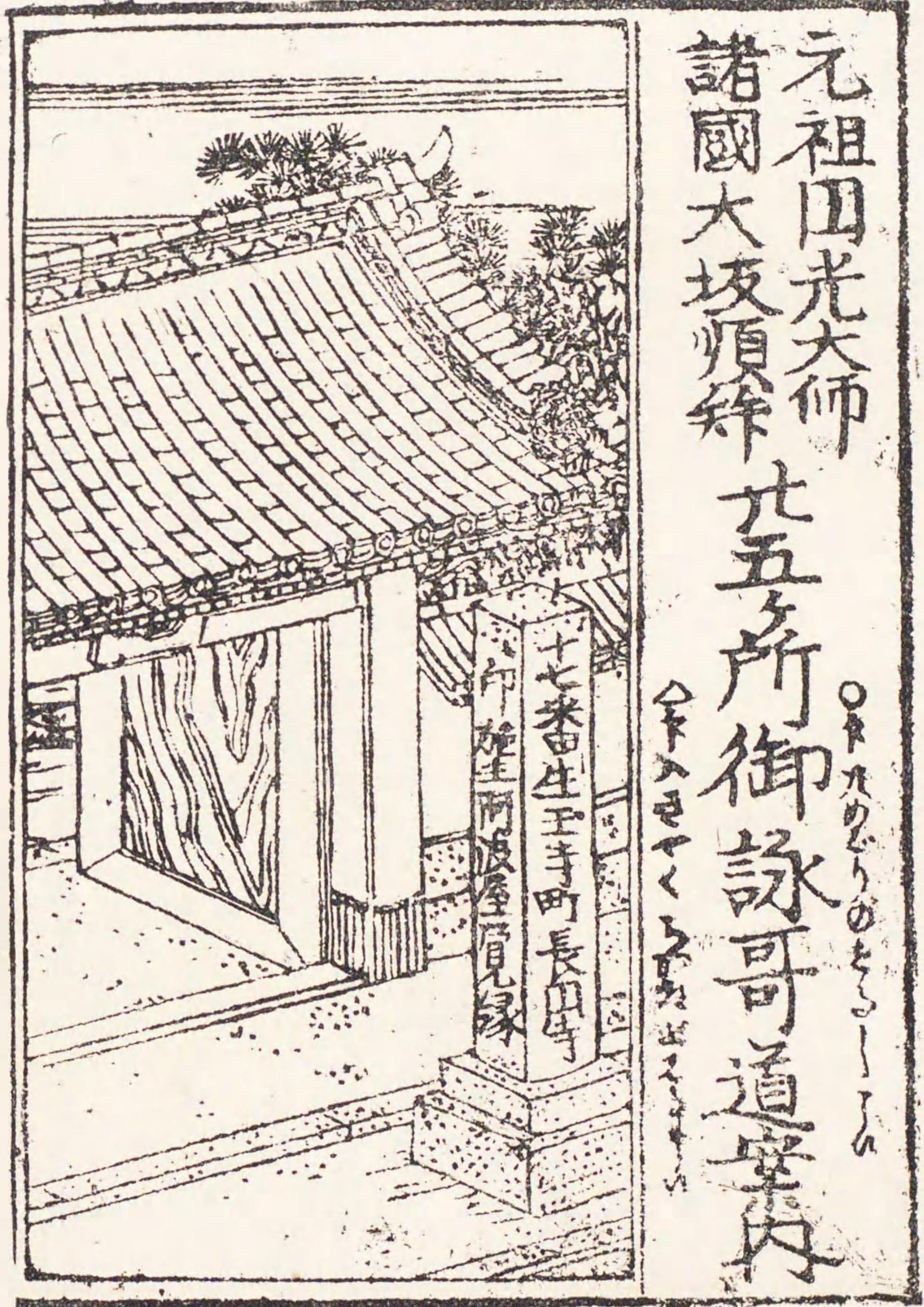
三番 蟠龍寺

三惡の道はのか

れてはんりうし佛

をまもる名こそ嬉

しき



四番 冷雲寺

山高し雪の

花ちる冷雲か

かさもいちうの

やとりなりとそ

五番

大鏡寺

うつらはや我身

みか、ん大鏡寺

まんるの波の

音も靜かに

一 ばんにみまさか たんまやうじ 同 てんま西寺町 めうかういん	ふたはたのあまくたり ますむくのきはよ、にくちせぬのりのしのおと	△ てんまでら町西より四けんめ めうかうるん
二 ばんにさぬきの ほうねんじ 同 同町 ほうりんじ	おほつかなたれかいひ けんこまつとはくもをさ、ふるたかまつのゑだ	貳 同東へ三けんめこうもり松の てら ほうりんじ
三 ばんにたかさご 十りんじ 同 ばんりうじ	うまれてはまづおもひ でんふるさとにちきりしともものふかきまことを	三 ほうりんじより一すじ東のつ じ西角 ばんりうじ
四 ばんにあまが崎 によらいん 同 れいうんいん	みとくちとこ、ろのほか のみたなれはわれをはなれてとなへこそすれ	四 ばんりうの東かと れいうんるん



六番

専念寺

聲もみな揃ふ

ほたいのせんねんし

智恵才覺も

ともにいらねは

七番

大長寺

よにうかみ名さへも

こゝの大長寺

鯉魚成佛は

うたがひもなし

八番

宗圓寺

入相の鐘のひききも

そうゑんし

こそせうもよふす

せかいとそなる

九番

誓福寺

定めなき

浮世と思ふ誓福寺

いそかぬ道を

急く友かな

五ばんにかちをじ 二かいどう 同東寺町 大きやうじ	志ばのとにあけくれかゝる あらくもをいつむらさきのいろに見なさん	五 寺 だいきやうじ
六ばんにてんわう じねんぶつどう 同 せんねんじ	あみたぶとにしにこゝろを うつせみのもぬけはてたるこへぞすゞしき	六 同東はしの寺 是まで八丁有 んじ

七ばんにおなじく 一とんじ 同 あみじま 大ちやうじ	あみたぶといふよりほかは つにくにのなにはのこともあしかりぬべし	七 天満ばし東のわたしこへてゆ くたいちやうじ 是まで十三丁有
八ばんにきいのく にほうおんじ 同 おばせはかすじ そうゑんじ	ごくらくもかくやあらまし あらたのしはやまいらばやなむあみだぶつ	十二 大長寺よりの上本町八丁目西 角だ 是まで十八丁餘 んじ

九ばんにたへまの おくのいん 同 八丁目中寺町 せいふくじ	あみだぶともふすばかりを つとめておやうどのふやうごん見るそうれしき	十一 大ねんじ東へ入寺ノ内をぬ けてむかい だいつうじ
十ばんにあまのか く山 ほうねんじ 同 ほうゑんじ	かくやまやふもとのてらは せまけれどたかきみのりをときてひろめん	十 同南へ四けんめ りうゑんじ

十一ばんにならの 大佛ねんぶつ所 同 大つうじ	さへられぬひかりもあるを おしなへてへだてがほなるあさがすみかな	九 同南へ三けんめ せいふくじ
十二ばんにおつさ か こんまやうじ 同 八丁目すじ 大ねんじ	やはらぐるかみのひかりの かけみちてあきにかはらぬみじかよのつき	八 南のすじ東へはかすじ東かわ そうゑんじ



十番

龍淵寺

せうあればあく

めうとてもりうゑんし

今はるらくの

ふつゐなりけり

十一番

大通寺

一點を添れば

天へ大通寺

悪事千里を

思ふましかは

十二番

大念寺

此世からせきひも

たつる大念寺

未来のはれと

思ふもの哉

十三番

天照寺

忽然としてんしやう

あきの寺も今

秋の艸木も

佛果なるらん

十三ばんに山まろ せいすいじ	同 てんちやうじ	きよみづのたきへまいれは	十三 そうゑんじよりあとへもと り八丁東北角 てんせうじ
十四ばんに小まつ だにちやうりんじ	同 ちやうねんじ	おのづからけんぜあんをんごちやうごくらく	同南角より二けんめ 十四 ちやうねんじ 是まで五丁餘
十五ばんにふしみ のけんくうじ	同 ぎんざんじ	ちとせふる小まつのもとを	同東がわかとより西へ四け 十六 んめ おやううんじ
十六ばんにあをの くわうめうじ	同 おやううんじ	すみかにてむりやうおゆぶつのむかへをぞまつ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス

十七ばんにさかの 二そんるん	同 ちやうゑんじ	あしびきの山どりのおの	十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
十八ばんにあたご ぐわちりんじ	同 下寺町	ちやうねんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
十九ばんに京の寺 ほうねんじ	同 大かくじ	たゝたのめよろつのつみは	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
二十ばんにおなじ くせいくわんじ	同 かうめうじ	ふかくともわがほんぐはんのあらんかぎりは	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス

二十一ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
二十二ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
二十三ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
二十四ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス

二十五ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
二十六ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
二十七ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス
二十八ばんにあな かみせんじ	同 かみせんじ	あなかみせんじ	同南となり 十七 ○この寺より御ゑいか并道 あん内本印施出ス



十四番

稱念寺

音樂のきこへる

空の稱念寺

さもありかたき

雲井なるかな

十五番

銀山寺

世にあれば寶の

山の銀山寺

ひとりいぬみの

おやをしみれな

十六番

淨運寺

清らかなまなとの

風の淨運寺

曇りなき身の

かけそすゝしき

十七番

長圓寺

なかきこそ

たつねてをかは

長圓寺

むらくもおさむ

たよりとまなる

廿一ばんにおはらの せうりんるん 同 かうてんじ	あみたぶにそむるころの いろにではあきのこすへのたぐひならまし	廿貳 同三けんめ ぜんふくじ
廿二ばんに百万べ ちおんじ 同 ぜんふくじ	われはたゝほとけにいつか あをひぐさころのつまにかけぬ日ぞなき	廿一 同あはしま寺 かうてんじ

廿三ばんに おやうけるん 同 ぜんりうじ	ゆきのうちほとけのみなを となふればつもれるつみもやがてきへぬる	二十 同四けんめ かうめうじ
廿四ばんにくろた にくわめうじ 同 さいちやうじ	いけのみつひとのころに にたりけりにごりすむことさだめなければ	十九 同北となりくしやくちやや むかい 大かい くじ

廿五ばんにくわて うざんちおんるん 同 おふさか 一志んじ	くさも木もかれたるのべに たゞひとりまつのみのこるみだのほんぐはん	十八 同けんしやう寺坂北角 けんせうじ 是まで九丁餘有
	あみたぶと十こゑとなへて まどろまんなかきねむりになりもこそすれ	是よりてんま一番へ壹里已上札 所道法三里あまり きやくちか道なり

ゑかうのもん いちゑくわうふふ やういつさいりや うりさんづとくむ おやうりきなむぐ はんそゑおやう大 しくはうちやう大 ほさついでんどうご くらくおたほうか いびやうどうりや	○大師六百御遠忌御報恩のため有信の同行に順露を志らしめんがため御ゑいか并に道のほどおあるして二世のしぐわんをすゝめてともに安養かいに生ぜんことをかつ二親先祖のほたいのため一れんたく生こいねこふのみ 大坂十七番札所生玉寺町長圓寺講中 ほとこしの施主心齋ばし三津寺阿波屋文藏
---	---



- 十八番 源聖寺 寸善に尺魔を拂ふけんしやうじ一もんもらひおくる坂道
- 十九番 大覺寺 とりいれはさも柔和也大かくし水は方圓むかふ志たいに
- 二十番 光明寺 西方にむかへは夕日光明寺こは極樂は寺のうち也
- 廿一番 幸傳寺 めてたさは此世てつゝむかうてんしかくおさまりを願ひつる哉
- 廿二番 善福寺 よきことに幸ひ多き善福寺目に見る物につみつくりすな
- 廿三番 善龍寺 いつれにも尋ねてみれば善龍寺あしき迷ひの道はとかしな
- 廿四番 西照寺 艸も木も此世なからのさいしやうじ佛につかふ心はかりそ
- 廿五番 一心寺 南無あみた佛にこゝろを一心寺なによしあしに風か吹共

……以下原本空白……

〔編者曰ク原本コノ項ハ板行ノママヲ三丁ニ貼付ケアリ茲ニハソノ第一丁ノ表ノミヲ凸版ニセリ。尚ホ卦線外ノ二十五番詠歌ハ歌國自筆ノ書入ナリ〕





二上り  
まづなにはづの。めいふよめいづつ。かぞへたつるやみなかたはしに。一ツ正月。ねんふゆかさねた。すなばお  
きやくはついかど口を。出ると志ん町。わたる四ツばし。れいのきせるやとりふ。やぐらだいこをはやしたつ  
れば。たれもいきく。ついゑびすばし。こへて見わたす。六ツのやぐらや。おちやこなかいも。わりごてさけ  
に。てうしそろへて。さてもどんど。ついでおくれなあれけまする。こたへかねもちゆくきたせんば。もれ  
てきこゆる。みせのはりぐちのふ鴻池や。まろのばんばは。はつむまそふで。たいこにぎはふくもにかくる。大  
きないかも。のほすひがんや。まいる天王寺。あ、よいふしんと。いふてあは太を。ほめてゆつくりもの、はな  
みは。うぶゆといふて。高津いく玉かあしでかたはは。せんばやくしか。さてみづあけは。やしきく。の。はま  
もひろく。さまも御はんおやう。御靈いなりは。ゆき、たへまの。なにはばしかや。どうじま市ばのかねの出  
入はけんぎんだくり。つれて志にせの。みどうのまへこそ。道者斗の。きやくをめあてに。かぶと人形もうるや  
てだいの。とんちりこうで上手をくはし。いぬをやらじと。とめてばちく。ついでさのやばし。ふるてやの。よも  
にきこへしとらやまんぢう。ようきつかさはてんおんまつり。花火たいまつふねにてうちん。さみやたいこで。  
けいこまつしやを皆おさらへや。うたでならんでこめをふみづき。坂町嶋の内。ほりへ茶や町。にしへうかく  
ついあみだ池。ごんざほつこりうばや小めろは。せにをうしのふいもづき。さてもたなでは。けつきさかんの。  
大丸三井。こぞの月見は。伊左吉田やと。また思ひだす。九けんのおそび。これも一生のとくおやぞやと。石や  
うへ木や。つくるきく月。かねでするのが町のすきとや。みなかたはしに。まはりまへば。船入見よかと。は  
しの下見りやかきわり船や。さこは市とおとなも子供もお。こかたけて。五かも十かも。かふてもどるも。ほ

んに千貫つよいおかたや。もつも志はく。あせをふきやの。ほりぬきいづみや。またあるときは。お午かこつ  
け。す、められつ。ツイ志きのちや。たれもよかろと。なんちぞめいて。生洲大輿のかどを通れば。はなや  
ひこくかいでたまらずとびこむ。のちにやふざけて。ほんのそこなし。はや十ふんに。けまであこなり。つけ  
をはらふた。きやくのかずく。どもさんようは。出きぬ一イニウ三イ四引

〔編者曰ク原本コノ項板行ノママヲ二丁ニ貼付ケアリ茲ニハ其第一丁ノ表ノミヲ凸版ニセリ〕